

[七]

庶 <small>ニ</small> 幾 <small>ニ</small> 〔乎〕 □ _ニ	庶 <small>ニ</small> 〔乎〕 □ _ニ	幾 <small>ニ</small> 〔乎〕 □ _ニ
-------------------------------------------------------------	------------------------------------------	------------------------------------------

多分——であらう。
まづ——にちかい。

「庶幾」「庶」は、皆「チカシ」と訓み、連用は、「——ニチカカラン」となつて、ニから返讀し、カランを送る。これは、まさに近づき及ばうとする意味の語で、推量の意を多分に持つて居り、十中ノ八九マデ、多分サウダラウ。「ドウニカ、マヅ、——ニチカイ」といふやうに譯す。又全く推量の急とは別に「コヒネガフ」とよみ、「ドウカ」「ナニトゾ」と希望期待の意を表す場合もある。「幾」を返讀する時は、「チカシ」と訓み、副詞に訓む時には、「ホトンド」と訓むことに注意を要する。更にこの三つは、下に「乎」を伴ふ場合が多いが、これが歇尾詞の場合なれば、「チカカランカ」と訓むわけだが、前置詞の場合には、前述のやうに「——ニチカカラン」と訓むのが通則である。

博聞廣覽。在見識。且久經歷世變者。可以是非於古今。庶乎寡過。苟

見聞寡陋。涉世亦淺。而無見識者。未可以識天下古今之善惡也。

(慎思錄)

訓點 博聞廣覽、在見識、且久經歷世變者、可以是非於古今、庶乎寡過。苟見聞寡陋、涉世亦淺、而無見識者、未可以識天下古今之善惡也。

【語釋】「博聞」博く物事をきくこと。「廣覽」廣く讀書する。「見識」かんがへ。意見。「世變」世の推移變遷。「經歷」經てくること。經驗すること。「古今」古今の事柄。「寡陋」「寡」は、「衆」に對する語で、見聞の少いこと。「陋」は淺陋の義で、見聞の淺くい、やしいこと。「涉」歷ること。經驗の意。「識」識別する。見分ける。

【通解】學者が博く物事を聞き知り、廣く書物を覽て知るのには、其の見識を高めるにある。其の上に、久しい間世の移り變りを経験して來た者は、それによつて、古今の事柄の善惡可否を判斷することが出來て、殆ど過失がないといつてもよい位になるであらう。若し見たり聞いたりすることも少く、又世事の經驗も淺くて、自分の抱持する意見のない人は、まだ天下古今の善惡を確實に判知して、うまく之に處してゆくことが出來ないのである。

【補説】○「久經歷世變者」の「者」は、人の意。○「庶乎寡過」の「庶乎」は、下から返讀して、「——ニチカカラン」とよむ。「チカシ」は、「十中八九マデ多分サウダラウ」との推測の辭である。此の語は、「コヒネガハクバ」とよんで、「何卒」「ドウカ」と希望・期待の意を表はす場合があることも知らねばならぬ。「庶幾」としても同じである。○「苟」は、モシとよみ、假定の接續詞である。○「涉世亦淺、而無見識者」の「而」は順接であり、「者」は人の意である。

構文

全文が對偶法になつて居る。

苟

博聞廣覽、在見識。且久經歷世變者。可以是非於古今、庶乎寡過。

苟見聞寡陋、而涉世亦淺、

無見識

者、

未可以識天下古今之善惡也。

貧賤常思富貴。富貴必履危機。此古人所歎也。惟不思而得。既得而不思失之者。其庶幾乎。

訓點

貧賤常思富貴、富貴必履危機、此古人所歎也。惟不思而得、既

得而不思失之者、其庶幾乎。

【語釋】「履」危機。危險な目に遭ふ。「其庶幾乎」修養の完成に近い人と言はれよう。

【通解】貧賤の者は、常に富貴になりたいと希望してゐるが、併し、富貴の人は必ず危険な目にあふ。之を古人は歎いてゐた。たゞ、別に少しもほしいとも思はないのに富貴になり、又富貴になつても、之を失ふ事を氣苦勞に思はないでゐる位の人なら、それは大體に於て修養の完成に近い人と云はれよう。

【補説】○「貧賤常思富貴」の「貧賤」にニハを送り、「思」にモを送つて背反の意を表す。○「惟不思而得」の「惟不——」は、「副詞+否定助動詞」の形で、積極的否定即ち全部否定を表してゐる。「得」はエと連用形に訓み、ウと終止形にしてはよくない。○「其庶幾乎」の「庶幾乎」は、「チカカランカ」と訓み、「チカイコトデアラウ」、「十中の八九マデサウデアラウ」と推量に譯す。

學者必由是而學焉。則庶乎其不差矣。(小學)

訓點

學者必由是而學焉、則庶乎其不差矣。

【語釋】「是」この書物。「差」學修の目的に相違すること。

【通解】學問を修めようとする人が、必ずこの書物によつて學んだならば、學問修業の目的に恐らく違はな

いであらう。

【補説】○「學者」は、「學ブ者」と訓み、書生を意味してゐるのであつて、所謂完成された學者ではない。○「由是而學焉」の「是」は、見當の上から書物の代名詞であると見なければならぬ。「學焉」は「ココニマナババ」と假定條件に訓み、「焉」は上の「是」をうけて書物を指してゐる。○「庶乎其不差矣」の「庶ニ乎」は、「ニチカカラン」とよみ、推定の形式である。更に「矣」があるから何うしてもチカシとは訓まれないのである。

147

不塞不流。不止不行。人其人。火其書。廬其居。明先王之道。以道之。饒寡孤獨廢疾者。有養也。其亦庶乎其可也。(文章軌範)

訓點

不_レ塞_レ不_レ流_レ。不_レ止_レ不_レ行_レ。人_ニ其_レ人_ニ。火_ニ其_レ書_ニ。廬_ニ其_レ居_ニ。明_ニ先_レ王_ニ之_レ道_ニ。以_レ道_ニ之_レ。饒_レ寡_レ。孤_レ獨_レ。廢_レ疾_レ者_ニ。有_レ養_レ也_ニ。其_レ亦_レ庶_ニ乎_レ其_レ可_レ也_ニ。

【語釋】「不塞不流、不止不行」は、佛教や道教等の異端についていふ、「流」「行」は孔子や孟子の儒教についていふ。「人其人」は道士や僧侶を還俗させる。「廬其居」は佛寺や道觀を改造して人民の住居とする。「庶」は家の意。「道」は同じ。「饒寡・孤獨・廢疾之者」は「饒」は、老いて妻なき者で、寡婦即ちやもめ。「孤」は、幼にして父無き者で、孤兒即ちみなしご。「獨」は、老いて子無き者で、獨夫即ちひとりもの。「廢疾」は、人前に出られぬ業病に罹つたもの。

【通解】佛教や老子の説を塞がなければ、吾が聖人の道は流布しないし、佛・老の説を禁止しなければ、吾が聖人の道は盛行しない。そこで、法令を發布して道士・僧侶を還俗させ、佛・老の書を燒却して之を廢滅し、その佛寺や道觀を毀つて平人の住宅となし、その後、吾が古先聖王の道を明かにして、天下の人民を教導したならば、これで、邪説に迷つて居る者もどうやら迷から醒め、よるべき饒寡や、寡婦や、孤兒や獨夫や、因果な業病に罹つてゐる者までも、救ひ上げられるであらう。然らば、天下の人民も亦幸福で、先づは大體に於て可なりといふことも出来よう。

【補説】○「不塞不流、不止不行」を二つに分けた形である。「不——不——」を「——ザレバ——ズ」と訓む二重否定の形式に注意を要する。○「人其人」の上の「人」にトシを送ることは考へるべき點である。○「以道之」の「以」は「用」の意で、上の「明先王之道」を使用しての意である。又此は假定上の事だから、「道」にバを送つて假定條件の意を表さねばならぬ。○「有養也」の「有」には、ンを送つて推量にし、上の假定條件を結ぶ。「養」を意味の上から受身にしてルルを送る。

構文

不塞不流。
不止不行。

人其人、

火其書、

廢其居、

明先王之道、以道之、

錄寡

孤獨

者、有養也。

其亦庶乎其可也。

子之子孫。坐斯亭。觀斯水。每思子業之如斯也。則庶幾能守其成。不窮不盡。與筑後河始終乎。吾將以此爲記。嗚呼。此豈止子龍家爲然。大於子龍家者。亦得吾說思久。無往不如斯也。(頼山陽「如斯亭記」)

訓點

子之子孫、坐^{シテ}斯亭、觀^ス斯水、每思^ニ子業、如^シ斯也、則庶幾能守^ル其成、不窮不盡、與筑後河始終^ス乎。吾將^ニ以此爲記、嗚呼、此豈止子龍家爲^レ然。大^ニ於子龍家者、亦得^ニ吾說思久、無往不如^レ斯也。

【語釋】「子」 山田子龍をさす。子龍は豊後國の日田の人。筑後河に臨んで亭を作り、山陽に其の亭の命名を請ふ。山陽は之に如斯亭と名づけた。【斯水】 筑後河をいふ。「斯」は「此」に同じ。【始終】 始から終りまで運命を共にする意。

【通解】 子龍(山田子龍)の子孫が此の亭に坐つて、此の筑後河の流を見て、常に子龍の事業が此の河の流れのやうであることを考へたならば、恐らくよく其の成功した事業を守つて、窮まることなく、盡きることなく、悠久無限に流れてやまぬ筑後河と運命を等しくするであらう。自分は此の言を以て記しようと思ふ。あゝ、此はどうして、たゞ子龍の家を左様であるとすればかりであらうか、さうではないのである。世間に於て子龍の家より盛大なものも、亦此の自分の意見を考へてみたならば、如何なるものにあてはめてみても斯様でないものはないのである。

【補説】 ○「庶幾——乎」は、「チカカランカ」と訓み、「庶幾」と「乎」が呼應してゐる形であることに着眼すれば、「庶幾」の管到して居る部分に迷ふ心配はなくなると思ふ。○「豈止子龍家爲然」は、「豈」によつて反語形をなし、而も副詞「止」によつて意味が限定され、「アニ、タダニ子龍ノ家ヲ然リト爲スノミナラシヤ」と訓む。特に「止」を「タダニ」と訓み、「爲」に、「ノミナラシヤ」の假名を送ることに注意することが緊要である。○「大於子龍家者」の「於」は比較を表す前置助詞であるから、「家」にヨリを送る。○「無往不如斯也」の「往」にトシテを送ることに注意が要る。

〔三〕

或

□

□

ナラシ

事によると、——となるであらう。
とかく——がちである。
もしかすると、(そんなことが)あるかも知れない。
時には——もある。

「或」は、「アルヒハ」と訓み、ハを送り、推量の助動詞「ラン(ラム)で結ぶことが多い。そして「事ニヨルト、——トナルデアラウ」、「モシカスルト、(ソナナコトガ)アルカモ知レナイ」とか、又は、「往々」の意に譯して、「トカク——ガチデアル」となる。「或——或——」の形の時には、「中ニハ——者モアル」、「時ニハ——モアル」、「——モアリ、——モアル」と、兎角萬一の場合を疑ひ推測する場合に用ひる。又「或曰」の形では、屢「アルヒト」と訓んで、「或人曰」の略と見ることがある。又、下から返讀して「アリ」とも訓み、「有」と同じに用ひられることもあるから注意を要する。

149

譽者。或過其實。毀者。或損其真。此衆人所毀譽之常情也。況小人奴婢之毀譽。或因有私昵舊恩。或因有私怨宿懣。概皆自私自意所發。而不足以爲信耳。大率聞毀譽。而精察不迷眩者。可謂明也。(慎思錄)

訓點

譽者。或過其實。毀者。或損其真。此衆人所毀譽之常情也。況小人奴婢之毀譽。或因有私昵舊恩。或因有私怨宿懣。概皆自私自意所發。而不足以爲信耳。大率聞毀譽。而精察不迷眩者。可謂明也。

【語釋】「實」實際の事實。「小人奴婢」小人は學徳の低劣な俗人。「奴婢」は下男下女。「私昵」一個人としての私の親み。「私怨宿懣」私怨は一個人としての私の怨恨。「宿懣」は、古くからの怨み。「迷眩」迷ひくらむこと。

【通解】人を譽める者は、兎角其の事實以上に無闇と譽めそやす事があり、人を毀る者は、兎角其の真相を傷つけてまで人の悪口をいふ事がある。これが一般常人の人を毀つたり譽めたりする場合の普通の状態である。まして、つまらぬ人物や下男下女などのやうな教育のない賤しい者が、人を毀つたり譽めたりするのは、尙更さうであつて、或者は私の親みだの、昔の恩義だがあるために其の人を譽め、或者は私の怨みだの、昔からの遺恨だがある爲に其の人を毀るといつた風に、大抵は、皆私意私情から出るのであつてそれをもつて信ずべきものと爲すに足りないのである。大體、人が毀つたり譽めたりするのを耳にした時、よく其の真相を精察して、其の爲に心が迷ひ目が眩むやうな事のない人は、理智の明のある人物と稱してよいのである。

【補説】○「譽者」「毀者」の「者」は、ヒトの意である。○「或過其實」「或損其真」の或は、往々の意で、

「スルコトガアル」「トカク」ガチデアアル」の意である。○「此衆人所毀譽之常情也」「此の——也」は、理由原因を説明する一形式である。○「況小人奴婢之毀譽」の「況」は、上句の「衆人所毀譽之常情」に對して、「小人奴婢之毀譽」を出したのであるから、其の下に「乎」の省略を認め、「況——乎」の形であるものとして、更にその下に、ソレハといふ主語の省略を認めることによつて、ほんとに文の筋が通ることになる。「況——（乎）」は抑揚の形式である。○「或因有私昵舊恩或因有私怨宿愬」の「或」は、二つともに或人の意に解しなくてはならない。○「概」「大率」は、共にオホムネと訓み、「大抵ハ」「大體」の意を示す推定形に用ひる。○「自私自意所發」の「自」はヨリと訓み、「カラ」の意で、起點を表してゐる。「不足以爲信耳」の「耳」は、強い斷定の意を表す。「全ク——デアアル」の意である。

構文

對偶法によつて居る。

譽者或過其實、
毀者或損其眞。
此衆人所毀譽之常情也。

況小人奴婢之毀譽、
或因有私昵舊恩、
或因有私怨宿愬、
皆自私自意所發、
不足以爲信耳。

大率聞譽而精察不迷眩者、可謂明也。

可擊之機。其間不容髮。急則未及其機。緩則已過其機。過不及於機。則機之可以勝者。或足以自敗。是則所謂隨時與處而變者矣。是故。毛利氏北條氏之用緩。非緩也。織田氏之用急。非急也。其爲不失機一也。（日本政記）

訓點

可^カ擊^キ之^ノ機^キ。其^ノ間^ノ不^レ容^レ髮^ハ。急^ニ則^チ未^ダ及^バ其^ノ機^キ。緩^ニ則^チ已^ダ過^リ其^ノ機^キ。過^リ不^レ及^バ於^テ機^キ。則^チ機^キ之^ノ可^ク以^テ勝^ル者^ハ。或^ハ足^ル以^テ自^ラ敗^ル。是^レ則^チ所^レ謂^フ隨^フ時^ニ與^リ處^ニ而^シ變^ル者^ハ矣。是^レ故^ニ。毛^リ利^シ氏^ノ・北^ノ條^シ氏^ノ之^ノ用^フ緩^ク。非^シ緩^ク也。織^ノ田^シ氏^ノ之^ノ用^フ急^ク。非^シ急^ク也。其^レ爲^ス不^レ失^フ機^キ一^ト也。

【語釋】「擊」撃ち破る。「機」機會をいふ。「間不容髮」一筋の毛髪をも容れる隙間のないこと。事の非常に急なる意。「緩」緩慢な手段に出ること。「過其機」其の機會を逸してしまふこと。「過不及」過ぎたこともなく、及ばぬこともないやうに、中庸を得ること。

【通解】敵軍を撃破すべき機會といふものは、一筋の髪を容れる隙もない程に急速にやつてくるものである。然しながら、急にすると其の敵を撃破すべき機會に及ばないし、緩慢であると其の機會を逸してし

まふものである。又擊破すべき機会に過ぎても、機会に及ばなくとも、いづれの場合も皆勝つべき機会を失つて、當然勝つべき戦であるものが、時によると、自分の方から敗れてしまふことも出来ることであらう。これが前に述べたところの、機会なるものは、時と處とに隨つて形勢の變るものであるからである。かういふ譯で、毛利氏や北條氏が緩かな手段を用ひたのは、實は緩かではなかつたのである。又織田氏が急な手段を用ひたのは、實は急ではなかつたのである。かやうに或は緩、或は急を用ひたのは、其の機会を失はたい爲にしたのであるといふ點は、要するに同一である。

【補説】○「其間不容髮」は、其の間寸隙なく、事の急迫せる險である。○「或足以自敗」の「或ハ」は、推量の意を表す。○「是則所謂隨時與處、而變者矣」の「是」は、理由を説明する形である。

○「是故」は、「是以」と同様に推理的接續詞である。○「毛利氏・北條氏」では、並列點「・」を忘れないうやうに。

構文

可擊之機、其間不容髮。(主意)

急則未及其機。過不及於機、則機之可以勝者、或足以自敗。
緩則已過其機。

是則所謂隨時與處而變者矣。

是故、
〔毛利氏〕之用緩、非緩也。
〔北條氏〕之用急、非急也。
其爲不失機一也。

〔室〕

恐 ラクハ
□ オヘン

多分——であらう。
事によつたら——かも知れん。
或は——かも知れん。

「恐」は、「オソラクハ」と訓んで、ラクハを送り、必ず推量の助動詞「ラン(ム)」で結ぶ。そしてその意味は、「恐ラクハ——ニテアラン」即ち「多分——デアラウ」と解し、「或」と殆ど同様に用ひられる。これは又、下から返讀して、「恐——」とし、「——ナランコトヲ恐ル」と訓むことも出来る。

登山嶽。涉川海。走數十里。有時乎露宿不寐。有時乎饑不食。寒不衣。此是多少實際學問。若夫徒爾明窓淨几。焚香讀書。恐少得力處。

(言志錄)

訓點

登山嶽、涉川海、走數百里、有時乎露宿不寐、有時乎饑不食、寒不衣。此是多少實際學問。若夫徒爾明窓淨几、焚香讀書、恐少得力處。

【踏渉】 踏渉すること。

【露宿】 野宿。「露」は暴露の意。

【不寐】 寝つくことの出来ないこと。

【寒】 凍え寒さを感じる事。「徒爾」 いたづらに。「爾」は、助字で意味なし。

【明窓淨几】 採光の十分な明るい窓と、塵を拂つた清い机をいふ。「几」は、机。

【過解】 旅行して或は山に登つたり、或は川や海をわたり、五六十里から百里もあるやうな遠くまで出かけるとする。其の間に或時は野宿して十分の睡眠もとらず、或時は腹が空いても食ふものもなく、寒くても着る物がないといふことがある。これこそ多くの實際上の學問である。かの明るい窓の下、綺麗な机の上で、いたづらに香を焚いて書物を読むやうな贅澤な學問のやり方では、大抵は眞の學問の力を會得すること

とが少いだらうと思はれる。

【補説】 ○「數百里」は、數十里から百里までの意、即ち數十里乃至百里の意である。數十里・百里とか、百數十里とか、何十里とかいふやうな誤譯をしてはいけない。○「有時乎」は、「時有りテカ」とよみ、

「場合ニヨツテハ」「或時ニハ」の意とする。○「寒」は、ヤ行下二段の動詞であるから、送假名は「エ」

であるべきである。よく誤るから注意を要する。○「此是多少實際學問」の「此是」は、「此レハ是レ」と

よむ。「此」は指示代名詞、「是」は詠歎の詞である。「此レ是ノ」と誤讀してはいけない。「多少」は、「多」が主意で、「少」は帶説で意味はない。恰も「一旦緩急」の「緩」のやうなものである。「若夫」は、「カノ」(ノ)ゴトキハ」と訓み、「夫」は下の句を指して居る。これを「モシソレ」と訓むのは

よくない。○「恐少得力處」の「恐」は「恐ラクハ」とよみ、推量の助動詞「ラン」が、「ジ」の推定

して打消す助動詞を送つて結ぶのが普通である。

構文

對偶法と重疊法との併用である。

登山嶽、

涉川海、

有時乎露宿不寐。

有時乎饑不食。

此是多少實際學問。

若夫徒爾

明窓

淨几、

焚香

讀書、

恐少得力處。

若夫徒爾

明窓

淨几、

焚香

讀書、

恐少得力處。

陶侃爲廣州刺史。在州無事。輒朝運百甕於齋外。莫運於齋內。人問其故。答曰。吾方致力中原。過爾優逸。恐不堪事。其勸志勤力。皆此類

也。(小學)

訓點 陶侃爲廣州刺史、在州無事、輒朝運百甓於齋外、莫運於齋內。人間其故、答曰、吾方致力中原、過爾優逸、恐不堪事。其勸志勤力、皆此類也。

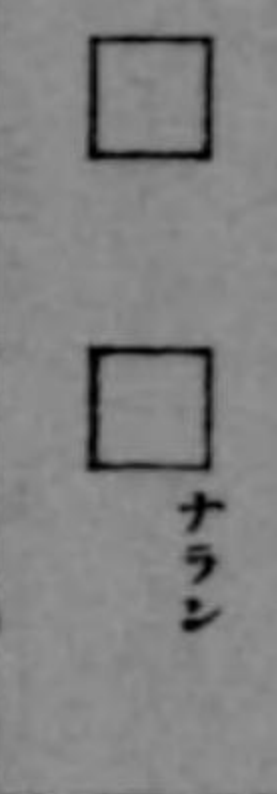
【語釋】「陶侃」字士行。晉の明帝の時の人。【廣州刺史】「廣州」は、今の廣東省廣州府。「刺史」は地方長官で、我が國の縣知事のやうなもの。【輒】その度毎に。【百甓】「甓」はしきがはら、「莫」暮に同じ。「莫」は古字。【齋】部屋。【致力中原】「中原」は、國の中心となるべき主要な地方をいふ。當時の中原は揚子江以北にあたる。併しこゝは天下の意。【過爾】何もしないで時を過す貌。【優逸】のんびりと遊び楽しむ。

【通解】陶侃は廣州の長官となり、その役所に居つて用事のない時には、いつでも、朝の間は、百個の甓瓦を居室の外に運び出し、夕方には、之を居室の内に運び込んで居た。人が怪しんで「なぜ、そんなことをするのか。」と問うたところ、陶侃は答へて、「自分は、今正に天下の爲に大いに働かんと思つてゐる。然るに、何もしないでのんびりと時を過してゐたら、まさかの時になつて、或は役に立たないかも知れぬから、それで、今から労働に堪へられるやうに、練習をしてゐるのである。」といつた。彼が自ら志氣を勵まし、努力を勤めたことは、すべてからいふ風であつた。

【補説】○「莫運於齋内」は、「運」の下に目的語「之」(百甓)を省略した形である。○「恐不堪事」は、「恐ラクハ事ニ堪エザラン」と訓むが、或は又、「恐レ不堪事」と返點を施して、「事ニ堪エザランコトヲ恐ル」と下から返讀してもよい。

〔蓋〕

蓋



思ふに——であらう。
多分——であらう。

「蓋」は、「ケダシ」と副詞に訓み、シを送り、多くの場合は「——ナラン」と推量形で結ぶ。多分——デアラウ」「思フニ——デアラウ」の意で、大まかにそれを推しよめるため、さうに違ひないときめてかかる趣の語である。だから下に必ず推量の語を用ひるとは限らない。斷定的な訓み方で続けることも珍しくない。

尙「蓋」が正字で、「蓋」は俗字である。

心清時少。亂時常多。其清時。視明聽聰。四體不待羈束。而自然恭謹。其亂時反是。如此何也。蓋用心未熟。客慮多。而常心少也。習俗之心未去。而實心未完也。(近思錄)

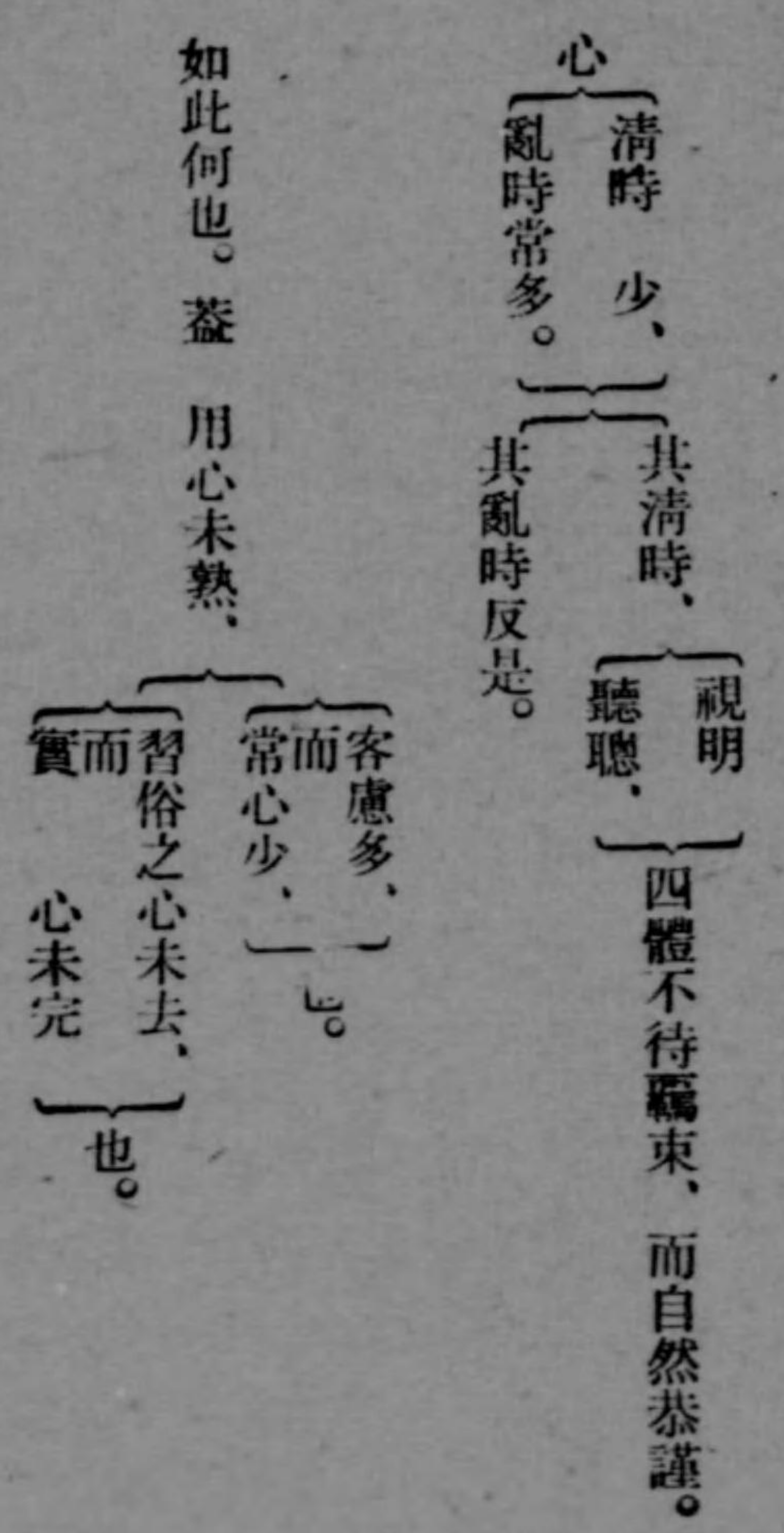
訓點 心清時少、亂時常多。其清時、視明聽聰、四體不待羈束、而自然恭謹。其亂時反是。如此何也。蓋用心未熟、客慮多、而常心少也。習俗之心未去、而實心未完也。

【語釋】「清」心の清静なること。「澄」に同じ。「亂」濁り動くこと。「清」の反對。「視明」目で物事を正しく見ること。「聽聰」敏し。他人の言の早く理解會得されること。「四體不待羈束」手足が外部からの束縛を待たないこと。「恭謹」心が恭しく謹むこと。「亂時反是」視聽も暗く塞がり、四肢もほしいまゝであること。「用心」存養の工夫。「熟」十分なこと。「客慮」しかと定まらぬ心。恰も旅客の如き心持をいふ。「常心」五常の本心をいふ。一説は、一定不變の心をいふ。「習俗之心」なれそめた凡俗の心。「實心」道理に従ふ眞實の心。

【通解】人の心は、清らかに澄んで居る時は少く、反對に亂れ濁つて居る時は常に多い。其の心が清く澄んで居る時は、視ることも明かで暗からず、聽くこともさとして惑はず、身體は外部からの束縛を受けずして、自然に恭しく謹む状態になつてくる。ところが、心の濁り亂れてゐる時は、之とは反對で、視ることも暗く、聽くことも塞がり、身體も怠り放漫に流れるものである。此のやうな事になるのは何故であるか。思ふに存養の工夫がまだ熟せず、しかと定まらぬ思慮が多くて、五常の本心が少いからであらう。從來の凡俗の風に馴れ染んだ心がまだ去らないで、義理を好む誠實の心がまだ十分でないからである。

【補説】○「視」聽」は、共に動詞を名詞に用ひた場合である。○「不待羈束而自然恭謹」の「而」は、順接である。○「如此何也」の「何也」は、疑問形である。「也」は疑問の歎尾詞である。○「少也」「未完也」の「也」は、「レバナリ」とよんで、理由を説明する形である。且つ「少也」は、「蓋」によつて、「少ケレバナラン」と訓むことに細心の注意が要る。

構文 大體對偶法式によつてゐる。



天池之濱。大江之濱。曰有怪物焉。蓋非常鱗凡介之品彙匹儔也。其得水。變化風雨。上下於天地。不難也。其不及水。蓋尋常尺寸之間耳。無高山大陵曠塗絕谷。爲之間隔也。然其窮澗。不能自致乎水。爲猿獼之笑者。蓋十八九矣。(文章軌範・韓愈「應科目時與人書」)

訓點

天池之濱・大江之濱、曰有怪物焉。蓋非常鱗凡介之品彙匹儔也。其得水、變化風雨、上下於天地、不難也。其不及水、蓋尋常尺寸之間耳。無高山大陵・曠塗絕谷、爲之間隔也。然其窮澗、不能自致乎水、爲猿獼之笑者、蓋十八九矣。

【語釋】「天池」海のこと。大洋。「濱・濱」共に水際。「曰」此處に。「常鱗凡介」凡常の鱗介。即ち普通の魚類や貝類。「品彙匹儔」品類比類のこと。たぐひ、仲間のこと。「尋常」八尺を「尋」といひ、その二倍を「常」といふ。こゝでは僅かの距離をいふ。「曠塗絶谷」廣々とした。曠野や、険しい溪谷。「窮澗」窮屈涸渴。餓に苦しみ、咽喉がかはくこと。「猿獼」かはう、その類。「獼」は「類」の小さいもの。

【通解】果しない大海のほとり、廣々とした江河の流の際に、一つの怪物(龍)が棲んでゐる。察するに、それは決してありふれた魚や平凡な貝類のたぐひ仲間ではないのである。若しもそれが一步水に轉じ得たならば、風雨の中に姿を變化し、天地間を上下すること位は何でもないのである。ところが肝腎の其の水への手届かぬ距離は、思ふに僅々數間數尺の間だけであつて、その間には、別段之を遮斷するやうな山も岡もなく、又廣い野原も深い谷もないのである。なのに、如何した不運か、僅かの距離の水際に居ながら、水を得ないばかりに、餓ゑ溺して、自分が自分の力で水の方に行くことが出来ない。それ故に、此の怪物も空しく他のつまらぬ川うそ其のやうなものにまで、嘲笑されることが毎々であつて、思ふに實に十の中で八九分通りまでは、殆んどその通りであらう。甚だ残念至極の次第である。

【補説】○「曰有怪物焉」の「曰」を「コ」ニと副詞に訓む。殆ど見られない訓讀であるから、よく注意しておいてほしい。○「其得水」の「得」に「バ」を送り、假定條件を表す。○「變化風雨」の「雨」に「ニ」を送つて、「風雨ニ變化シ」と訓み、「風雨ノ中ニ自ラノ姿ヲ變化スル」の意である。これを「風雨ヲ變化シ」と訓み、「氣象ヲ變化シテ風雨ヲオコス」と考へられ易いから、誤らないやうに注意を要する。○「蓋十八九矣」は、「蓋シ十八九ナラン」と訓む。そして「思フニ十ノ中ノ八九マデガサウデアラウ」の推定の意に譯さなくてはならぬ。「十八九」の「十」に「ニ」を送ることに十分意を拂はねばならぬ。○全文が隱喩法によつて書かれてゐる。即ち、此の「怪物」は作者の韓愈自身に喩へ、「常鱗凡介」や「猿獼」などは、他の受験生、試の小人共に喩へてある。「天地之濱・大江之濱」は、いはゞ試験場で、他の小人共は上手に當路の役人に取

訓點 唐、英、公、李、勣、貴、爲、僕、射、其、姊、病、必、親、爲、然、火、煮、粥、火、焚、其、髮、姉、曰、僕、妾、多、矣、何、爲、自、苦、如、此、勣、曰、豈、爲、無、人、耶、願、今、姉、年、老、勣、亦、老、雖、欲、數、爲、姉、煮、粥、復、可、得、乎、

【語釋】唐の英國公。【僕射】唐で宰相の位をいふ。【然】「燃」に同じ。【焚】焼く。

【通解】唐の英國公李勣は、宰相の貴い地位に在つた。其の姉が病氣に罹つたとき、必ず自分で病む姉の爲に、火をたいて粥を煮て供した。その時、自分の糞を燃やした事がある。そこで姉が、「下男下女が澤山居るのに、何うして自分で苦んで粥を煮たりするのですか」といふと、勣は、「自分が粥を作るのは、何うして使ふ人が居ない爲であらうか。決して左様ではない。考へて見ると、今や姉上は老年となられ、自分も亦老いました。だから、度々姉上の爲に粥を煮て進上しようと思つても、ふたたび出来ませうか、それは出来ないことでありませう」といつた。

【補説】○「貴爲僕射」の「爲」は、タリと訓む。○「然火」の「然」はモヤスと訓む。「燃」は後代の文字で、「然」は古い文字。莫が古字で、暮が新字であるのもその一例である。何れも古字が正しく、新字は、卻つて不要の「火」「日」を加へた形になつて居る。○「何爲」は「何スレタ」と訓む。○「願復可得乎」は「願フニ——マタ得ベケンヤ」とよみ、推定の形であり、更に又「復可得乎」の「復——乎」は反語の形を示してゐる。

予時尙少。心壯志得。以爲洛陽東西之衝。賢豪所聚者多。爲適然耳。其後去洛來京師。南走夷陵。並江漢。其行萬三四千里。山阻水厓。窮居獨遊。思從曩人。邈不可得。然雖洛人。至今皆以謂無如嚮之時盛。然後知世之賢豪不常聚。而交遊之難得。爲可惜也。(唐宋八家文)

訓點

予、時、尙、少、心、壯、志、得、以、爲、洛、陽、東、西、之、衝、賢、豪、所、聚、者、多、爲、適、然、耳、其、後、去、洛、來、京、師、南、走、夷、陵、並、江、漢、其、行、萬、三、四、千、里、山、阻、水、厓、窮、居、獨、遊、思、從、曩、人、邈、不、可、得、然、雖、洛、人、至、今、皆、以、謂、無、如、嚮、時、之、盛、然、後、知、世、之、賢、豪、不、常、聚、而、交、遊、之、難、得、爲、可、惜、也、

【語釋】【衝】交通の要路。【京師】開封をさす。【走】行くこと。【並】沿ふに同じ。【江・漢】揚子江と漢水。【阻】土山の石を戴くものをいふ。【厓】水の際をいふ。【曩人】先の知人。「曩」は音「ノウ」。

【通解】自分はその時年若く、尙心は盛んであつて、まだ得意であつた。だから考へることは、「洛陽の都は東西交通の要路で、賢人豪傑の聚まる者が多く、此處は何時も斯様な處であるのだらう。」と思つただけ

で別に意に留めなかつたが、其の後洛陽を去つて京師即ち開封に行き、それから南の方夷陵に赴いて、揚子江と漢水に沿うて行くこと、一萬三四千里であつて、石の山、水の際にわび住居して獨り淋しく遊んでゐたので、先の知人と一緒に遊ばうと思つたけれど、今は皆死んで、それも出来ない。さりながら、淋しいのは自分一人ではない。洛陽の人でも今日に至るまで、皆「養の盛時のやうにはゆかないだらう。」と思つてゐる。此のことから考へて、世の賢豪といふ者は、何時も聚合する者ではない、さうして交遊の士といふ者は容易に得られない、誠に惜い事であるといふ事を悟つた。

【補説】「以爲」は、「爲適然耳」までかゝる。「爲適然耳」は、「タマタマ然ルナラント爲スノミ」と訓む。「適」に通字「ミ」を送り、「然」にナランを送つて、「以爲」に呼應させることに注意を要する。「南走夷陵」の「南」にノカタを送る。「雖」は、假定である。「至今皆以謂、無如養時之盛」の「以謂」は、二字でオモヘタクと訓む。「謂」と「爲」とは普通で、「謂」の字はナスとも訓むことがある。「無」にはランを送つて推量形にすることを忘れてはならぬ。「不常聚」の「不常」の形に注意することが肝要である。これは、一部否定を示すものである。

構文

予時尙少、
心壯、
志得、
以爲洛陽、
東西之衝、
賢豪所聚者多、
爲適然耳。

其後、
去洛來京師、
走夷陵、
南、
並江漢、
其行萬三四千里、
山砮、
水厓、
窮居獨遊、思從養人、邈不可得。

然雖洛人、至今皆以謂、無如養時之盛。

不常聚、
而、
交遊之難得、爲可惜也。

吾意周公輔成王。宜以道從容優樂。要之歸大中而已。必不逢其失。而爲之辭。又不當束縛之。馳驟之。使若牛馬然。急則敗矣。且家人父子。尙不能以此自克。況號爲君臣者耶。(文章軌範)

訓點 吾意、周公、輔成王、宜以道從容優樂、要之歸大中而已。必不逢其失、而爲之辭、又不當束縛之、馳驟之、使若牛馬然、急則敗矣。且家人父子、尙不能以此自克、況號爲君臣者耶。

家人父子、尙不能以此自克、況號爲君臣者耶。

【語釋】【周公】名は且。周の文王の子で武王の弟。武王の子の成王を輔けて功があつた。【從容優樂】しとやかにして迫らず、ゆつたりとして面白く楽しむ。【大中】中は中庸の道。【失】過失。あやまち。【辭】通辭、にげことば。【束縛】しめくくつて自由にさせないこと。【馳騁】止まつて居るのを無理に走らせること。【自克】自ら堪え忍ぶ。

【通解】自分は考へて見るのに、聖人と思はれる周公が成王を輔佐せられるには、宜しく正しい道を以てして、しとやかに優しく樂しげに導き、成王を大なる中庸の道に歸著せしめたに外ならない。きつと其の過失につけ込んで、その過失について逃口上を作らせるやうなことをせず、又、遊びたがるのを無理にしめくくつて自由にさせないやうにし、道に向はせる爲に、無理に驅り出すやうな牛馬に等しいことをさせるのは宜しくないことは當然のことである。急ぐといふと、きつと失敗するであらう。その上、一家の中で親しい父子の間柄でも、こんなに束縛馳騁されたら、自ら堪へ忍ぶことが出来ないのに、況してや、義を以て結ぶ君と臣との間柄では、こんなことは爲すべきで無い。

【補説】○「宜以道從容優樂、要之歸大中而已」の「宜」は指定形式の一。「要之歸大中而已」は、要ハ之ヲシテ大中ニ歸セシム(ベキ)ノミと訓む。「之」にヲシテを送つて使役の形にすることに注意を要する。随つて、「歸」にセシムを送つて、「之」に呼應させねばならぬ。「而已」は二字でノミと訓み、限定の意を表すものである。此の二句即ち「宜——而已」の中には、「宜」が指定形、「之」が意味の上からの使役

形、「而已」が限定形を示して居ることになつてゐるから、よく考究しなければならぬ。○「急則敗矣」の「急」に「ナラバ」を送つて假定形に訓む。之に呼應して「敗」にはンを送る。「且家人父子」は、「且」とあるよつて、スラを送ることを忘れてはならぬ。「況號爲君臣者耶」の「況——耶」は抑揚形であるから、そのつもりで譯讀することを要する。

講文

吾意周公輔成王、宜以道從容優樂、要之歸大中而已。

逢其失、

必不而

爲之辭。

束縛之、

又不當

馳騁之、使若牛馬然。

急則敗矣。

且家人父子、尙不能以此自克、
況號爲君臣者耶。

列子曰。伯牙善鼓琴。鍾子期善聽。伯牙鼓琴。志在高山。子期曰。善哉。峩峩乎若泰山。志在流水。子期曰。善哉。洋洋兮若江河。伯牙所念。子期必得之。呂氏春秋曰。鍾子期死。伯牙破琴絕絃。終身不復鼓琴。以爲無足爲鼓者。(蒙求)

訓點

列子曰、「伯牙善鼓琴、鍾子期善聽、伯牙鼓琴、志在高山、子期曰、「善哉、峩峩乎若泰山。」志在流水、子期曰、「善哉、洋洋兮若江河。」伯牙所念、子期必得之。」呂氏春秋曰、「鍾子期死、伯牙破琴、絕絃、終身不復鼓琴、以爲無足爲鼓者。」

【語釋】「列子」春秋時代に、列禦寇の著した書物の名。老子の思想系統の書である。「峩峩乎」山の高大な形容。「巍巍乎」同じ。「洋洋兮」水の盛大な形容。「兮」は「乎」と同趣の語で、こゝでは訓まない。

【通解】列子といふ書物に、「伯牙は琴を弾くことが上手で、鍾子期は又實によくその音色を分き分けた。伯牙が琴を弾くのに、其の念ひが高山に在ると、鍾子期は、「あゝよい音色だ、峩々として高大なことは、

泰山のやうだ。」と曰ふ。其の念ひが流水に在ると、鍾子期は、「あゝ、よい音色だ。洋々として盛大なことは、楊子江や黄河のやうだ。」と曰ふ。斯くして伯牙の思ふことは、鍾子期が必ずそれを悟つて、音色を聴き分けてちゃんと言ひ當てたものだ。」と書いてある。又、呂氏春秋といふ書物には、「鍾子期が死ぬと、伯牙は琴を破壊し、絃を絶ち切つて、一生二度と琴を弾かなかつた。鍾子期が死んでは、もう弾いて聞かせるに足る人は無いと思つたのであらう。」と書いてある。

【補説】○此の文は親友の事を「知音」といふ、その言葉の典拠である。○「鼓琴」の「鼓」は音は「コ」、調は、「ツツミウツ」であるが、「鼓ス」と動詞にも用ひられる。こゝでは「琴ヲ鼓ス」では具合が悪いし、それといつて又、「琴ヲツツミウツ」では益々面白くない。それで、意味の上からヒクと訓んで弾と同じに観るのがよい。○「不復鼓琴」の「不復」は、「否定助動詞+副詞」の形で、積極的打消即ち全部否定を表す。「不復鼓琴」と訓んでもよく、「二度トハ琴ヲ弾カナカッタ」の意である。○「以爲無足爲鼓者」の「以爲」は、二字で「オモヘラク」と訓み、ヘラクを送る。「爲」は「爲之」の「之」を省略した形である。「鼓」の下には「琴」の字を補つて見るがよい。此の句は、理由説明の形式を爲して居り、更に、推定の「以爲」によつて、推量形に結ばねばならないから、「無」にケレバナランと送るべきことに注意を要する。

構文

ほゞ對偶法によつて居る。

列子曰、

伯牙善鼓琴、
鐘子期善聽。

伯牙鼓琴、

志在高山、
志在流水、

子期曰、

峩峩乎、若泰山、
洋洋兮、若江河。

伯牙所念、

子期必得之。

呂氏春秋曰、

鐘子期死、

伯牙 ^{破琴、} _{絕絃、} 終身不復鼓琴。以爲無足爲鼓者。

第九章 抑揚形

抑揚形は、自分の云はんと欲する事を一時抑へて、然る後に述べんとする本義を示す形式、即ち換言すれば、揚げんが爲に先づ抑へ、抑へんが爲に先づ揚げて置く形式で、次の五種の場合がある。

ある。此の場合、「況」「且」「猶」「以」「而」などの語を以て其の意を表はしてゐる。

(一) 「況—乎」「矧—乎」「而況—乎」の形を用ひる場合。

(二) 「且—、況—乎。」の形を用ひる場合。

(三) 「猶且—、況—乎。」の形を用ひる場合。

(四) 「且—、安—哉。」の形を用ひる場合。

(五) 「以—、猶—、而—」の形を用ひる場合。

【矣】
況 ^ナ矧 ^ナ乎 ^ナ哉 ^ナ耶 ^ナ邪 ^ナ

まして—に在つては、尙更—である。
まして—は、いふまでもない。

「況」にヤを送つて「イハンヤ—ヲヤ」とよんで、上に述べた思想を承けて、「コレ—デスヲサウダノ

ニ、マシテコレノハ猶更サウダ。」といふ抑揚の思想を表したもので、マシテ——ニ在ツテハ、尙更——デアアル。「マシテ——ハ、イフマデモナイ。」と譯する。大抵の場合は「乎」を以て呼應するが、時によると「邪」「耶」「哉」を以てすることもある。此等は皆「ヤ」と訓み、そのまゝの假名を送る。尤も此の「乎」が省略されてゐる場合でも、「ヤヤ」と結ぶのを本則とするが、文が終止せず、急迫して下文に接する時は、「ヤヤ」と呼應することを省略する。古文には「矧」を用ひたものが多いが、「況」と同意である。苟も「況」「矧」がある以上は、それが何處までかゝるか、即ち何處に「乎」の字があるべきかは、構文上文義上是非とも考ふべき事であるから、其の考察の下に「乎」の字を發見し、又はそのあるべき位置に於て「ヤヤ」と承けて訓むやうにしなければならない。

159

蘇秦喟然歎曰。此一人之身。富貴則親戚畏懼之。貧賤則輕易之。況衆人乎。使我有洛陽負郭田二頃。豈能佩六國相印乎。(十八史略)

訓點

蘇秦喟然歎曰。此一人之身。富貴則親戚畏懼之。貧賤則輕易之。況衆人乎。使我有洛陽負郭田二頃。豈能佩六國相印乎。

【語釋】「蘇秦」戰國時代の縱橫家。【喟然】嘆くさま。【輕易】馬鹿にして侮る。【負郭田】「郭」は外

城、「負」は背。城下はづれにある田地をいふ。【頃】地積をはかる單位。百畝。【六國相印】「六國」は戰國時代の燕・齊・楚・韓・魏・趙をいふ。「相印」は大臣の印綬。

【通解】蘇秦はひどく嘆息して曰ふには、「前に困窮した時の蘇秦も、今の榮達した身の蘇秦も、同じく一身の蘇秦で、少しも變りはない。然るに、富貴であると親戚も之を畏れ尊敬し、貧賤であると親戚も之を輕んじ侮る。親戚ですら此の通りであるから、まして赤の他人にあつては尙更のことである。最初、若し、自分が洛陽の都の城下はづれの土地の二百畝ほどを所有してゐたとしたら、とても六ヶ國の大臣を兼ねるやうな出世は出来なかつたであらう。自分の今日あるは、全く貧賤のために努力した結果である。」と。

【補説】○「輕易」の「易」は音「イ」で、カロンズ・ヤスシの意である。「容易」の「易」はヤスシの場合のものである。音「エキ」の場合は、カハルの意となる。「變易」「易姓」の「易」はそれである。○「況衆人乎」の「況——乎」は、原則的な抑揚形を示したものである。○「使我有洛陽負郭田二頃」の「使——乎」は使役形による假定の形式を表したものであることに注意することが肝要である。○「豈能佩六國相印乎」の「豈——乎」は反語の一形式である。

構文

蘇秦喟然歎曰。

第九章 抑揚形

此一人之身、

富貴則親戚畏懼之、

貧賤則輕易之。

況衆人乎。

使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎。

160

燕趙古稱多感慨悲歌之士。董生舉進士。連不得志於有司。懷抱利器。鬱適茲土。吾知其必有合也。董生勉乎哉。夫以子不遇時。苟慕義彊仁者。皆愛惜焉。矧燕趙之士。出乎其性者哉。(唐宋八家文)

訓點

燕・趙古稱多感慨悲歌之士。董生舉進士。連不得志於有司。懷抱利器。鬱適茲土。吾知其必有合也。董生勉乎哉。夫以子不遇時。苟慕義彊仁者。皆愛惜焉。矧燕趙之士。出乎其性者哉。

【語釋】「感慨悲歌之士」國家社會の事を愛ひ、悲憤の涙に満ちた歌を歌つて、激越した感情をもち出す者。

【進士】「士の進んで爵祿を受くべき者」といふ意味で、官吏登用試験の一階級である。「連」幾度も。

【利器】鋭利な刃物のことであるが、ここではすぐれた才能をいふ。【強】「強」に同じ。強ひて努力すること。

【通解】燕や趙の國には、その昔國家社會の事を心配し、悲憤の涙に満ちた歌を歌つて、激越した感情をもち出すやうな者が多いと稱せられてゐる。今や董生は進士に擧げられても、幾度も志を上役人に得ないで、すぐれた才能を抱きながら、ふさぎ込んで、燕趙の地方にゆかうとしてゐる。燕趙の地方に行つたならば、自分はきつとその地が、董生と意氣投合するものがあるであらうといふことを信ずるのである。董生よ、どうか、しつかりおやりなさいよ。一體考へて見ると、お前が時世に遇はぬといふ事は、かりにも仁義に志してゐる者が、皆惜んでゐる事である。まして、燕趙の士は、天性から仁義に厚い者であるからには、尙更のことである。

【補説】○「燕・趙」は、同格の文字を並列してゐるのであるから、二字の間に並列點「・」を施すことを忘れてはならぬ。○「夫以」は、「カノオモフニ」と訓む。「ソレモツテ」など訓まぬやうに注意を要する。○「苟慕義彊仁者」は、副詞「苟」によつて、指定の形式の一を表してゐる。○「皆愛惜焉」の「焉」は、目的語として、コレヲと訓んでゆくのがよい。○「矧燕趙之士、出乎其性者哉」の「矧」即ち「イハンヤ」――「ヤ」なる抑揚の形式に注意すること。「乎」は起點を示す前置助詞でヨリと訓む。比較のヨリと混同してはならない。

弑逆大惡也。其爲罪也莫贖。其於人也不可容。其在法也無赦。法施於人。雖小必謹。況舉大法而加大惡乎。既輒加之。又輒赦之。則自侮其法。而人不畏。春秋用法。不如是之輕易也。(文章軌範・歐陽脩・「春秋論」)

訓 點

弑逆大惡也。其爲罪也莫贖。其於人也不可容。其在法也無赦。法施於人。雖小必謹。況舉大法而加大惡乎。既輒加之。又輒赦之。則自侮其法。而人不畏。春秋用法。不如是之輕易也。

【語釋】「弑逆」臣子の身でありながら、君父を害する無道極まる行爲をいふ。「贖」償ふこと。財貨等を以て罪を償ふこと。「容」容れ用ひる。許容すること。「在法」法律上から見たるの意。「施」執り行ふこと。「小」瑣細なこと。「謹」慎重に行ふこと。「大法」重刑といふやうなこと。「大惡」弑逆罪をいふ。「春秋」孔子の著。五經の中の一。「用法」褒貶賞罰の法を用ひたこと。「輕易」「ソンザイ」にすること。「易」は輕んじあなどること。音「イ」。

【通解】弑逆の罪は大惡である。其の弑逆の罪は金錢財貨を以て償ふことは出来ない。其の犯人としては世の中に容れられないものである。そして其の弑逆の罪は、法律上からも赦さるべきものではないのであ

る。元來法律を人に施し適用するには、どんなに些細なことでも必ず慎重に執行せらるべきものである。まして重刑を擧げて弑逆罪といふ大惡に加へる場合には、猶更慎重に扱はねばならない。それに今無造作に重刑を加へて置きながら、又無造作に之を赦すといふやうなことをしたならば、自分で其の法律を侮り輕んずることになつて法の尊嚴を失ひ、世人も輕く考へて畏れなからう。孔子の著された春秋に於て、褒貶賞罰の法を用ひられたのは、斯様な輕易なものではなかつたのである。

【補説】○「其爲罪也」「其於人也」「其在法也」の「也」は、本來は指定・決定を示す敬尾詞であるが、こゝでは、「ヤ」とよんで後置詞とする。○「不容」は「イレラレズ」とよんで、文意上から受身とすることに注意を要する。○「雖小必謹」の「雖」は「タトヒ、デアツテモ」の意として假定の意の場合である。○「況舉大法而加大惡乎」の「況」は「ハ」は、單なる抑揚の形式である。○「輒」は、タヤスクとよんで、輕率ニの意に解くことは、根柢事項の一として特に注意を要する。

構 文

重疊法と對偶法とを併用してゐる。

其爲罪也莫贖。其於人也不可容。其在法也無赦。法施於人。雖小必謹。況舉大法而加大惡乎。

既輒加之、則自侮其法、而春秋用法、而不畏不如是輕易也。

〔宅〕

而況□□乎哉耶邪也

さうであるのに、まして——は、尙更——である。

「シカルヲ、イハンヤ——ヲヤ」とよんで、上下の句の結果を「況」で比較し、「而」は、上の句と下の句との結果が、相反する場合を表すものであるから注意しなければならぬ。「サウデアルノニ——マシテ——ハ、尙更——デアル」「サウデアルノニ、マシテ——ハ——デアル」といふ意味である。「而」の意味を等閑に附してはいけない。

162

天下之事。譬如有物十焉。吾舉其一。而人不知吾之不知其九也。歷數之。至於九。而不知其一。不如舉一之不可測也。而況乎不至於九也。(唐宋八家文・蘇洵)

訓點

天下之事、譬如有物十焉。吾舉其一、而人不知吾之不知其九也。歷數之。至於九。而不知其一。不如舉一之不可測也。而況乎不至於九也。

九也。歷數之、至於九、而不知其一二、不如舉一之不可測也。而況乎不至於九也。

【語釋】「物十」物の数の十あること。「其一」十の中の「一」。「歷數」數へあけること。「不可測」他の九つを知るか知らざるかを測り知ることの出来ぬこと。

【通解】天下の事は、譬へば物の数を數へるやうなものである。自分が、十の數あるものの中の「一」つを舉げて他を舉げない時は、他人は自分が残りの九つを知らないことを知らないのである。然るに若し「一」から九までを數へ舉げて、ただ残りの「一」つを知らない時は、いつそ最初の「一」つを舉げて、他の九つを知つて居るか、知つて居ないかを測り知ることが出来ないのに及ばないのである。さうであるのに、まして數へ舉げて來つて九つまでも數へ舉げ得ないことは、猶更不知を示す所以で、人の笑を招くことになるであらう。

【補說】○「吾舉其一而人不知吾之不知其九也。」の「而」は、スナハチと訓む。○「而況乎不至於九也」の「而況乎——也」は、「シカルヲ況ヤ——ニオイテヲヤ」と訓み、抑揚の形式を示したものである。「乎」を下から返つてオイテと訓み、「也」をヲヤと訓むことに注意を要する。

構文

天下之事、譬如有物十焉。

第九章 抑揚形

吾 舉其一、而人不知也。
 吾之不知其九也。
 歷數之、至於九、而不知其一、不如舉一之不可測也。
 而況乎不至於九也。

163

孟子曰。聖人百世之師也。伯夷柳下惠是也。故聞伯夷之風者。頑夫廉。懦夫有立志。聞柳下惠之風者。薄夫敦。鄙夫寬。奮乎百世之上。百世之下。聞者莫不興起也。非聖人而能若是乎。而況於親炙之者乎。

(孟子・盡心下)

訓點

孟子曰、「聖人百世之師也。伯夷・柳下惠是也。故聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志。聞柳下惠之風者、薄夫敦、鄙夫寬、奮乎百世之上、百世之下、聞者莫不興起也。非聖人而能若是乎。而況於親炙之者乎。」

【釋釋】「百世之師」百世に亘つて人の師表たるもの。「頑夫」頑食な人。慾に眩惑して、道理のわからぬ人。「廉」廉潔。「懦夫」懦弱な人。薄志弱行の人。「薄夫」薄情な人。「敦」親切になること。「鄙夫」度量の狭い人。「親炙」親しく教を受けること。

【通解】孟子が曰ふには、「聖人は、百世の遠きに亘つて人の師表たる者である。例へば伯夷や柳下惠の如きはこれである。だから、伯夷の廉潔な遺風を聞く者は、たとひ貪慾な者でも廉潔な人となり、落志弱行の人も大いに志を立てるやうになる。又柳下惠の寛大な遺風を聞く者は、たとひ薄情な者でも親切な人となり、狭量でいやしい者でも寛容な人となるのである。是等の人は、百世の遠い昔に奮ひ起つたのであるが、今日に到るまで其の遺風を聞く人が、一人として感奮せぬ者はない。聖人でなくては、どうしてよく此のやうになし得ようか。己に百世の後に於てかくの如しである。さうであるのにまして其の當時、親しく聖人に接して教を受けた者に於ては、尙更のことである。」

【補説】○「故聞伯夷之風者」「聞柳下惠之風者」「聞者莫不興起也」「而況於親炙之者乎」の「者」は、四つ共にヒトの意である。○「頑夫廉」「懦夫有立志」「薄夫敦」「鄙夫寬」の「夫」には皆モを送るべきことに注意を要する。○「非聖人而能若是乎」の「非」に、ンバを送つて假定形に調み、「而」はスナハチと調みねばならぬ。「若是乎」は「カクノゴトクナランヤ」と調み、反語の一形式である。

構文

對偶法によつて居る。

伴而得之。蓋有命焉。故不必善用兵而能取天下。襄曰、不然。物之小者、猶不可僥倖而得。況其至大者、非其術之高於一世、烏能得之哉。太閤之用兵、如無巧者、而其實天下之至巧也。

【語釋】「拙」下手なこと。拙劣。【收利】利益を収めとる。【右府】右大臣のこと。【巧】機巧の義。人を欺くやうな巧妙な方法。【壘】たび。【輻】とどめる。やめる。【籌巧】巧妙な方法。たくらみ。【支吾】抵抗する。「支」は「枝」で小柱、「吾」は斜柱。【命】天の運命。【至巧】此の上もない巧妙な術計。

【通釋】武田信玄と上杉謙信とは、巧妙に兵を用ひたけれども、然し利を収める點には拙劣であつた。織田信長と豊臣秀吉とは、兵を用ひる點では拙劣であつたけれども、然し利を収得することは巧であつた。織田信長の兵の用ひ方は、まだ見るに足る手際があつたやうであるが、度々兵を動かして度々中止した。其のとり収めた利益は、其の用ひた費用を償はぬ有様であつた。秀吉に至つては、其の兵を用ひる上に、これといつて巧妙な方法はありはしなかつた。しかるに天下の人々が、誰ひとり其の命令に抵抗するものがなかつたのは、どういふ譯であつたか。或者は、「彼の秀吉は、偶然の幸によつて天下を得たのである。思ふに、之は運命によつて自然にかやうな結果に到達したのであらう。故に必ずしも上手に兵を用ひたとは限らずに、よく天下を取り得たのである。」といつた。實がいふには、「さうではないのである。」

物の小さなものでさへも、猶ほ萬一を僥倖して之を得ることは出来ないものであるのに、まして、此の上もなく大きい天下などに於ては、其の術計が一代の人々のなすところよりもすぐれてゐるのでなくては、どうしてよく天下を掌握出来ようか、出来ないのである。太閤が兵を用ひたのを見るに、巧妙な術策がないものやうではあるが、然し、其の實際は、天下に於ける此の上もない巧妙な計があつたのであると。

【補説】○「巧於用兵、而拙於收利」の「而」は、シカモとよんで逆接、「而亟用亟輻」の「而」は、シカモとよんで逆接、「而天下莫能支吾」の「而」は、シカルニとよんで逆接、「僥倖而得之」の「而」は、順接である。「亟」は、「シバシバ」と調み、踵字「々」を送る。○「何哉」は、疑問形である。○「不必善用兵」の「不必」に注意を要する。○「物之小者、猶不可僥倖而得」の「小者」にヌラを送つて、「ヌラ猶ホ——」となつて、「サヘモ猶ホ——」と譯し、抑揚形である。○「況其至大者、非其術之高於一世烏能得之哉」の「況——」は、抑揚形式であるけれども、文が終止せずに、急迫して下文に連接する爲に、ヲヤと呼應しないのである。「高於一世」は、「於」をヨリとよんで比較形式をなしてゐる。「烏——哉」は、反語の一形式である。○「曰」は、「或曰」の意である。

構文

大體對偶法式によつてゐる。

武田・上杉巧於用兵、而拙於收利。
織田・豐臣拙於用兵、而巧於收利。

右府之用兵、猶有巧之可見。而
至太閤、其用兵、無有他繆巧。而天下莫能支吾何哉。

曰、彼僥倖而得之。蓋有命焉。故
不必善用兵、
能取天下。

襄曰、不然。
物之小者、猶不可僥倖而得。
況其至大者、非其術之高於一世、烏能得一之哉。

太閤之用兵、
如其巧者、
而其實
天下之至巧也。

伏惟。聖朝以孝治天下。凡在故老。猶蒙矜育。況臣孤苦。特爲尤甚。且
臣少事僞朝。歷職郎署。本圖宦達。不矜名節。今臣亡國賤俘。至微至
陋。過蒙拔擢。寵命優渥。豈敢盤桓有所希冀。(續文章軌範・李密陳情表)

訓點

伏惟^{シテ}聖朝^ハ以^テ孝^ヲ治^ム天下^ヲ。凡^ソ在^ル故老^ニ。猶^モ蒙^リ矜^ム育^ム。況^シ臣^ハ孤^シ苦^シ。特^ニ爲^ス尤^ニ甚^シ。且^ツ臣^ハ少^シ事^ヘ僞^ニ朝^ニ。歷^シ職^ヲ郎^ノ署^ニ。本^ニ圖^ル宦^ヲ達^ス。不^レ矜^ム名^ノ節^ヲ。今^ハ臣^ハ亡^ル國^ニ賤^ニ俘^ニ。至^ニ微^ニ至^ニ陋^ニ。過^シ蒙^リ拔^リ擢^ル。寵^ヲ命^ヲ優^ニ渥^ニ。豈^カ敢^テ盤^シ桓^シ有^ル所^ニ希^ム冀^ス。

【語釋】「僞朝」 蜀の朝廷。此の文の作者の李密はもと蜀の人。萬止むなくして祖國を稱して斯くいつたのである。「郎署」 尙書郎といふ官名。「宦達」 官仕榮達。「名節」 功名節義。「矜」 自ら尊大にすること。「亡國」 蜀の國。「賤俘」 身分賤しき捕虜。自ら卑下していふ。「寵命」 恩命。「優渥」 御手あつたこと。「盤桓」 進まざる様。ためらふ様。「希冀」 望み希ふこと。

【通解】 伏して考へますに、現下の大御代は、孝道を以て天下を治められてゐます。すべて老人にあつては、朝廷の救恤憐憫を蒙つてゐる有様でありますのに、まして孤獨で苦しい境遇にあること、特に尤も甚だしい私に於ては、尙更のことでありませう。その上、私は年若い頃蜀に仕へ、尙書郎の職にありました。

私は本来、官の榮達を圖り、名節にほこることはしませんでした。今、私は譬へば亡國の賤しい捕虜の如きもので、至つてつまらぬ者でありますのに、過つて拔擢を蒙り、手厚い恩命を受けました。故にどうして敢てためらつたりして仕へもせず、他に希望することなどありませんか。其のやうなことはないのです。

【補説】「惟」は、「オモンミルニ」と訓み、ミルニを送る。○「凡在故老猶蒙矜育況臣孤苦、特爲尤甚」は、抑揚形の基本形式、「——、猶——、況——」の形をとつたもので、「——スラ、——猶ホ——（ナル）ニ、況ヤ——ヲヤ」と訓む。そしてこゝでは、「況」に呼應する敬尾詞「乎」がないが、文末にヲヤを送らねばならぬ。○「矜」は「キョウ」と音讀して、「アハレム」「ホコル」の二様の訓があることを忘れてはならぬ。○「豈敢盤桓、有所希冀」の「豈——」は反語の一形式。

夫天託一人。養萬民。非取萬人。養一人也。故明王必躬勤儉。以恤天下。非苟爲美而已。懼負天託。而取其譴也。天子且然。況代天子。權宰天下者。烏可曰是吾有也。吾臣僕也。而奪其所以生活。以資己逸樂哉。（日本政記）

訓點

夫天託一人。養萬民。非取萬人。養一人也。故明王必躬勤儉。以恤天下。非苟爲美而已。懼負天託。而取其譴也。天子且然。況代天子。權宰天下者。烏可曰是吾有也。吾臣僕也。而奪其所以生活。以資己逸樂哉。

【語釋】「一人」天子のこと。「取萬人」萬民から税をしばり取ること。「躬」自身實行する。「天下」萬民。「非苟爲美而已」むやみに美名を得んが爲のみではないの意。「天託」天の附託。「負」そむくこと。背反する。「其譴」天の咎。「譴」は音「ケン」。「權宰」かりに支配する。「權」は假。「吾有」自分のもの。「其所以生活」人民の生活の手段である貨財。「逸樂」安逸遊樂。

【通解】さて天は天子一人にまかせて萬民を養はしめてゐるのである。萬民から税を徴めさせ天子一人を養うてゐるのではないのである。故に賢明な王は、必ず自ら勤勉節儉を實行し、それで天下萬民を慈まれるのである。無暗に美名を得んが爲ばかりではない。これ天の附託に背いて、天の咎を取るのを懼れたからである。天子でさへも、左様であつたのに、まして天子に代つて天下を假りに支配する將軍に於ては、どうして、これは自分のものであるとか、これは自分の臣僕であるとかいつて、人民生活の手段である貨財を奪ひ、それで自分の安逸遊樂をたすけたいふことをしてよからうか、それはよろしくないのである。

【補説】○「夫天託一人」の「夫」は「カノ」と訓み、ノを送る。ソレと訓むのはよくない。○「養萬民」う

孟子曰。古之賢王。好善而忘勢。古之賢士。何獨不然。樂其道而忘人之勢。故王公不致敬盡禮。則不得亟見。且猶不得亟見。而況得而臣之乎。(孟子・盡心上)

訓點

孟子曰、「古之賢王、好善^{シテ}而忘^ル勢、古之賢士、何獨^ラ不^レ然、樂^ミ其道^ニ、而忘^ル人之勢、故王公不^レ致^ス敬^ヲ盡^ス禮^ヲ、則不^レ得^ニ亟^ク見^レ之^ヲ、見^ル且猶^モ不^レ得^ニ亟^ク見^レ之^ヲ、而況^モ得^テ而^レ臣^ス之^ヲ乎。」

【語釋】「忘^ル勢」己が權勢を忘れて賢者を尊敬する。「何獨^ラ不^レ然」何ぞ獨り樂む所ありて、忘るる所あらざらん^ノ意。「見^ル」面會する。「亟^ク」度々。音「キ」。

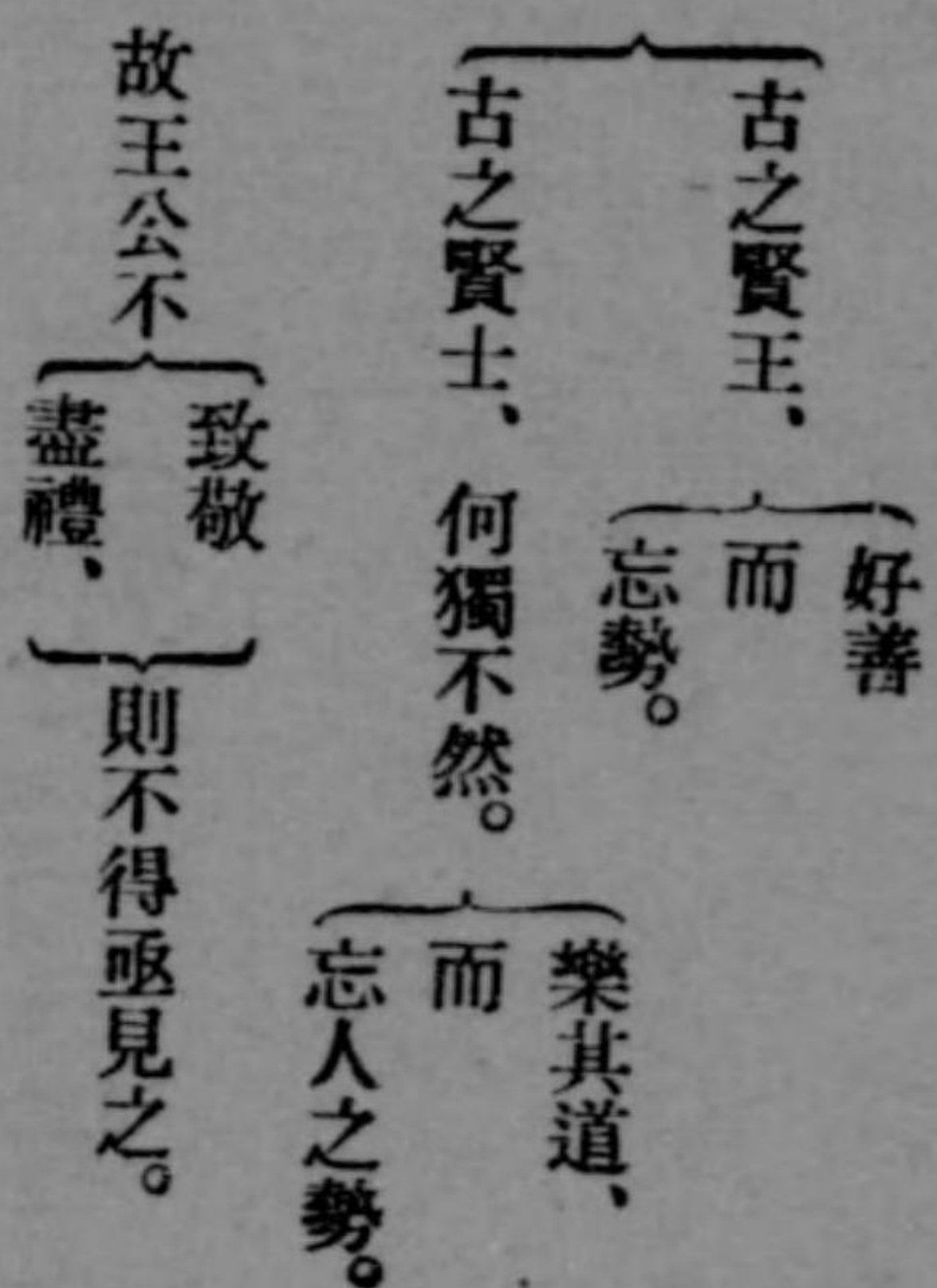
【通解】孟子がいふには、「古の賢明な王は、人の善を好んで、それがために自分の權勢などは忘れてゐた。古の賢明な士だけが、何で獨りさうでない事があるらう。古の賢士は、己が身に得たる聖賢の道を楽しみ行つて、それがために人の權勢などは眼中に置かなかつた。故に王公も敬を表し禮を盡くさなかつたならば、度々賢士に面會することも出来なかつたのである。面謁することさへも度々することが出来なかつたのに、しかるをまして敬禮を盡くさないで、賢士を得て之を臣とすることが出来たであらうか、それは不可能に

屬したことは勿論であつた。」と。

【補説】〇「何獨^ラ不^レ然」の「何」は、反語の一形式。〇「而忘^ル人之勢」の「而」は逆接。〇「故王公不致敬盡禮」の「王公」の上に、「雖」を補足してみると了解し易い。よつて、「王公」に假定の意を表すモを送ることに注意を要す。〇「見^ル且猶^モ不^レ得^ニ亟^ク見^レ之^ヲ」の「且猶^モ不^レ得^ニ亟^ク見^レ之^ヲ」ナルニ、而ルヲ況ヤ一ヲヤ」の抑揚形に注意が肝腎である。「見^ル」にスラを送ることを忘れてはならない。

構文

孟子曰、



見且猶不得亟。而況得而臣之乎。

はまだ飲めるか。」と。噲が大音聲で曰ふには、「自分は死ぬことさへも辭しない者であるから、區々たる此の斗卮酒位は何うして、辭退しませうぞ。それはさておき、我が君の沛公は、第一に秦を破り、其の國都の咸陽を攻略し、千辛萬苦して大功を立てた方である。然るに、將軍は、此の勳功に對し、未だ封土を與へることもなく、榮爵を授けることもなく、反つて小人の讒言を信じ、此の有功の人を誅殺しようとしてゐられるのは、是れ實に暴戾の極で、彼の亡んだ秦の跡つぎといふべきものである。自分は切に將軍の爲に此のやうな暴虐の行のなからんことを望むものである。」と。羽が曰ふには、「まづ／＼坐につけよ。」と。そこで噲は張良の次席に坐つた。

【補説】○「賜之卮酒」の「賜」は、上の者から下の者に授け與へる意味の時は、「アタフ」と訓み、下の者が上の者から授與される意味の時は、「タマハル」と訓む。正反兩用の文字であるから、注意を要する。○「臣死且不避、卮酒安足辭」の「且」は抑揚形式の一であるから、「死」にスラを送ることを忘れてはならぬ。「安」は反語の形式を示したものである。

①	以 ^{テスラ}	且 ^ツ
②	以 ^{テスラ}	猶 ^ホ
③	以 ^{テスラ}	而 ^モ

—でさへも—。
 —たとひ—しても—。
 —ほどの—でさへも—。

①は、「ヲ以テスラ、且ツ」と訓み、②は「ヲ以テスラ猶ホ」と訓んで、共に「デサヘモ」「タトヒシテモ」の意であり、③は、「ヲ以テスラ、而モ」と訓んで、「ドノデサヘモ」「ノヤウナデアリニモ拘ラズ」「デアリナガラ」の意である。然し場合によると、④⑤では「以」を省略して「スラ且ツ」「スラ猶ホ」の形を示し、⑥では「而」を省略することもある。

抑我門。雖辱桓武葛原之胤。而降爲人臣。中微而不顯。以平將軍之功。而不過國守。刑部卿聽內昇殿。萬人反臂。及至大人。乃陞太政大臣。以兒之不肖。且辱大臣大將。宗族駢植朝廷。田園半於天下。叨恩極矣。(日本外史)

訓點

抑我門。雖辱桓武葛原之胤。而降爲人臣。中微而不顯。以平將軍之功。而不過國守。刑部卿聽內昇殿。萬人反臂。及至大人。乃陞太政大臣。以兒之不肖。且辱大臣大將。宗族駢植朝廷。田園半於天

下、叨恩極矣。

【語釋】中頃衰微すること。【國守】陸奥守を指す。【内昇殿】昇殿には二つある。一は内昇殿で即ち御所、一は院昇殿で即ち院の御所。こゝでは御所の昇殿。【友レ舞】唇を齧って悪口をつぶやき言ふ。

【斷植】ならび立つ。【田園】所領の庄園。【叨】みだりにする。不相當に受ける。

【通解】抑も我が一門は、辱くも、桓武天皇・葛原親王の後胤であります。しかも、一たび降つて人臣となり、中ごろ衰微して世に顯はれなかつた。そこで平將軍貞盛が、あれ程の手柄がりましたが、やつと陸奥守となり、刑部卿忠盛が御所の昇殿を許された時には、多くの人が唇を齧して、悪しざまにつぶやいた位でありました。しかし、我が父君になつてからは、かへつて太政大臣にも上り、私の如き不東者でさへ、なほ内大臣左大將の榮位を辱うし、一門の者どもは朝廷の上に並び立ち、その所領の庄園は、三十州に跨り、天下の半にも及ぶ位で、まことに御恩を不相當に受けたものであります。

【補説】○「雖辱桓武・葛原之胤」の「雖」は假定を示す副詞。○「而降爲人臣」「而不過國守」の「而」は逆接。○「乃陸大政大臣」の「乃」は、「カヘツテ」の意。○「以平將軍之功而不過國守」「以兒之不肖且辱大

臣大將」の「——以テスラ、而モ——」以テスラ、且ツ——」の抑揚形に注意すること。○「聽内昇殿」の「聽」に「スラ」を送つて、意味の上から抑揚形に調むことに注意が肝要。

梁惠王曰。寡人願安承教。孟子對曰。殺人。以挺與刃。有以異乎。曰。無

以異也。以刃與政。有以異乎。曰。無以異也。曰。庖有肥肉。廐有肥馬。民有飢色。野有餓莩。此率獸而食人也。獸相食。且人惡之。爲民父母。行政。不免於率獸而食人。惡在其爲民父母也。(孟子・梁惠王上)

訓點 梁惠王曰、「寡人願安承教。」孟子對曰、「殺人、以挺與刃、有以異乎。」曰、「無以異也。」以刃與政、有以異乎。」曰、「無以異也。」

曰、「庖有肥肉、廐有肥馬、民有飢色、野有餓莩、此率獸而食人也。獸相食、且人惡之、爲民父母、行政、不免於率獸而食人、惡在其爲民父母也。」

父母也。」

【語釋】「寡人」王侯の謙稱。「安承教」心を落着けて教を承けたい。「挺」杖。「庖」ク、リヤのこ

と。廐。養所のこと。「飢色」飢えた顔色。「餓莩」餓死者。「莩」は「殍」に通ずる。「野」王城の郊

外をいふ。「率獸而食人」苛政を布いて人民に重税を課し、以て禽獸をして食に飽かしめることは、恰も獸を率ゐて人を食はしめるのに等しいの意。「食」喰ふこと。「惡」忌み嫌ふ。「民父母」君たる者をいふ。

【通解】梁の惠王は、孟子に、「自分は願はくは、心を落着けて教を受けたい。」といった。孟子が對へて、

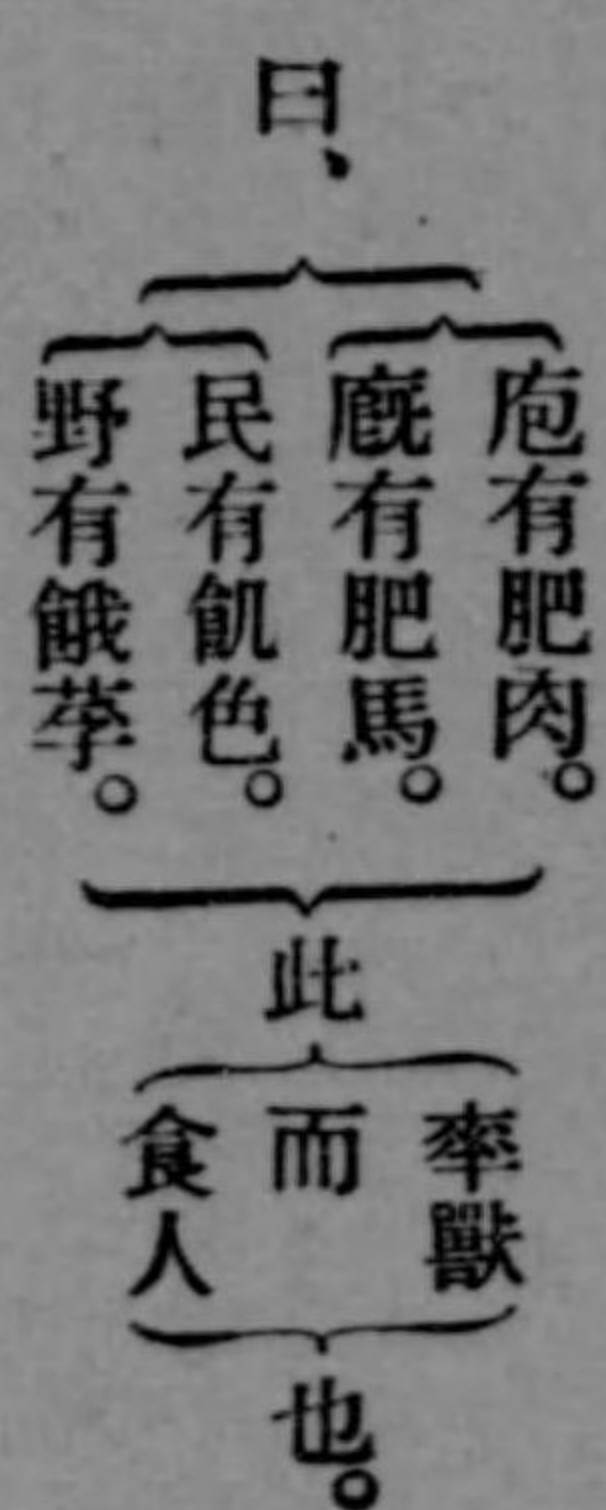
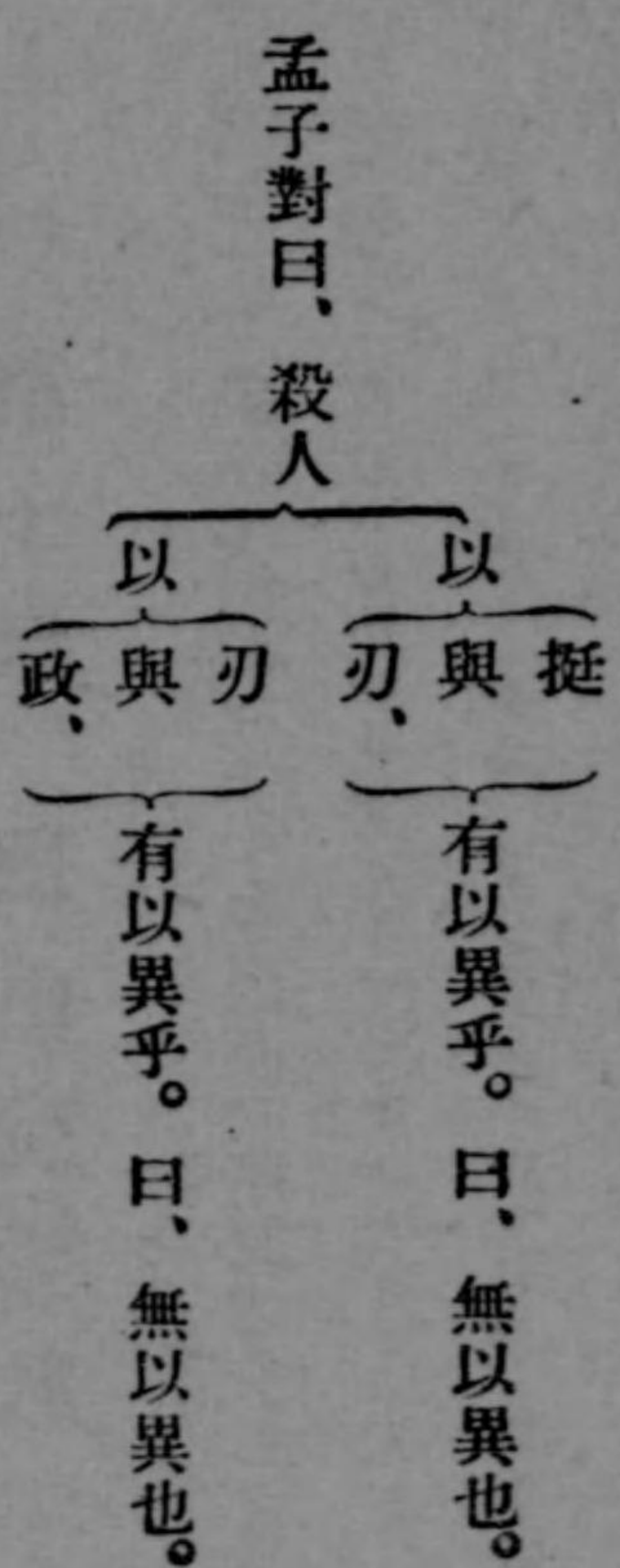
「今、人を殺すのに、杖で撃ち殺すのと刃物で刺し殺すのと、殺すのに違ひがありますか、どうですか。」
 といった。すると王は、「其の手段に於ては同じではないが、殺すといふ點では別に相違はない。」と答へた。又孟子が、「それならば、刃で刺し殺すのと、虐政を以て餓死させるのと、殺すのに違ひがありますか、どうですか。」といった。王は、「其の殺すといふ點に於ては、失張り相違はない。」と答へた。そこで孟子が、「今、王の料理場には肥えた獣肉が澤山あり、王の厩には肥えた馬が澤山飼はれてゐます。然るに民には飢ゑを養へた顔色をし、野には餓ゑて斃れてゐる者があります。これは即ち苛重な税金を民から徴收して、それで禽獸を飼つてゐる譯で、ますますから、間接にいひますと、恰も獸を半き連れて人を食ましめるに等しいものであります。一體、同志が互に噛み合つてさへ、人は之を見て嫌ふものでありますのに、まして民の父母とも頼まれる人君が、かやうな苛政を行ひ、其の結果獸を半き連れて人を喰はせるやうなことを免れないとせば、どうして人民の父母などといふことが出来ませうか、それは出来まいと思ひます。」といった。

【補説】 ○「願安承教」の「願ハクハ——ン」と呼應する關係に注意を要する。倒装形の一で、「願安承教」といふのに同じ。○「殺人、以挺與刃」の「——スルニ——ヲ以テス」とよむ形式は、漢文ではよく見るところ、前置詞「以」が動詞に轉じて「以テス」となつた場合である。——ヲ以テ——スル」といふのの意味は同様で、「用」の意である。「與刃」は「與以刃」、「以刃與政」は「以刃與以政」の「以」の省略されたものである。○「有以異乎」の「以」は、副詞的修飾語となつた場合である。「乎」は、疑問敬

尾詞で詰問的疑問の意を表してゐる。○「此半獸而食人也」の「此——也」は、理由を説述する一形式。「半」の意から、「食」にシムを送つて使役形にすることに注意を要する。○「獸相食、且人惡之」の「食」にストラを送つて、抑揚の形式とする。「——ストラ且ツ——」となつて、「——デサヘ——」の意となる。「惡」をニクムとよむ。此の場合、音「シ」である。○「惡在其爲民父母也」の「惡」は、イツクンゾとよみ、疑問副詞である。「惡——也」は反語形の一。

構文

梁惠王曰、寡人願安承教。



獸相食、且人惡之。爲民父母、行政、不免於率獸而食人。惡在其爲民父母也。

第十章 理由説明形

理由説明形は、或る事柄の理由・原因を説明敘述する文の形式で、次の八種の場合がある。

- (一) 「何則」・「何者」を用ひる場合。
- (二) 「以」・「故」・「以」・「爲」・「故」・「以」・「故」を用ひる場合。
- (三) 「是以」・「是故」・「故」・「以故」を用ひる場合。
- (四) 「此」也。「是」也。「是」を用ひる場合。
- (五) 「以」也。「也」を用ひる場合。
- (六) 「爲」也。「也」を用ひる場合。
- (七) 「所以」也。「也」を用ひる場合。
- (八) 文意から察する場合。

〔三〕

何 ^{トナレバ} 則 [□] □ ^也
何 ^{トナレバ} 者 [□] □ ^也

何故かといへば——だからである。

そのわけは——である。

「何トナレバ則チ——(ナレ)バナリ」「何トナレバ——(ナレ)バナリ」と訓み、「何故カトイヘバ、——カラデアアル」「ソノワケハ、——デアアル」の意で、上述の理由・原因を下に説明するものである。此の場合の「バナリ」は已然形に接続することを忘れてはならぬ。これは元來は自問自答の言葉で、「其ノ故ハ何ゾヤ、曰ク、——」といふべきところを、此の二字に縮めていつたものである。「何者」は、「何則」に比べ、稍、軽い意味に使用される。

臣聞。人主之徳如天。天之於物也。熾然而旱。赤地千里。草木皆死。可謂虐矣。然至雷雨時作。膏澤洋溢。百穀奮起。民復粒食。鼓舞盛徳。而忘旱之虐。何者。度量廣大。改過無疑也。如使密雲不雨。既雨而中止。遲疑猶豫。久而不忍。則天之生物盡矣。(唐宋八家文)

訓點

臣聞、人主之徳如天。天之於物也、熾然而旱、赤地千里、草木皆死。可謂虐矣。然至雷雨時作、膏澤洋溢、百穀奮起、民復粒食、鼓舞盛徳、而忘旱之虐。何者、度量廣大、改過無疑也。如使密雲不雨、既雨而中止、遲疑猶豫、久而不忍、則天之生物盡矣。

【語釋】熾然、さかんさま。【赤地】土地が熱くやけたこと。【膏澤】うるほひをいふ。【虐】しひたげて残酷なこと。【密雲】閉ぢ塞がれた雲。【遲疑猶豫】あゝかからかためらひぐづぐづすること。

【通解】自分は、「天子の徳といふものは、恰度、天の無限の仁徳のやうなものである。」といふことを承知して居ます。天が萬物に對しては、時によると、盛に烈しく日照をつづけ、饑土が千里にも及んで、草木も皆死んでしまひます。誠に残酷といつてもよろしい。併し屢々雷が起つて、雨がうるほひ溢れるに至ると、直に百穀が元氣よく立ち上り、實りの年になり、人民がまだ米食に差支ないやうになつて、天の盛徳を躍り上るほど喜び、曩の旱魃の残酷を忘れるのであります。何故ならば天の度量といふ者は廣大であつて、一旦降した旱魃の過を改めて、ぐづぐづしてゐることがないからであります。もし、さもなかつたらば、雲は閉ぢ塞がれ雨ふらず、既に降つても、中途で止み、降りつ降らずためらひぐづぐづして、何時まで経つても、斷然きまることが出来なかつたならば、天下の生物は悉く盡きはててしまひませう。

【補説】○「臣聞」の「聞」の管到に注意が肝要である。○「天之於物也」の「也」はヤと訓み、分り易くする爲に、「也」の右側に訓讀を施してもよい。「於」は「猶對也」で、「對スル」意である。○「何者、度量廣大、改過無疑也」の「何者」也は理由説明の形式であつて、「何トナレバ」―「バナリ」と訓まねばならぬ。○「如使密雲不雨」の「如使」は、使役の形をとつた假定形であることに留意しなければならぬ。「――モシ――シメバ」と訓む。「雨」は「アメフル」と動詞に訓むことも注意すべきである。

構文

臣聞、人主之徳、如天。

天之於物也、熾然而旱、

赤地千里、
草木皆死、
可謂虐矣。

然至雷雨時作、
膏澤洋溢、

百穀奮起、
民復粒食、
而鼓舞盛徳、
忘旱之虐。

何者、
度量廣大、
改過無疑也。

如使密雲不雨、既雨而中止、
遲疑猶豫、久而不忍、
則天之生物盡矣。

①	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
②	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
③	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
④	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑤	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑥	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑦	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑧	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑨	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑩	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑪	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑫	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑬	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑭	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑮	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑯	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑰	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑱	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
⑲	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉑	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉒	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉓	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉔	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉕	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉖	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉗	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉘	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉙	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉚	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉛	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉜	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉝	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉞	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㉟	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊱	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊲	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊳	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊴	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊵	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊶	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊷	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊸	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊹	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊺	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊻	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊼	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊽	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊾	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ
㊿	以 _ニ	以 _ニ	以 _ニ

がために
—
であるから—

①は「以テノ故ニ」、②は「ノ故ヲ以テ」、③は「ノ爲ノ故ニ」と訓み、「ガタメニ」は「デアルカラ」の意を表す。其の理由を述べる語は、「以」・「故」・「爲」の中間に置く。此の「故」は、上に事實の結果を述べて、下に其の原因を説かんとする時、原因たる事實の下に用ひられたもので、名詞である。
更に又「□□故也」「□□故也」の「ノ故ナリ」「ガ故ナリ」の形で表す場合もあるから注意を要する。

我朝以武立國。神武以還。經十數世。雖時有變故。靖難戡亂。頃刻而辨。天下不搖者。非以兵權在上。綱維可挈故哉。(日本政記・景行天皇紀)

訓點

我朝_ガ以_テ武_ヲ立_ツ國_ニ。神武_ヲ以_テ還_ル。經_テ十_ニ數_ノ世_ヲ。雖_モ時_ニ有_リ變_ノ故_ト。靖_シ難_ヲ戡_ル亂_ヲ。頃_ク刻_ニ而_{シテ}辨_ス。天下_ヲ不_レ搖_ル者_ハ。非_ズ以_テ兵_ノ權_ヲ在_リ上_ニ。綱_ヲ維_キ可_ク挈_ル故_ト哉_{ナリ}。

【語釋】「以武立國」 武力を以て國を建造した。【以還】 以後。以來。この方。【變故】 變亂事故。【靖難戡亂】 國難を鎮め安んじ、變亂をうち平げる。「戡」はうちかつ意。音「カン」。「頃刻」 僅かの間。
【辨】 仕末をつける。「兵權」 兵馬の權。軍隊を指揮する權。「綱維」 「綱」も「維」も「ツナ」。國家を引き纏める大づな。國の政治の大權をいふ。

【通解】 我が國は武力を以てうち建てた國である。神武天皇からこの方、十何代かを経て、時時に變亂事故はあつても、國難を安んじ變亂をうち平げることは、僅の間に出來て、天下が少しも動搖しなかつたのは、兵馬の權が朝廷にあつて、國家の大綱たる政權を、天皇の御手に握つてをられる事が出來たが爲にではないか。

【補説】 ○「神武以還、天下不搖者」は、下の「非——故上哉」の主語になつてゐる。○「天下不搖者」の「者」は、コトの意に解さればならない。○「雖時有變故」の「雖」は、既定を示す前置副詞で、假定の意のものではない。○「非以兵權在上、綱維可挈故哉」の「非——哉」は「ニアラズヤ」と訓み、反語の一形式である。「以——故——」は、「以テノ故ニ——」と訓み、理由説明の形を示したものであることに注意を要する。

齊景公問曰。治國何患。晏子對曰。患夫社鼠。熏久則恐燒其木。灌之則恐敗其塗。此鼠所以不可得殺者。以社故也。夫國亦有焉。人主左右是也。(晏子春秋)

訓點

齊景公問曰。治國何患。晏子對曰。患夫社鼠。熏之則恐燒其木。灌之則恐敗其塗。此鼠所以不可得殺者。以社故也。夫國亦有焉。人主左右是也。

【語釋】「晏子」名は嬰、字は平仲。齊の名宰相。【社鼠】國土の神の祭屋に集くつてゐる鼠。【熏】いぶす事。煙攻めにする。【灌】水を注ぐこと。【敗】いためる。【塗】社の木の塗料。【左右】近侍の臣。【通解】齊の景公が尋ねて、「國を治めてゆくのに、何が困るか。」といった。すると晏子は、「かの土の神を祭つてある所に集くうてゐる鼠の處置に困ります。之を煙攻めにする社殿の木を焼きはしないかと心配であるし、之を水攻めになると、社殿の木に塗つた彩色をいためはしまいかと心配である。何しろ、この鼠を殺し驅除することが出来ない譯は、社殿に集くうてゐるからなのであります。さて國にも矢張り社鼠にも比すべき輩が居ります。即ち天子諸侯の側近にあつて、君國に害毒を及ぼさんとするもの、是であります。」とお對へ申上げた。

【補説】○「此鼠所以不可得殺者、以社故也。」の「此——者」と「以——故也」は、理由説明の形である。

○「患夫社鼠」と「夫國亦有焉」の「夫」は「カノ」と訓む。ソレと訓んではよくない。○「人主左右是也」の「是也」は理由説明形の一。

構文

齊景公問曰。治國何患。

晏子對曰。患夫社鼠。

熏之則恐燒其木、
灌之則恐敗其塗。

此鼠所以不可得殺者、以社故也。

夫國亦有焉。人主左右是也。

①	是以
②	是故

かやうなわけで、
これがために。

○	故
○	以

だから。

①「ココヲモツテ」「コノユエニ」・②「コノユエニ」・③「ユエニ」・④「ユエヲモツテ」と訓んで、「カヤウナワケデ」「コレガタメニ」「ダカラ」の意で、上に理由・原因を述べたことを明かにするものである。「是以」は、時として「是用」と書く場合もある。但、副詞の「コレヲモツテ」と訓む「以是」とは、形の異ると共に、意味も全く異なる事に注意を要する。

子路使子羔爲費宰。子曰。賊夫人子。子路曰。有民人焉。有社稷焉。何必讀書。然後爲學。子曰。是故惡夫佞者。(論語・先進篇)

訓點

子路使_ス子羔_ヲ爲_シ費宰_ト。子曰_ク。賊_シ夫人子_ト。子路曰_ク。有_リ民人_ト焉_ト。有_リ社稷_ト焉_ト。何必_シ讀書_ト。然後_{シテ}爲_シ學_ト。子曰_ク。是_レ故_ト惡_シ夫佞者_ト。

【語釋】「子路」孔子の門人。「子羔」姓は高、名は榮、「子羔」は其の字。孔子の門人。「費」魯の大夫

の季氏の私邑。「宰」邑の長。「賊」害する。「夫人子」年少者の稱。こゝは子羔をさす。「民人」人民といふに同じ。「社稷」「社」は土地の神、「稷」は五穀の神。土地と穀物とは國になくなくてはならぬものであるから國家のことをいふ。「佞」辯口の才をいふ。

【通解】孔子の門人の子路が同門の子羔を推舉して、季氏の費といふ私邑の長とした。それに対して、孔夫が曰ふに、「そんなことをしたら、あの若者をだいなしにしてしまふだらう。」と。子路が曰ふに「費邑の中にも、人民もあれば、神々もあつて實際に學問が出来ます。何も本を讀んで始めて學問をしたといふべきものとは限りませう。」と。孔夫子が曰ふに、「お前はそんな事をいふ、それだから、自分は日頃からあの辯口の達者なのを嫌に思ふのである。」と。

【補説】○「子路使子羔爲費宰」の「使」は、使役の原則的形式である。○「有民人焉」「有社稷焉」の「焉」は、敬尾詞として調まないので通常であるが、「有民人焉」「有社稷焉」として「コノ」と訓んで、そのあるべき場處を示すものと見ることが出来る。○「然後爲學」の「學」にトを送ることに注意しなければならぬ。ヲを送つてはいけない。○「是故惡夫佞者」の「是故」は理由説明の形である。

君子之事親孝。故忠可移於君。事兄弟。故順可移於長。居家理。故治可移於官。是以行成於内。而名立於後世矣。(孝經)

訓點

君子之事親孝、故忠可移於君。事兄弟、故順可移於長。居家理、故治可移於官。是以行成於內、而名立於後世矣。

【語釋】「行」孝・「弟」・「理」の美しい行爲。「理」「治まる」に同じ。「成於内」「内」は自己の人格の内。自己の心の内に出来ること。「名」「忠」「順」「治」の君子の美名。

【通解】君子たるものは、親に事へて孝である。だからその孝の態度をそのまま君主に移して事へれば、能く忠たる事が出来る。兄に仕へてよく弟の道を盡す、だからその態度をそのまま目上の人に移して事へれば、能く順である事が出来る。家に居ては家がよく治まる。だからその態度をそのまま役人としての立場に移して政事を行へば、立派に人民を治める事が出来る。斯ういふわけであるから、凡てさうした美しい行が心の内に出来上つてゐて、その結果始めて君子として、能く忠、能く順、能く治といふ美名が後々の世まで立つのである。

【補設】○「故忠可移於君」「故順可移於長」「故治可移於官」の三つの「故——」は、皆上句の理由を説明する形を示したものである。○「是以行成於内」の「是以——」も亦理由説明形の一。

構文

重疊法と對偶法とを用ひて居る。

〔全〕

是	此
□	□
□	□
也	也

これが——となつたわけである。

事親孝、故忠可移於君。
 君子之事兄弟、故順可移於長。
 居家理、故治可移於官。
 行成於内、
 是以而
 名立於後世
 矣。

兩方共に、「コレ——ナリ」と訓んで、「コレガ——トナツタワケデアル」の意を表示する。

古之所謂豪傑之士。必有過人之節。人情有所不能忍者。匹夫見辱。拔劍而起。挺身而鬪。此不足爲勇也。天下有大勇者。卒然臨之而不驚。無故加之而不怒。此其所挾持者甚大。而其志甚遠也。

(文章軌範・蘇軾「留侯論」)

訓點 古之所謂豪傑之士、必有過人之節。人情有所不能忍者。匹夫見辱、拔劍而起、挺身而鬪。此不足爲勇也。天下有大勇者、卒然臨之而不驚、無故加之而不怒。此其所挾持者甚大、而其志甚遠也。

【語釋】「過人之節」一般人以上にすぐれた節操。「節」は、操守をいふ。「人情」普通人の心持。「匹夫」いやしい下劣な男の意。「挺身」獨り前にとび出すこと。身を躍らせて進むこと。「勇」眞の勇者。「此」拔劍而起、挺身而鬪の行爲をさす。「大勇者」豪傑の士をさす。「卒然」突然。不意に。「臨」何事かをしかけること。「無故」何の理由もないこと。「加」侮辱を加へること。「挾持」胸中に持つ所の大事や大謀をいふ。「遠」遠大なこと。

【通解】昔豪傑といはれたほどの人は、必ず普通の人にながれた大なる節操があるものである。又普通の人情では耐へられないことを耐へるものである。然るにかの下等な人間は、他人から辱しめられると、直ぐ劍を抜いて起ち上り、獨り身を躍らし進んで相手と鬪ふものである。然し之は決して眞の勇氣ある者となすには足りない。天下に眞の勇者といふべき人がある。此の人に急に事をしかけても驚かないし、何の理由もなくして之に無禮をしかけても怒らない。これは、他ではない。其の胸中に懐いてゐる度量が非常に大きく、其の志が非常に遠大であるからである。

【補説】○「匹夫見辱」の「見」は、ラルとよみ、受身の助動詞である。○「拔劍而起」「挺身而鬪」の而は、

順接であり、「臨之而不驚」「加之而不怒」の「而」は、背反・逆接の意にとる。○「此不足爲勇也」の「此レ—也」と、此其所挾持者甚大、而其志甚遠也の「此レ—レバ也」は、共に理由を説明する形式である。

構文

對偶法によつてゐる。

古之所謂豪傑之士、必有過人之節。
 人情有所不能忍者。匹夫見辱、拔劍而起、挺身而鬪。此不足爲勇也。

天下有大勇者、卒然臨之而不驚。此其所挾持者甚大、無故加之而不怒。此而其志甚遠也。

荀子曰。先義而後利者榮。先利而後義者辱。榮者常通。辱者常窮。通者常制於人。窮者常制於人。是榮辱之大分也。(荀子)

訓點

荀子曰、「先義而後利者榮、先利而後義者辱、榮者常通、辱者常窮、通者常制於人、窮者常制於人、是榮辱之大分也。」

第十章 理由説明形

辱者常窮。通者常制人。窮者常制於人。是榮辱之大分也。

【語釋】「先」重んずること。「後」輕んずること。「通」通達すること。何事でも思ひ切つてやること。時めき榮えること。「制」治む。治め使ふこと。「榮辱」光榮と恥辱。「大分」大事な分れ目。

【通解】荀子がいふに、正義を重んじて、己が私欲を輕んずる者は榮え、私利私欲を重んじて、正義を輕んずる者は、人から恥辱を受ける。榮える者は、何時も思ひ通りになつて窮することはないけれども、辱めを受ける者は、何時も行きつまりがちである。窮しない者は、常に人を治め使ふことが出来、行き詰るものは、常に人から支配されるものだ。これが榮と辱との大切な分れ目であるのだ。

【補説】○「先義而後利者榮、先利而後義者」の「而」は順接。「者」はヒトの意。「辱」にはラルを送つて受身の形に訓むことに注意を要する。○「榮者」「辱者」の「者」も亦ヒトの意。○「窮者常制於人」の「制」は助詞「於」によつて受身に訓み、ラルを送らねばならぬ。○「是榮辱之大分也」の「是——也」は、理由説明の形式であることに注意すべきである。

構文

荀子曰、

先義而後利者榮、先利而後義者辱。榮者常通、辱者常窮。通者常制人、窮者常制於人。是榮辱之大分也。

【矣】

以□□也。

—であるからである。

「ヲ以テナレバナリ」。「ヲ以テナリ」とよみ、「デアルカラデアル」と譯する。理由を述べる語は、常に「以」と「也」との中間に挿入する。

所貴於士者。以其知時也。時有勝焉。有機焉。勢所推移。機所起伏。非必難知也。而莫之知者。有所蔽耳。唯有識之士。能先見之。去危就安。去濁就潔。舉世不知。而已獨知之。知之明。故決之果。彼之所驚。我以爲當然。如藤原憲清。不其然乎。(日本政記)

訓點

所_レ貴_ニ於_テ士_ノ者_ハ。以_テ其_ノ知_ル時_ヲ也_ハ。時_ニ有_リ勝_ム焉_ハ。有_リ機_ヲ焉_ハ。勢_ハ所_ニ推_シ移_ス。機_ハ所_ニ起_リ伏_ス。非_レ必_ズ難_シ知_ル也_ハ。而_モ莫_ク之_ヲ知_ル者_ハ。有_リ所_ニ蔽_ハ耳_ハ。唯_ニ有_リ識_ル之_士。能_ク先_ニ見_ル之_ヲ。去_リ危_ヲ就_テ安_ヲ。去_リ濁_ヲ就_テ潔_ヲ。舉_ゲ世_ヲ不_レ知_ル。而_モ己_ノ獨_ニ知_ル之_ヲ。知_ル之_明。故_ニ決_メ之_ヲ果_ス。彼_ノ所_ニ驚_ハ。我_ハ以_テ爲_ス當_ラ然_ニ。如_ク藤_原憲_清。不_レ其_ノ然_ニ乎_ハ。

【語釋】「士」士君子。「其知時」士が時世を知る。「勢」なりゆき。時勢。「機」事の起るはずみ、機會、時機。「推移」移り變る。「起伏」起つたり伏しかくれたりする。「所蔽」心が私欲に蔽はれて明を缺く。「有識之士」事理を辨へすぐれた考のある人、見識ある人、識者。「舉世」世をこぞる。世人全部。「決之」「之」は時世に處する途。「彼」世人。「我」有識之士。「藤原憲清」秀郷九世の孫、後鳥羽院に仕へて北面の臣となり、龍があつたが、後世して名を西行と改め、海内を周遊し、詠歌して自ら娛しんだ。建久元年、七十三で寂した。

【通解】士君子の貴いことは、士君子が時世を知つてゐるからである。時世には勢と機とがあつて、時のなりゆきの移り變つてゆくことも、事の起るはずみが内部に起つたり隠れたり潜んでゐる様子も知ることが困難であるには限らない。だけれども之を人が知らない譯は、その人の心が私慾に蔽はれて道理に明かでないからである。唯見識のある人だけが、先づ人よりも先に時世を知ることが出来て、危険を去つて安全に、汚濁を去つて潔白に従ふのである。世間の人全部が知らずらゐて、自分だけが時世を知つてをり、明瞭に知つてゐるから、思ひ切つて取るべき途を決定するのである。その處置は、世人から見れば驚く事であるが、我から見ては當然の事であるのだ。藤原憲清などは、なんと其の人でなからうか。實に時を知つて濁を去り潔きに就いた有識の士である。

【補説】○「以其知時也」の「以」也は、理由説明の形式。「其」は、「士」を指してゐることに注意を要する。「知其時」の形と混同しないやうに。○「非必難知也」の「非必」は、「必ズシモ」ニ非ズ

と訓み、一部否定即ち消極的否定を示す形式である。○「而莫之知者」の「者」はコトの意。「之ヲ知ル」は「知之」とかくが、否定語を更に取る時には、「莫知之」とはならず、動詞「知」と目的語「之」の位置が顛倒して、「莫之知」の形になることに注意することが肝腎である。○「有所蔽耳」は、意義上から、理由を説明する形式になつてゐる。「所」は、受身を示してゐる。○「唯識之士」の「士」に「ミ」を送ること。○「而已獨知之」の「知」に、限定副詞「獨」によつて「ミ」を送ることを忘れてはならぬ。○「不其手乎」の「乎」は反語形。

構文

所貴於士者 以其知時也。

時 有勢焉、勢所推移、非必難知也。而莫之知者、有所蔽耳。
 有機焉、機所起伏、

去危就安、

去濁就潔、

知之明、

彼之所驚、

故決之果、

我以爲當然。

如藤原憲清、不其然乎。

第十章 理由説明形

【全】

爲也

—であるが爲である。
—の爲である。

「ガタメナリ」「ノタメナリ」と訓んで、理由を説明する。

體有貴賤。有小大。無以小害大。無以賤害貴。養其小者爲小人。養其大者爲大人。今有場師。舍其梧檟。養其棘棘。則爲賤場師焉。養其一指。而失其肩背而不知也。則爲狼疾人也。飲食之人。則人賤之矣。焉其養小以失大也。飲食之人。無有失也。則口腹豈適爲尺寸之膚哉。(孟子・告子上)

【訓點】

體有貴賤、有小大。無以小害大、無以賤害貴。養其小者爲小人、養其大者爲大人。今有場師、舍其梧檟、養其棘棘、則爲賤場師焉。養其一指、而失其肩背、而不知也、則爲狼疾人也。飲食之人、則人賤之矣。

之矣。爲其養小以失大也。飲食之人、無有失也、則口腹豈適爲尺寸之膚哉。

【語釋】「貴賤小大」貴にして大なる者は心志であり、賤にして小なる者は四肢百骸である。「場師」庭作り。植木屋。「梧」は桐、「檟」は梓。何れも良木である。「棘棘」は酸棗、棘は小棗。何れも惡木である。「狼疾人」狼の疾める如き人。狼はよく顧みるものであるが、疾むとそれが出来なくなるといふ事から、自ら身を顧みる事の出来ぬ人の喩としていふ古語。「適」齊に同じ。古字通用す。

【通解】人の體には貴賤大小がある。肩背は貴く指拇は賤しく、口腹は小さく心志は大きい。その小を以て大を害する事なく、賤を以て貴を害する事のないやうにしなければならぬ。小體たる口腹を養ふ者は小人物となり、大體たる心志を養ふ者は大人物になる。今こゝに一人の庭師があつて、其の庭の有用な梧や檟を捨て置いて、そこに生える無用な酸棗や棘を大事に育てたら、人はへぼ庭師といふであらう、若し又一本の指を大事にして、卻つて肩や背の榮養を失ふやうな人があつたら、狼が病氣になつたやうな、丸で己の身を顧みる事の出来ぬ人といふだらう。飲食を嗜む人は、人が之を賤しむ。それは小さい口腹を養つて、大きい心志の養ひをしないからである。若し飲食を嗜む人が心志の養ひを失ふことがないとしたら、口腹の養ひはどうして只一尺一寸の皮膚の榮養のためだといふだけであらうか。實に道德を藏する大切な身體の養ひとなるわけである。

【補説】

○「養其小者」「養其大者」の「者」はヒトの意である。○「今有場師」の「有」にランニを透つて、

假定の形に訓むことに注意を要する。○「舍其楮楨」の「舍」は「捨」に同じ。文字は後世になつて次第に複雑化してゐるものがある。「舍」が「捨」に、「酉」が「酒」に、「暮」が「暮」に、「采」が「採」になつてゐるなどは其の例である。○「爲賤場師焉」の「爲」に、ンを送つて推量形に訓み、上の假定に呼應させねばならぬ。○「而失其肩背」の「而」は逆接。○「而不知也」「無有失也」の「不」「無」には、レ、バを送つて、下の「則」に連絡させねばならぬ。「而」は順接。○「爲其養小以失大也」の「爲——也」は、理由説明の形式である。○「則口腹豈適爲尺寸之膚哉」の「豈——哉」は、反語の原則的の形であり、且つ「爲——」は、理由説明の形を示したものである。

構文

明白な對偶法によつて居る。

體 有貴賤、無以小害大、養其小者、爲小人、
有大小、無以賤害貴、養其大者、爲大人。

舍其楮楨、別爲賤場師焉。
養其楸棘、

養其一指、不知也、則爲狼疾人焉。
而失其肩背。

飲食之人、則人賤之矣。爲其養小失大也。

飲食之人、無有失也、則口腹豈適爲尺寸之膚哉。

〔六〕

所以□□也。

——のわけ(いはれ)である。
——の次第である。
——のためのものである。

「——ノユエンナリ」と訓んで、「——ノワケデアル」「——ノ次第デアル」の意を示す。字義的にいへば、「所以——也」と訓み、「以テ——スル所」の義である。此の「所以」に就いては注意を要する點がある。即ち「所以ノ」として下へ續く場合は、大抵單に「所ノ」の意で、「以」は軽く添へたものである。然し「以」に重きが置かれた場合は、「故」「原因」「理由」等の意となつて、「ワケ」「イハレ」とかいふ譯が適合する。此の他に、主語に對し定義づける様な心持で置かれた「所以」は、「タメノモノ」の意であり、「所以」が直ぐ其の上の動詞へ係つてゆく時は、「ドウシタナラバ——」といふやうに、其の方法に就いて、一段と深く立入つて考慮するやうな意を表すものである。又此の語は屢、「所以——者」の形になり、「者」と呼應して、「——ユエンノモノ」と訓まれる。その時の「者」は、「ハ」又は「コト」の意である。

臣聞。地廣者粟多。國大者人衆。兵彊者士勇。是以泰山不讓土壤。故能成其大。河海不擇細流。故能就其深。王者不卻衆庶。故能明其德。是以地無四方。人無異國。四時充美。鬼神降福。此五帝三王之所以無敵也。(續文章軌範・李斯「諫逐客上書」)

訓點

臣聞、地廣者、粟多、國大者、人衆、兵彊者、士勇、是以、泰山、不讓、土壤、故能、成其、大、河海、不擇、細流、故能、就其、深、王者、不卻、衆庶、故能、明其、德、是以、地無、四方、人無、異國、四時、充美、鬼神、降福、此五帝・三王之所、以無敵也。

【語釋】「粟」五穀をいふ。「泰山」支那五岳の一。山東省にある。「不讓」見捨てない意。「河海」黄河と北海。「細流」小さい流れ。「不擇」擇び好みをしない。「衆庶」人民。「不卻」退けずに用ひること。「德」人格の力の意である。「地無四方」海内悉く王土であるから地に四方がない。「四方」は、異國をいふ。「人無異國」人に他國人といふ區別もなく、皆王臣であるの意。「四時充美」四季にわたつて凶年もなく、よく齊ひ和かなこと。「五帝」伏羲・神農・黄帝・堯・舜。「三王」夏の禹王・殷の湯

王・周の文王・武王。

【通解】自分は、「土地が広いと穀類が多く、國が大であると人民が多いし、兵が強いと士卒は勇敢である」と聞いて居ります。總べて包容力の大きなものは、自ら大をなすものである。かういふ譯で、有名な泰山は、少しの土くれでも嫌はずに集め積みましたから、かやうな大山になりました。又黄河や北海は、如何に小さな流れでも擇り好みせず流れ込ませるから、かやうに深く大きなものとなりました。それと同じく仁政を施される明君は、如何なる人民でも領内に引入れますから、其の徳を遺憾なく世に顯はすことが出来るのであります。だから土地には東西南北の區別なく皆王土、人には他國人などいふ區別なく皆王臣であります。天地も其の徳に感じて春夏秋冬の四時物充足して美觀を添へ、鬼神も王の徳に感じて幸福を降し給ふのであります。かの昔の五帝・三王といつて模範的な君主には敵するものがないと申すのもこれが爲であります。

【補説】○「臣聞、云々」の引用句に於て、「聞」の管到に注意を要する。○「是以」は、「是故」と同じく推理的接続として用ひられてゐて、理由説明の一形式である。○「地無四方」「人無異國」は、目的語の提起による倒装形。○「此五帝・三王之所以無敵也」の「此」所以「也」は、理由を説明する形式の一である。

構文

重疊法と對偶法との併用である。

地廣者衆多、泰山不讓土壤、故能我其大。
 臣聞、國大者人衆、是以河海不擇細流、故能就其深。
 兵彊者士勇、王者不却衆庶、故能明其德。
 是以地無四方、四時充美、
 人無異國、鬼神降福。此五帝三王之所以無敵也。

今之學者。大率責人之不善之意思常多。而責己之不善之意思常少。此謂以聖賢律人。以衆人待己。是以爲學者。所以終無益于己也。

(慎思錄)

訓點

今之學者、大率責人之不善之意思常多、而責己之不善之意思常少。此謂以聖賢律人、以衆人待己。是以爲學者、所以終無益于己也。

【語釋】「大率」大概。「責」咎めだてする。「律人」「律」は、ハカルこと。法をあてはめること。「人」は、他人。「衆人」一般の人。「以衆人待己」とは、わが身を責むるに寛大なことをいふ。「待」は、扱ふこと。遇すること。【終】結局。畢竟。

【通解】今の學問する人は、大概人の善くない言行を咎めだてする氣持がいつも多くして、自分の善くない言行を咎めだてする氣持はいつも少い。これを、他人を聖賢賢人扱ひにし、自分は世間でありふれた、普通人扱ひするといふものである。此のやうな誤つた考で居るから、學問する者が、いくら學んでも、自分の修業のために、畢竟何の利益もないといふ譯である。

【補説】○「學者」は、「學ブモノ」と訓む。學生の意である。「者」はヒトの意。○「此謂以聖賢律人、以衆人待己」の「此謂」は、「此ヲ」ト謂フ」と訓んで、「此ハ」デアル」と譯し、上文の説明を述べてゐる。○「是以」は「ココヲ以テ」とよみ、接續詞で、「是故」と同じく、「コノユエニ」「カヤウナワケヂ」「コレガタメニ」の意で、上に理由・原因を述べたことを明かにする形である。副詞の「以是」とは、全く異なることに注意を要する。○「所以終無益于己也」の「所以」也は、理由・原因を説述する形式である。

構文

對偶法を用ひてゐる。

今之學者、大率而責己之不善之意思常多、
 而責己之不善之意思常少。
 此謂以聖賢律人、
 以衆人待己。

是以、爲學者、所以終無益于己也。

清人之文。能入細。而不能爲大。秦漢古文。大抵麤枝大葉之文。氣骨雄壯。豪蕩不羈。所以爲高也。清人之文。唯於枝葉上粉澤。是所以不及也。(長野豊山「松陰談」)

訓點

清人之文、能入細、而不能爲大。秦・漢・古文、大抵麤枝大葉之文、氣骨雄壯、豪蕩不羈、所以爲高也。清人之文、唯於枝葉上粉澤、是所以不及也。

【語釋】「入細」 微に入り細を穿つてゐること。「爲大」 雄大味を持った文となすこと。「麤枝大葉」 荒く大きな枝と葉、即ち文章の細い法則に拘泥せず、自由に筆力を揮つたものに喩へる。「羈」は「粗」に通ずる。「氣骨雄壯」 正しきを守つて、何物にも屈しない意氣が非常にさかんに表れてゐること。「豪蕩不羈」 思想のあらくおぼまかで、何物にも束縛されないこと。「粉澤」 かざりたてること。「通解」 支那の清時代の人々の文章は、細かい點までも精しく書いてあるけれども、雄大さといふ點が出来かねてゐる。然るに、秦や漢時代の古文になると、多く自由に筆力を揮つた大ざっぱな文章で、何物にも

屈しない熾んな意氣に充ち、思想が大まかで何物にも束縛されてゐない。これが秦漢の文をすぐれてゐると賞讃する譯である。それに比較すると清時代の文章は、たゞ枝葉の上について飾りたてて居るだけである。これが秦漢の古文に及ばないわけである。

【補説】○「能入細、而不能爲大」の「入、而」は「入ルモ、而モ」と訓み、背反連接を表す。○「所以爲高也」の「所以」は、「ユエンナリ」と訓み、理由説明の形である。○「唯於枝葉上粉澤」の「粉澤」には、限定副詞「唯」に呼應して、ハミを送ることを忘れてはならぬ。○「是所以不及也」の「是所以」は「是」也」と「所以」也」と、理由説明が二重になつた形である。

構文

清人之文、能入細、而不能爲大。

秦漢古文、大抵麤枝大葉之文、氣骨雄壯、豪蕩不羈、所以爲高也。

清人之文、唯於枝葉上粉澤、是所以不及也。

業患乎不勤。而教患乎不詳。教詳則有薰染之益。業勤則有進之驗。有進修之驗。而有薰染之益。則其材益達。而其器益宏。此學者之所。以勤乎業。而詳乎教也。

訓點

業患乎不勤。而教患乎不詳。教詳則有薰染之益。業勤則有進修之驗。有進修之驗。而有薰染之益。則其材益達。而其器益宏。此學者之所。以勤乎業。而詳乎教也。

【語釋】「患」憂へて益々努める意。【薰染】善に染み感化される意。感化して善化させること。【進修】進み修めて立派になること。【驗】しるし。効驗。【材】材能をいふ。【達】進むこと。【器】器量。人物。

【通解】學業は、勤の勵まぬことについて患へて、益々努力することを心掛け、人に教へるには、懇到詳密でないことについて患へて、一段と努力することが大切である。若し教へるのに、懇到詳密であると、爲に人を感化して善化させる益があり、學業に精を出せば、善に進み修めてゆく効果がある。善に進み修めてゆく効果がある。善に進み修めてゆく効果があり、そして感化して善化される利益があると、其の人の

材能は益々發達し、そして其の人物器量は益々大きく大きなものとなる。これが學問する者の學業に勵み努め、教へることを詳密丁寧にするわけである。

【補説】○「業患乎不勤」の「不勤」は、「勤メザルニ」と訓む。或は「勤メザルヲ」としても悪くはない。○「此學者之所以勤乎業而詳乎教也」の「此」所以、也」は、原因・理由説明の形式である。「學者」は「學ブ者」と訓むのがよい。

構文

至極明瞭な對偶法によつて居る。

業患乎不勤、教詳則有薰染之益。
而、業勤則有進修之驗。
其材益達、其器益宏。

此學者之所以勤乎業、而詳乎教也。

〔允〕 文意から察する場合

何等暗示的冒頭語もなく、只文意から推して「レバナリ」とよんで、原因・理由の説明の意を表はす

子亦嘗見夫世之所謂貴人者乎。人面而陽尊之。背而陰笑之。生號爲公卿。沒喻爲犬鼠者。亦衆矣。彼惟不務於德。而求於外物之多也。

(方孝孺文集)

訓點

子亦嘗見夫世所謂貴人者乎。人面而陽尊之。背而陰笑之。生號爲公卿。沒喻爲犬鼠者。亦衆矣。彼惟不務於德。而求於外物之多也。

【語釋】「貴人」地位の高い人。「面」面前の意。「陽」表面の意。「背」背面にまはること。「陰」こつそりと。「犬鼠」犬や鼠の如きつまらぬ者の喻。

【通解】御身も亦嘗て彼の世間の所謂貴人といふものを見たことがありませう。世人は面前では表面的に人を尊ぶけれども、背後ではひそかに嘲笑する。生きてゐる間こそ公卿と稱せられて尊ばれる者が、死後すれば犬や鼠のやうなつまらぬものに喻へられる者も亦多いのである。これは彼の所謂貴人が、己が内面の徳の修養に努めずに、外部のものに依つて求めようとすることが多いからである。

【補説】○「子亦嘗見夫世之所謂貴人者乎」が、中心思想を爲してゐることに注意を要する。「乎」は單なる

疑問敬尾詞である。○「生號爲公卿」「沒喻爲犬鼠」の「號」「喻」には、文意上から受身に訓んでラレを送る。○「彼」は、「世之所謂貴人者」を指示してゐることが明かである。○「多也」は「多ケレバナリ」と訓んで、理由説明の形である。

構文

反對思想の對偶法式になつて居る。

子亦嘗見夫世之所謂貴人者乎。

人 面而陽尊之、背而陰笑之。生號爲公卿、沒喻爲犬鼠者、亦衆矣。

彼惟不務於德、而求於外物之多也。

猛虎在深山。百獸震恐。及在陷穽之中。搖尾而求食。積威約之漸也。故士有畫地爲牢。勢不可入。削木爲吏。議不可對。定計於鮮也。今交手足。受木索。暴肌膚。受榜捶。幽於圜牆之中。當此之時。見獄吏。則頭

槍地。視徒隸。則正傷息。何者。積威約之勢也。及以至是。言不辱者。所謂強顏耳。曷足貴乎。(續文章軌範)

訓點

猛虎在深山。百獸震恐。及在陷穿之中。搖尾而求食。積威約之漸也。故士有畫地爲牢。勢不可入。削木爲吏。議不可對。定計於鮮也。今交手足。受木索。暴肌膚。受榜捶。幽於圜牆之中。當此之時。見獄吏。則頭搶地。視徒隸。則正傷息。何者。積威約之勢也。及以至是。言不辱者。所謂強顏耳。曷足貴乎。

【語釋】「陷」おとし穴。「積威約之漸」人が次第に獸の威力を制する力。「鮮」明か。計を未前に定める。「交手足」手足を縛ること。「受木索」「木」は手かせ、足かせ、「索」は縛る繩。

【榜捶】「榜」は杖、「捶」は笞。「圜牆」土屏で圍んだ牢獄。「搶地」頭を地につけておじぎをする。

【徒隸】牢獄の役人。「傷息」おそれて呼吸がはばむ。「強顏」あつかましい。

【通解】猛虎が深山に居る時は、百獸は皆震ひ恐れるが、併し落し穴に陥つたならば、尾を搖かして食をほしがる。それは威力を人から制約されて、漸々さうなつたものだからである。それ故、士たる者は、地面

に筋をひいて牢屋の形を畫いてさへも、その中へはいらず、又木をきざんで獄吏の形を造つてさへも、そんなものに對してはならぬと考へるのである。それは、計を禍のまだ萌さぬ前に定めるからである。然るに今、手カセ足カセをせられて繩目の辱をうけた笞や杖肌ぬぎにされたの刑を受けて、牢屋にぶち込まれたといふ時になると、獄卒を見ては忽ち頭が地にさがり、牢屋の小使を見てさへ胸がどき／＼する。なぜならば、それはやはり威勢を制約せられた結果である。いよ／＼かうなつた際に、ナニこんなものは屈辱では無い。」と言ふのは、それは鐵面皮といふもので、何も貴い事は無い。

【補説】○「積威約之漸也」の「積」也は、意義上から、「積メバナリ」と訓み、原因・理由を説明する形式であることに注意を要する。○「故士不可對」の「故」は、理由説明形の一。○「定計於鮮也」の「定」也は、意義上から見て、理由説明の形式を示したものと見て、「定ムレバナリ」と訓まねばならぬ。○「何者積威約之勢也」の「何者」也は、「何トナレバ」バナリ」と訓み、理由説明の一形式である。○「所謂強顏耳」の「所謂」はイ、ハ、ユルと訓み、「所謂」と返點を施さないことになつてゐるか、誤らぬやうにせねばならぬ。「耳」は強意の助詞である。○「曷足貴乎」の「曷」乎は反語形の一。

構文

大體は對偶法によつて居る。

猛虎 在深山、百獸震恐。
 及在陷穽之中、
 而 搖尾 積威約之漸也。
 故土有 畫地爲牢、勢不可入。
 削木爲吏、議不可對。
 定計於鮮也。

今 交手足、受木索、
 暴肌膚、受榜捶、
 幽於圜牆之中。

當此之時、
 見獄吏、則頭搶地、
 視徒隸、則正惕息。
 何者、積威約之漸也。

及以至是、言不辱者、所謂強顏耳。曷是貴乎。

督仲。字夷吾。嘗與鮑叔賈。分利多自與。鮑叔不以爲貪。知仲貧也。嘗謀事窮困。鮑叔不以爲愚。知時有利不利也。嘗三戰三走。鮑叔不以爲怯。知仲有老母也。仲曰。生我者父母。知我者鮑子也。桓公九合諸

侯一匡天下。皆仲之謀。一則仲父。二則仲父。

訓 點

管仲、字夷吾。嘗與鮑叔賈。分利多自與。鮑叔不以爲貪。知仲貧也。嘗謀事窮困。鮑叔不以爲愚。知時有利不利也。嘗三戰三走。鮑叔不以爲怯。知仲有老母也。仲曰。生我者父母。知我者鮑子也。桓公九合諸侯。一匡天下。皆仲之謀。一則仲父。二則仲父。

【語釋】「賈」あきなひをいふ。坐してするを「賈」といひ、行きてなすのを商といふ。「怯」卑怯なこと。
 【九合】何度も會合させたこと。一説に、「九」は「糾」に通じ、督の意で、正して會合させることである。亦通ず。「一匡」統一し正すこと。「仲父」「父」は「父として尊敬する意。「仲」は管仲のこと。

【通解】管仲は字を夷吾といつた。嘗て親友の鮑叔牙と共に商賣をした。而して其の利益を分配する時に、管仲は自ら多く取つた。然るに鮑叔は管仲を以て貪欲な人と思はなかつた。これは管仲がその當時貧乏であることを知つてゐたからである。又、管仲は嘗て鮑叔と共に或る一事業を企て、失敗し、非常に困難に陥つた。この時も鮑叔は管仲を愚鈍な人と思はなかつた。これはその事を爲す時に、利(運)と不利(不運)とがあることを知つて居たからである。又管仲は三度戦争して、三度とも敗走した。然るに鮑叔は又管仲

(六)(七)(八)

「譬」の「譬」の場合。

「隱喻」の場合。

「引喻」の場合。

〔名〕

□	□
□	□
□	□
□	□

—のやうである。

—のやうなものである。

「ハ(スルハ・ナルハ)」「ノ(ナルガ)ゴトシ」と訓み、「ハ」「ノ」ノヤウデアル」「ハ」「ノ」ノヤウナモノデアル」の意で、「如」「若」の上に来る語は、體言か體言に準ずる語か、或は「トシテ」の送假名をとる語であるのが普通である。

伊川先生撰明道先生行狀曰。先生資稟既異。而充養有道。純粹如精金。溫潤如良玉。寬而有制。和而不流。忠誠貫於金石。孝悌通於神明。視其色。其接物也。如春陽之溫。聽其言。其入人也。如時雨之潤。胸懷洞然。徹視無間。測其蘊。則浩乎若滄溟之無際。極其德。美言蓋不足以形容。(近思錄)

懷洞然。徹視無間。測其蘊。則浩乎若滄溟之無際。極其德。美言蓋不足以形容。(近思錄)

訓點

伊川先生撰明道先生行狀曰。先生資稟既異。而充養有道。純粹如精金。溫潤如良玉。寬而有制。和而不流。忠誠貫於金石。孝悌通於神明。視其色。其接物也。如春陽之溫。聽其言。其入人也。如時雨之潤。胸懷洞然。徹視無間。測其蘊。則浩乎若滄溟之無際。極其德。美言蓋不足以形容。

【語釋】「伊川先生」明道先生の弟の程頤。「伊川」は其の號。「明道先生」宋の大儒程頤。「明道」は其の號。「行狀」性質・學術・德行等を述べた文。「資稟」生れつき。「充養」天性を充實修養すること。「精金」純金。「入人」人の心にしみ入る。「胸懷洞然」心中がほがらかな形容。「徹視」すつかり視透すこと。「滄溟」胸中にたくはへてゐる學問。「滄溟」大海。

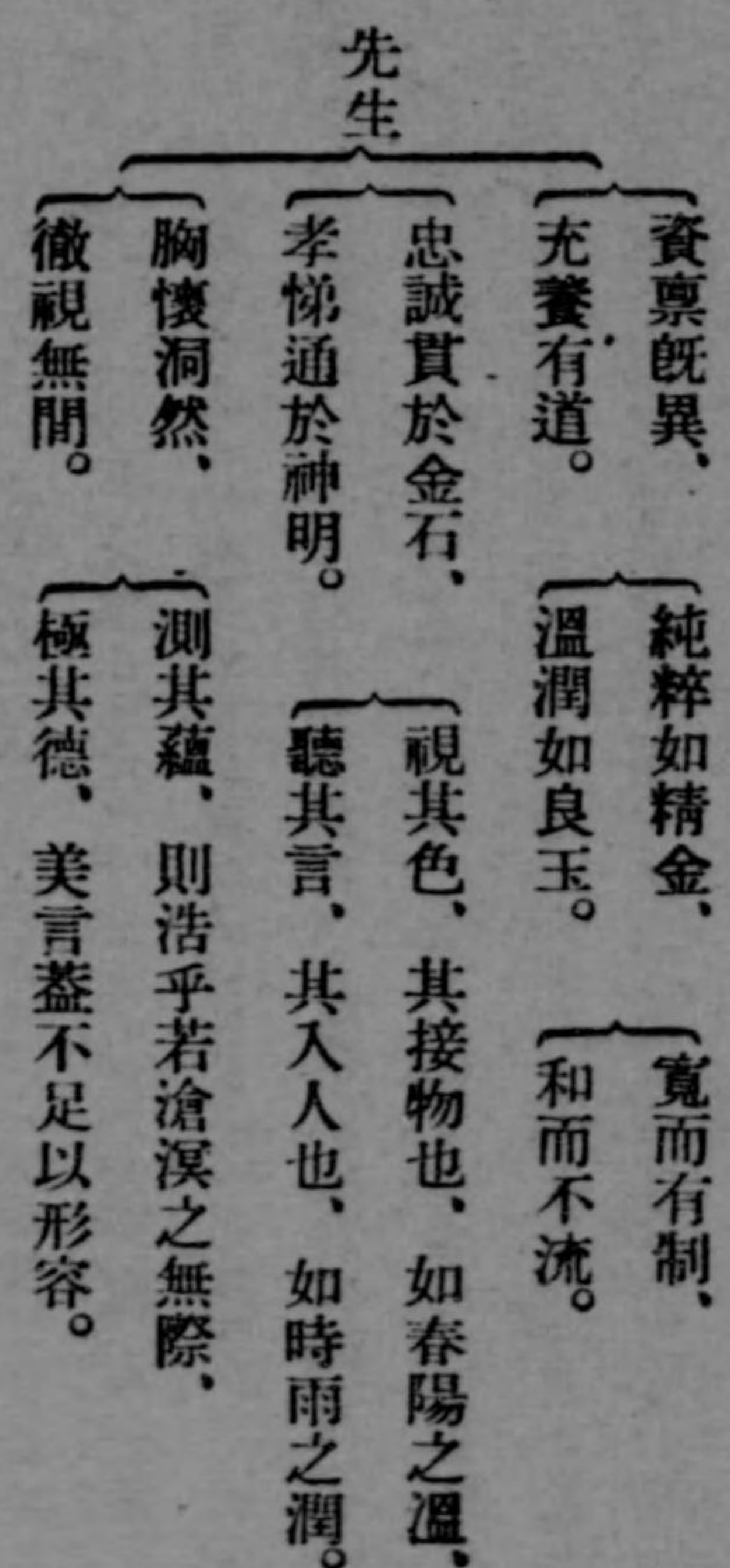
【通解】程伊川先生が其の兄の程明道先生の性質行爲の有様を文に作つて曰ふのに、先生は天性が既に常人と違つてゐて、其の上に其の天性を充實修養するに正しい道を得て居た。其の心の純眞で、まじり氣のない事は恰も純金のやうで、おだやかで潤ひのある事は見事な玉のやうであつた。心がゆるやかでよく人を

容れるが、而も正しい節制があつて亂れる事なく、やはらいでゐてよく人と和するが、而も流れて俗に陥るといふやうな事がなかつた。忠實至誠の精神は金石を貫き通すやうに堅く、父母に對する孝順と、兄弟に對する弟順の行ひは、神明にも感通して之を動かす程である。先生の顔色をよく見るに、物に接する時は、如何にも温和で春の日の温かさに似た趣であり、先生の言葉に耳を傾けて聽いて見るに、それが深く人の心にしみ入る事は、恰も時にあつたよ雨の萬物を潤ほすがやうである。先生の胸の中は如何にもかたつとほがらかで、すつかりと視透して何の隔もないといふやうな有様であつて、而もその心中に蓄へた學問を測つてみると、それは廣々として大海のはてしないもののやうに無限である。其の徳の極地を言はうとすれば、どんな美しい褒め言葉を並べても、依つて以て形容するに値しない。」と。

【補説】○「純粹」「温潤」にナルコトを送ることに注意が要る。○「寬而有制」「和而不流」の「而」はシカモと逆接に訓まねばならない。○「其接物也」「其入人也」の「也」はヤと訓む。讀假名を横に添へてもよい。○「美言蓋不足以形容」は、「蓋」の字によつて、「不」にンを送つて推量形にすることに注意して欲しい。「美言」にはモを送る。「雖以美言」の意である。○「如精金」「如良玉」「如春陽之温」「如時雨之潤」「若滄溟之無際」の「如」「若」はゴトシと訓み、譬喩形を示したものである。

構文

伊川先生、撰明道先生行狀曰、



孟子曰。由堯舜至於湯。五百有餘歲。若禹皋陶。則見而知之。若湯則聞而知之。由湯至於文王。五百有餘歲。若伊尹萊朱。則見而知之。若文王。則聞而知之。由文王至於孔子。五百有餘歲。若太公望散宜生。則見而知之。若孔子。則聞而知之。由孔子而來。至於今。百有餘歲。去聖人之世。若此其未遠也。近聖人之居。若此其甚也。然而無有乎爾。則亦無有乎爾。(孟子・盡心下)

訓點 孟子曰、「由堯・舜至於湯、五百有餘歲。若禹・皋陶、則見而知之。若湯、則聞而知之。由湯至於文王、五百有餘歲。若伊尹・萊朱、則見而知之。若文王、則聞而知之。由文王至於孔子、五百有餘歲。若太公望・散宜生、則見而知之。若孔子、則聞而知之。由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此、其未遠也。近聖人之居、若此、其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾。」

【語釋】「五百有餘歲」 五百年で聖人の出るのは、天道の常であるとされてゐる。然し亦遲速があるので、「有餘歲」といふ。【知之】 其の道を知る。【太公望】 呂尙のこと。號して師尙父といふ。文王の臣。【散宜生】 「散」は氏、「宜生」は名。文王の臣。【近聖人之居、若此其甚也】 孟子の生地の都と、孔子の生國の魯とは、擊柝の聲が聞える程近かつたの意。

【通解】 孟子が曰ふには、堯舜から湯に至るまでが五百有餘年。その間に於て、禹や皋陶のやうな人々は、親しく堯・舜の道を見て之を知つた。湯王の如きは堯舜の道を知つた。湯から文王に至るまでが五百有餘年。その間に伊尹や萊朱の如きは、親しく湯の道を見て之を知つた。文王の如きは湯の道を知つた。文王から孔子に至るまでが五百有餘年。その間に太公望や散宜生の如きは、親しく文王

道を見て之を知つた。孔子の如きはその道を知つた。孔子からこのかた百有餘年になる。聖人孔子の世を去る事は、この世に未ださほど遠くはなく、聖人孔子の居た魯に近い事も斯く甚しい。それなのに、孔子の道を見知り、聞知つてゐる者は世に全く一人も無い。こんな有様では後世とても孔子の大道を知る者が出ないであらう。さて、情ない事である。」と。

【補説】 ○「由堯・舜至於湯」「由湯至於文王」「由文王至於孔子」「由孔子而來至於今」の「由——至於——」の形に注意すること。そして、「至」には、マデを送ることを忘れてはならぬ。「而來」は、コノカタと訓む。○「堯・舜」「禹・皋陶」「伊尹・萊朱」「太公望・散宜生」のやうに、人名等の固有名詞の並列された場合に、並列點「・」を施すことを忘れないやうにすべきである。○「若禹・皋陶」「若湯」「若文王」「若孔子」の「若」は、皆「ゴトキハ」と訓み、譬喩の形式を表したものである。○「若此」は、「カクノゴトク」と訓み、譬喩形である。これを「コノゴトク」と訓んではいけない。○「然而無有乎爾」は、「然リ而モ有ルコト無キノミ」と訓み、「ダノニ、全ク無カツタノデアル。」と、「乎爾」によつて意味が強められて居る。「而」を逆接に訓むことに注意を要する。

構文

孟子曰、

第十一章 譬喩形

由舜堯 至於湯、五百有餘歲。【若禹、則見而知之。】
 由湯至於文王、五百有餘歲。【若皋陶、則聞而知之。】
 由文王至於孔子、五百有餘歲。【若伊尹、則見而知之。】
 【若萊朱、則聞而知之。】
 【若王文、則聞而知之。】
 由孔子而來至於今、百有餘歲。【若太公望、則見而知之。】
 【若散宜生、則聞而知之。】
 【若孔子、則聞而知之。】
 去聖人之世、若此其未遠也。【然而無有乎爾。】
 近聖人之居、若此其甚也。【則亦無有乎爾。】

[二]

似 _シ	似 _{タリ}
□	□
□	□

——と同じである。
 ——に同様である。

「——ニ似タリ」又は、「——ノゴトシ」と訓み、「——ト同ジデアル」——ニ同様デアル」の意である。

老聃曰。明王之治。功蓋天下。而似不自己。化貸萬物。而民弗恃。有莫舉名。使物自喜。立乎不測。而遊於无有者也。(莊子・應帝王)

【訓點】 老聃曰、「明王之治、功蓋天下、而似不自己。化貸萬物、而民弗恃。有莫舉名、使物自喜、立乎不測、而遊於无有者也。」

【語釋】「老聃」老子のこと。姓は李、名は耳、「聃」は其の字。【明王】明智ある聖王。【似不自己】自分が爲したのではないやうであるの意。【貸】施し與へる。【民弗恃】人民は上の明王の恩澤を恃みとしてゐないやうである。【莫舉名】名のつけやうがない。【不測】測ることの出来ぬ境地。【无有】「有ルコト无キトコロ」で、無爲の境界をいふ。「无」は無に同じ。

【通解】老子が曰ふには、「明王の政治といふものは、其の功績は天下の隅から隅まで遍ねく行き渡つてゐるに拘らず、明王自らは其の廣大なる功績は自分がしたのではないやうに思つてゐる。又その徳化は普く萬物に施してゐるにもかゝはらず、下の人民も明王の御蔭を恃みとしてゐないやうである。其の功績や徳化はあつても、餘りに廣大であり普通であるから、何とも名のつけやうがない。而も凡ての物をして各、自得し欣々然たらしめてゐる。そして己れ自らは常人の測度す可からざるの地たる意義の心境に安住し、何

訓點 劉備三往乃得見亮問策亮曰「曹操擁百萬之衆、挾天子、令諸侯、此誠不可與爭鋒。孫權據有江東一國險而民附。可與爲援、而不可圖。荆州用武之國也。益州險塞、沃野千里、天府之土。若跨有荆、益、保其巖阻、天下有變、荆州之軍向宛、洛、益州之衆出秦川、孰不箠食壺漿、以迎將軍乎。」備曰、「善。」與亮情好日密。曰、「孤之有孔明、猶魚之有水也。」

【語釋】「亮」 諸葛孔明のこと。「亮」 は其の名。【擄】 かゝへる。【挾天子】 「天子」 は、漢の獻帝をさす。曹操時に獻帝を奉じてゐたが、帝は單に虚器を擁するに過ぎなかつた。【爭鋒】 戦を交へること。【據有】 より有すること。【江東】 揚子江の東部地方。【民附】 人民が歸服すること。【不可圖】 擊滅をはかることは不可である。【荆州】 劉表の據つた處で、今の湖北省の大半と湖南省の北部とを管し襄陽に治す。【益州】 劉璋の據つた處で、今の四川省、成都に治す。【險塞】 四方が險しく立ち塞がつてゐる土地、即ち要害の地をいふ。【沃野千里】 地味が肥えて五穀類のよく出来る土地の廣大なる意。【天府之土】 天然の府庫。「府」は、クラ、物産が多く自然の庫の如き土地の意。【跨有】 またがり保有すること。【巖阻】 けはしく要害のよいところ。【宛】 河南省の宛縣。【洛】 河南省洛陽縣。【秦川】 關中の別稱。【箠食壺漿】 「箠」は、竹を以て編んだ食器で、飯を盛るに用ふ。食物を箠に盛り、飲料を壺に入

れ、兵を橋ふこと。「壺」は、酒類を入れるもの。「漿」は、飲料の汁。孟子の梁惠王下篇に出づ。

【通解】 劉備は三度訪ねて、そこで諸葛亮に面會することが出来て、天下を定める方策を問ふた。すると亮は、「今曹操は百萬の大軍をかゝへ、天子を奉じて諸侯に號令してゐる。これ誠に與に鋒先を争ふことは出来ない。吳の孫權は江東地方に據り、其の國は險阻で人民はよくなつてゐる。これは與に同盟して援けとなすに宜しいが、これを攻略しようなどと企圖したりすることは出来ない。荆州は軍を動かし戦ふのに適當な國である。益州は險阻で四方が山で塞がつて居り、肥沃の地が千里に連なり、誠に天然の府庫ともいふべき地である。故に將軍が若し此の荆州・益州の二州を跨がつて領有され、其のけはしい要害の地を保ち、萬一天下に事變が起つた時は、荆州の軍は宛・洛の二縣に向ひ、益州の軍は秦川に出たならば、天下の人民は皆喜んで、箠食壺漿の用意をして、將軍を迎へない者があらうか。」と答へた。そこで備は、「其の策は誠に結構である。」といつた。これからは亮との情好が日に日に親密を加へた。それで劉備が、「自分に孔明のあるのは、恰も魚に水があるやうなもので、一日も離れることは出来ない。」といつた。

【補説】 ○「備三往、乃得見亮」の「三」に「乃」を添へて送る。「乃」は、ソコデの意である。○「不可與争鋒」の「不可」は不可能の意。「可與爲援」の「可」は、可能の意である。「與」はトモ、ミとよみ、下の用言「争」を修飾する副詞的修飾語である。人を相手にする意を表してゐる。「與」に就いては種々の用法があるから、注意を要する。○「孰不箠食壺漿、以迎將軍乎」の「孰不——乎」は、反語形の一である。「孰

は人の場合は、タレとよみ、無生物の場合は、イブレとよむ。○「猶魚之有水也」の「猶」は、一種の譬喩形式である。親しい交りを「水魚之交」といふのは、こゝに典故がある。

192

孟子曰。禹稷顏回同道。禹思天下有溺者。由己溺之也。稷思天下有飢者。由己飢之也。是以。如是其急也。禹稷顏子。易地則皆然。

(孟子・離婁下)

訓 點

孟子曰、「禹・稷・顏回同道。禹思天下有溺者、由己溺之也。稷思天下有飢者、由己飢之也。是以如是其急也。禹稷顏子、易地則皆然。」

【語釋】「道」人として行ふべき當然の道。「易地」「易」は交換の意。互に其の居る所の地位を易へること。

【通解】孟子が曰ふのに、「禹や稷は、出で進んで人民を救ひ、顏回は退き隠れて己を修めた。其の事跡は同じでないけれども、其の行ふ所の道は、即ち同じなのである。何となれば、禹は司定の官となり、水を治めることを司どつてゐたので、天下に水に溺れるものがあれば、恰度自分が之を溺らせたかのやうに、氣の毒に思ふのである。稷は農官となり、稼穡を教へることを司どつてゐたので、天下に飢乏た者があ

ば、自分が之を飢やしたもののやうに、氣の毒に思ふのである。禹・稷の二人は民を救ふことを以て己の責任としてゐた。かういふわけで、民を救ふことが是のやうに急なのである。禹・稷・顏子の三人は、進退出處が同じでなくて、而して憂樂も亦異なつてゐるのは、其の居る所の地位に因つて然るのであつて、若し禹・稷と顏回とをして、其の地を易へて居らしめたならば、則ち禹・稷は能く顏子の樂を樂み、顏子も亦能く禹・稷の憂を憂へ、天下の民を救ふを以て自ら任じたことであらう。聖賢の心は時に隨つて各當然の理に合するものである。此れが即ち其の道と同じくする所以のものである。」と。

【補説】○「禹・稷・顏回」の間の並列點「・」を忘れないやうにすること。○「禹思天下有溺者由己溺之也」の「思」の管到に注意すること。「由」也」の形式に氣をつけねばならぬ。○「是以、如是其急也」の「是以」也」は、理由説述の一形式。「是以」は、「ココヲ以テ」と訓み、「如是」は、「カクノゴトク」と訓むことも重要な點である。○「易地則皆然」の「然」に「ン」を送つて推量形にすべきである。

構 文

孟子曰、

禹稷顏回同道。

禹思天下有溺者、由己溺之也。

是以、如是其急也。

禹稷顏子、易地則皆然。

第十一章 譬 喻 形

四八七

〔空〕

①	譬	如
②	譬猶	〔由〕

たとへば、ちやうど——のやうである。

これは、〔空〕の「如(レ)若(一)——」と、〔空〕の「猶(レ)由(一)——」の形式に、「譬」が加はつたものである。①は、「譬(レ)如(レ)若(一)ノゴトシ」、②は、「譬(レ)猶(レ)由(一)ノゴトシ」ナホ——ノ如シ」と訓み、「たとへば、ちやうど——ノヤウデアル」の意に譯す。

天下不能無強弱。國家不能無盛衰。而英雄豪傑。將大有爲於積衰積弱之餘。必也踔厲風發。一新天下之耳目。然後能變衰弱爲強盛。譬之。暴雷猛雨。飄忽震蕩。萬物殆爲之摧碎。然後天地開霽。日月如新。故英雄事業。不可以常理論也。豐太閤之舉。可以見之。

(青山延光「六雄八將論」)

訓點

天下不能無強弱。國家不能無盛衰。而英雄豪傑。將大有爲於積衰積弱之餘。必也踔厲風發。一新天下之耳目。然後能變衰弱爲強盛。譬之。暴雷猛雨。飄忽震蕩。萬物殆爲之摧碎。然後天地開霽。日月如新。故英雄事業。不可以常理論也。豐太閤之舉。可以見之。

【語釋】「積衰積弱之餘」 非常に衰へ非常に弱くなつた後のこと。【踔厲】 勢の甚しく烈しいこと。【風發】 勢が風の如く速くて、烈しいこと。【暴雷】 大雷。【飄忽】 襲來することの速急なこと。【震蕩】 震ひ動かすこと。【摧碎】 挫け砕けること。【開霽】 明るくなつてはれること。

【通解】 天下は、時によつて強くなつたり、弱くなつたりすることがないといふ譯にはゆかない。又國家は時によつて盛んになつたり、衰へたりすることがない譯にはゆかない。そして英雄豪傑が現れて天下國家の非常に衰へ弱くなつた後に、大いに爲す所あらんとするには、必ず極めて勢が烈しくて、風の起るが如く急激に物事をやつて天下の人々の耳目を全く更新して、それから衰へ弱つた状態を變じて強く盛んな状態とすることが出来るのである。これを物に譬へて見ると、大雷が鳴つて、篠突く雨が降り、之がために萬物が殆んど打碎かれるかと思ふ程の勢で、大嵐があつて、その後天地がカラツと晴れ渡り、日や月が新しくなつたやうに見えるのと同じである。だから英雄の事業は、普通の道理でその可否を論ずることは出来ないのである。それについては、豊臣秀吉の事業は、その状態を以て前述のことを知ることが出来る

のである。

【補説】○「讀して豊太閤の壯舉についての論文であることが解らねばならぬ。○「天下」「國家」と「強弱」「盛衰」との關係に着眼すると、「天下不能無強弱」と「國家不能無盛衰」とが對句をなすことが解る。又此の「天下」は、天子の御統御遊ばす全國の意であり、「國家」は諸侯の領邑たる一國の意であることに注意を要する。○「而英雄豪傑」が「將」の上にあることに注目して、「將大有爲」となることが解ると、「而英雄豪傑」積弱之餘」が、以下の「必也」の條件を爲すことが解る。此の「必也」の「也」は、指定のナリではなくて、「ヤ」と訓み、強勢の場合である。そして「必也」然後爲」こと訓んでゆく。○「譬之」に着眼すると、「故」で筆が更つてゐることに氣付く。そこで「如新」で切れて、「故」也」が別のもので、理由説述の形をとつたものであることが解る。「譬之」は譬喩の形式である。○「然後」が二つある。前者は「蹕風發云々」を承けて、下文に其の結果を表し、後者は、「暴雷猛雨云々」を承けて、下文に其の結果を表してゐることに注意を要する。

詩云。他山之石。可以攻玉。堯夫解之曰。玉者溫潤之物。若將兩塊玉來相磨。必磨不成。須是得他箇箇底物。方磨得出。譬如君子與小人處。爲小人侵陵。則修省畏避。動心忍性。增益預防。如此便道理出來。

來。(近思錄)

訓點

詩云、「他山之石、可以攻玉。」堯夫解之曰、「玉者溫潤之物。若將兩塊玉來相磨、必磨不成。須是得他箇箇底物、方磨兩出。譬如君子與小人處、爲小人侵陵、則修省畏避、動心忍性、增益預防。如此便道理出來。」

【語釋】「詩」詩經、小雅鶴鳴篇。「他山之石」よその山から出る粗悪な石も、以てわが玉を磨くに足る意。不善の人も善人の徳器を磨く助となる喩。「攻」磨くこと。「堯夫」姓は邵、名は雍、堯夫は其の字。註して庚節先生といふ。宋の程子の友である。「溫潤之物」溫和潤澤なるもの。おだやかで、しつとりとして澤のあるもの。「將」持つてに同じ。「兩塊玉」二つの玉のかたまり。「相磨必磨不成」二つの玉で磨き合ふとすると、元來温潤であるから、すべりあつて磨き上げられないの意。「他箇」他の「の」意。「他」は、「彼」の意。「箇箇底物」粗々しい砥石のやうなもの。「底」は、「的」に同じ。「磨」は、「磨」の略字。「礪」は、あら砥。「方」始めて。「侵陵」侵し凌ぐこと。「陵」は、「凌」に通じてシ、ハ、義。「修省畏避」己が身を省みて戒め慎み、相手の不善を畏れ避けること。「動心」道義の心、本來の正しい心を奮ひ起すこと。「忍性」性質上耐へられないことを忍び守ること。「增益」

今まで成し得なかつた事を増補すること。「預防」 過失を豫め防ぎ守ること。「預」は、「豫」に通ず。「通解」 詩經に、「よその山から出る粗悪な石も、用ひてわが玉を磨くに足る。」と云うてゐる。邵康節先生が之を解釋していふには、「玉といふものは、おだやかで潤澤のある物である。若し二つの玉を持つて來て磨き合ふたならば、必ず磨きは出來上るまい。そこで別の粗々しい砥石のやうな物を持つて來て、始めてよく磨き出して光彩あらしめることが出來るのである。譬へば、君子と小人とが共に仕へてゐるやうなものである。君子が小人に侵し凌がれると、わが身を省みて畏れ慎み、彼の不善を畏れ避け、道義の心を振ひ動かして、性質上忍び難い所まで忍び守り、今迄成し得なかつた事柄を層一層會得して、過失のないやうに豫め防ぎ守るのである。君子は、かやうに小人の磨きを受けるによつて、道理を自然と會得されて、其の徳が日に、進むのである。」と

【補説】 ○「詩云、地石之石、可以攻玉」は、引用句である。「云」の管到を明確にしなければならぬ。「云」は、こゝでは「詩ニ」といふ副詞の下に用ひられた場合である。「曰」と意は似てゐるけれども稍々軽い。○「若將兩塊玉來相磨」は、「若シ——バ」となつて假定條件を示し、「成ラザラン」と推量に呼應する。「將」は、モツテとよむことに注意を要する。○「他箇處礪底物」の「他箇」・「底」は、宋時代の口語である。○「方」をハジメテと訓む。○「譬如君子與小人處」の「譬如——」の形に注意すること。○「爲小人侵陵」の「侵陵」にラルを送つて文意上受身とすることに注意を要する。○「動心忍性、増益預防」は、孟子の語である。然し引用句とはなつてゐない。

【齒】

①	如(若)	□	然
②	猶(由)	□	然
③	譬(若)	□	然

ちやうど全く——のやうである。

譬へば、ちやうど全く——のやうである。

①は「——ノゴトク然リ」、②は「ナホ——ノゴトク然リ」、③は「タトヘバ——ノゴトク然リ」と訓む。「如」と「然」、「猶」と「然」とを以て、「イヤウデアル」と譯する場合である。「然」は「如」と相應するもので、「ソノヤウニスル」ことを特に明かに指示したものである。即ち「如」は類似をいひ、「然」は類似の意を強く肯定してゐるのである。「チャウド全ク——ノヤウデアル」と譯すのがよい。

孟子去齊。充虞路問曰。夫子若。有不豫色然。前日虞聞諸夫子。曰。君子不怨天。不尤人。曰。彼一時也。此一時也。五百年必有王者興。其間必有名世者。由周而來。七百有餘歲矣。以其數則過矣。以其時考之。則可矣。夫天未欲平治天下也。如欲平治天下。當今之世。舍我其誰也。

吾何爲不豫哉。(孟子・公孫丑下)

訓 點

孟子去齊。充虞路問曰、「夫子若有不豫色然。前日、虞聞諸夫子曰、「君子不怨天、不尤人。」」曰、「彼一時、此一時也。五百年必有王者興、其間必有名世者。」由周而來、七百有餘歲矣。以其數、則過矣。以其時、考之、則可矣。夫天未欲平治天下也。如欲平治天下、當今之世、舍我其誰也。吾何爲不豫哉。」

【語釋】「不豫」といふに同じ。「豫」はたのしみ。「不怨天、不尤人」不幸にして我が志成らざるも天を怨む事なく、世に容れられずとも人を咎める事なく、我は自ら自己自身を修め、自己の道を樂むの意。【彼一時此一時】「不怨天不尤人」と曰うたのは、彼の時に取つての言であるし、今不豫の色あるは、世を憂ふるの結果で、これは又此の時に於ての事である。固より天を怨み人を咎めて心から不豫を感じるのではなく、憂國の至情自ら色に表れて、不快げに見えるのであるから、彼と此と決して矛盾する譯ではないといふ意。

【通解】孟子が齊を去る時、充虞が道中で問ふて曰ふやう、先生には御不快のお顔色有るが如くに御見受け申します。前日私が先生からお伺ひした事が御座います。それは「君子は天を怨む事なく、人を尤める事

で、別もない。」と申す事でありませう。然るに先生の今日の御様子は、その御言葉と齟齬する様に存ぜられませうが、如何なる譯で御座りますか。孟子が曰ふに、「いや、あれはあの時の事で、これはこの時の事段矛盾のある譯ではない。凡そ五百年毎に必ず王者の興る事があり、其の間には必ず世に名のある人物があつてこれを輔佐する者だ。然るに周の世からこのかた七百餘年たつてゐる。其の年數から考へると既に王者の興るべき時を超過してゐるし、其の時勢から考へて見ると、今日は正に王者の興つて然るべき時である。然るに斯く王者の興らぬのは、天がまだ天下を泰平に治める事を欲しないのである。若し天が天下を泰平に治めたいと思つたならば、今の世に當つて輔佐の任に當る者は、この私を捨てて他に誰があらうぞ。天意已に天下の治平を欲せず、我固より天を怨まず、何として不快な事があらうぞや。只世を憂ふる心が面に表れて、自然不快なやうに見えた迄の事、決して天を怨み人を咎めて、心が樂まぬといふやうなわけではないのだ。」と。

【補説】○「夫子若有不豫色然」の「若」然の形式に注意すること。「夫子」は先生を尊敬していふ最上級の語である。多くの場合には、孔子を指してゐるやうである。○「有名世者」の「名」にアルを送つて詞動に訓む。○「由周而來」の「而來」は、コノカタと訓む。○「夫天未欲平治天下也」の「夫」はカノと訓み、下の「天」を指示してゐる。ソレと訓んではいけない。○「舍我其誰也」の「也」はヤと訓み、強意の詞である。「誰也」は、反語の一形式。○「吾何爲不豫哉」は、「吾ハ何スレゾ不豫ナランヤ」と訓み、「何爲」は反語形を示してゐる。「何爲」を「ナニスレゾ」と訓むべきことも注意しなければならぬ。

構文

孟子去齊。充虞欲問曰、夫子若有不豫色然。

前日虞聞諸夫子、曰、君子不怨天、不尤人。

曰、彼一時也。 五百年必有王者興。
此一時也。 其間必有名世者。

由周而來、七百有餘歲矣。
以其數、則過矣。
以其時考之、則可矣。

夫天未欲平治天下也。
如欲平治天下、當今之世、舍我其誰也。
吾何爲不豫哉。

人涉世。如行旅然。途有險夷。日有晴雨。畢竟不得避。只宜隨處隨時

相緩急。勿欲速以取災。勿猶豫以後期。是處旅之道。即涉世之道也。
(言志後錄)

訓點

人、涉_レ世、如_二行旅_一然。途_ニ有_二險夷_一。日_ニ有_二晴雨_一。畢竟_レ不得_レ避。只_レ宜_二隨_レ處_一。隨_レ時_ニ相_レ緩急_一。勿_レ欲_レ速_一以_レ取_レ災。勿_レ猶_レ豫_一以後_二期_一。是_レ處_レ旅_一之_レ道。即_レ涉_レ世_一之_レ道也。

【語釋】「涉世」 渡世をする。「涉」は、渡。「行旅」 旅行。「途」 道。「險夷」 險阻な處と平坦な處。
【釋義】 所詮、つまるところ。「緩急」 緩やかにしたり急にしたりすること。「猶豫」 ぐず／＼すること。
疑ひためらふ意にとらないうやうに注意を要する。「期」 期日。とき。「即」とりもなほさず。「處旅之道」 旅に對する方法。

【通解】 人が世渡りするのは、恰度旅行するのと同様である。途には險しい處もあれば平坦な處もあり、日には晴天もあれば雨天もあつて、結局避けることが出来ない。たゞ場所により時によつて、適當に或は緩やかにしたり、或は急にしたりするがよい。それを速く行かうと思つて災難を招いたりしてはならない。又ぐず／＼して豫定の期日に後れてはいけない。是が旅に對する方法であり、とりもなほさず人世を渡る方法である。

【補説】○「如行旅然」の「如——然」の形式に注意を要する。これは「如——」とあるのと同じく、たゞ丁寧にいつたまでである。○「勿欲速以取災」の「勿」は、禁止の意を表はし、「速」にナランコトヲと送ることに注意を要する。「以」は、用の意味で、「欲速」を用ひて、即ち「速カニショウトイフコトニヨツテ」の意である。○「是處旅之道、即涉世之道也。」の「是——也」は理由を説述する一形式である。且つ、「涉世」を「旅行」の譬喩によつて論述した文であることに着眼し、そして文末にこれを論断してゐることを知らねばならぬ。

構文

對偶法式に據つてゐる。

人涉世、如行旅然。

途有險夷。

畢竟不得避。

日有晴雨。

只宜隨時相緩急。

勿欲速以取災。

是即處旅之道。

也。

勿猶豫以後期。

涉世之道

夷狄不可以中國之治治也。譬若禽獸然。求其大治。必至於大亂。先王知其然。是故以不治治之。治之以不治者。乃所以深治之也。春秋

書公會戎于潛。何休曰。王者不治夷狄。錄戎來者不拒。去者不追也。

(文章軌範・蘇東坡「王者不治夷狄」論)

訓點

夷狄不可以下以中國之治治也。譬若禽獸然。求其大治。必至於大亂。先王知其然。是故以不治治之。治之以不治者。乃所以深治之也。春秋書公會戎于潛。何休曰。王者不治夷狄。錄戎來者不拒。去者不追也。

【語釋】「夷狄」五びすの族をいふ。「中國」四方の野蠻な夷狄に對して、支那の中央の文化の進んだ國土を指す。「春秋書」公羊傳の隱公二年の經に、「公、戎に潛に會す」とあり。其の註に、何休曰ふ、「凡て會と書する者は、其の内務を虚らし、外好を恃むを惡むなり。古は諸侯の朝する時に非ざれば、境を跨た人ゆるを得ず。云々」と。「錄戎」「戎」は夷狄の國名。野蠻國の名を記錄する。「何休」公羊傳に註した人の名。

【通解】夷狄は中國の治め方を以ては治められない。譬へば禽獸のやうに、物のわきまへがないからである。であるから中國の治め方の如くに、仁義を以て治めようと思ふと、必ず大いに亂れるに至る。夷狄は仁義の何たるかを知らず、意にまかせて横行する者であるから、卻つて仁義を窮屈なものとして、大亂に至る

であらう。古聖先生はかやうな譯を知つてゐるから、治めざるを以て之を治め、之を治むるに治めざるを以てするのが卻つて深く治める譯なのである。孔子の筆削された春秋に、「公は戎に潛に會す。」と書かれてあるのに、何休は之に註して曰ふに、「王者は夷狄を治めず、其の戎を記録するに、戎が中國に來る事あればそれは拒まず、又去る者は追はずといふ先王の意思に本づいたものである。」と。

【補説】○「譬若禽獸然」の「譬若」然の形に注意すること。「然」にレバナリを送つて意義上から理由説明の形にしなければならぬ。○「求其大治」の求にレバを送つて、假定形にしなければならぬ。○「是故」は「コノユエニ」と訓み、理由を説明する形式の一。○「治之以不治者、乃所以深治之也」の「者」所以也は、原因理由説明の一形式である。「者」はバと訓む。「乃」はカ、ハツテの意味に譯すべきである。○「春秋書」の「書」の管到に注意すること。

構文

概々對偶法によつて居る。全篇に多くある「治」の字に着眼する要をする。

夷狄不可以中國之治治也。譬若禽獸然。

求其大治、必至於大、先王知其然亂。

是故、以不治治之。

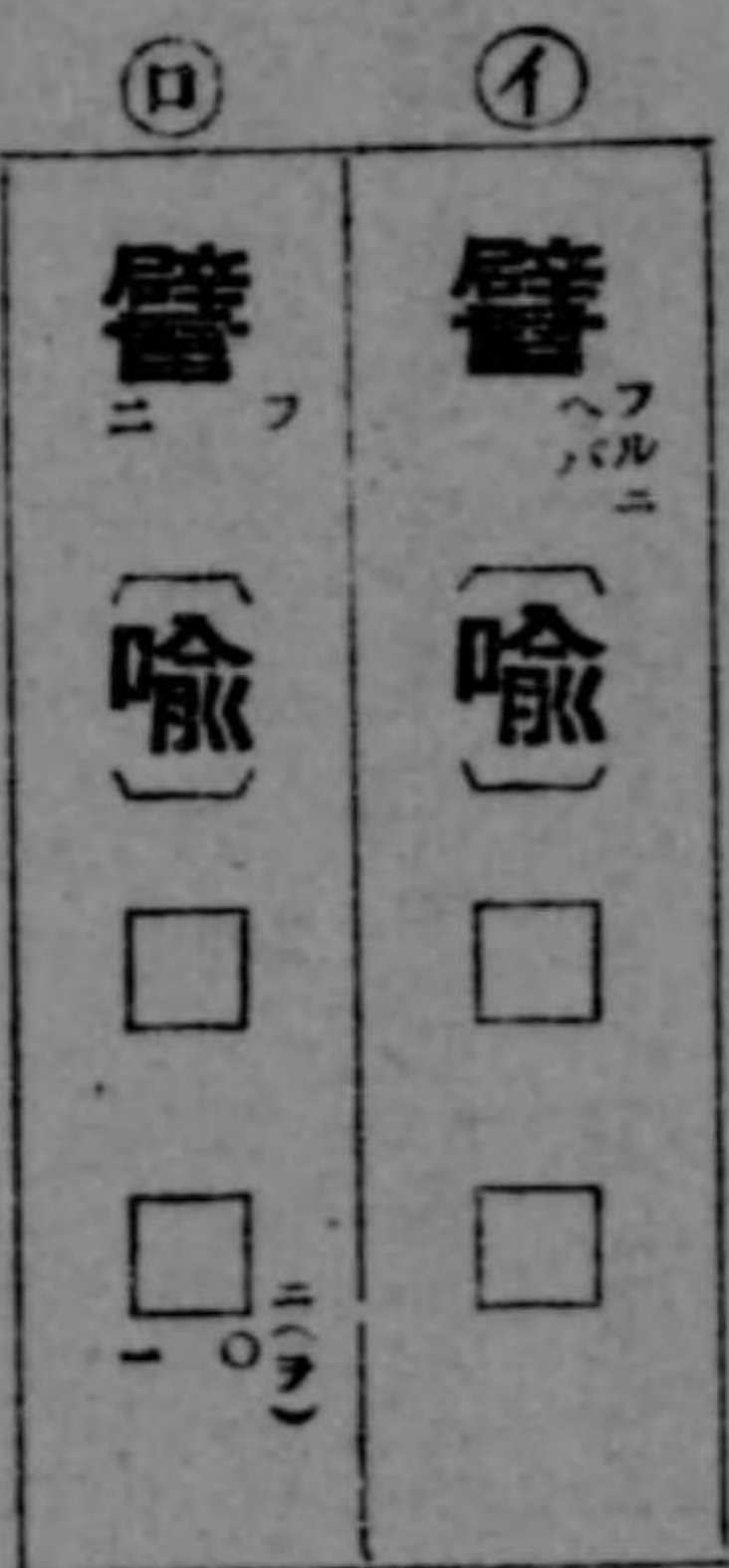
以不治治之者、乃所以深治之也。

春秋書公會戎于潛。

何休曰、王者不治夷狄。錄戎、

來者不拒、去者不追也。

〔空〕



①は、「タトヘバ」「タトフルニ」と同詞に訓み、②は「ニタトフ」「ヲタトフ」と動詞に訓むもので、「如」や「猶」に比して、少し意味が強く感ずる。「譬」は、「物ニタトヘテイヘバ」の意であり、「喻」は、「例ヲ以テ其ノ意ヲ説明スレバ」の意である。此の外に「一例ヲ擧ゲテ見レバ」の意に用ひるものとして「例」がある。しかし此の場合、假定のタトヒと混同しないやうにすることに注意を要する。

孟子曰。伯夷聖之清者也。伊尹聖之任者也。柳下惠聖之和者也。孔子聖之時者也。孔子之謂集大成。集大成也者。金聲而玉振之也。金

聲也者。始條理也。玉振之也者。終條理也。始條理者。智之事也。終條理者。聖之事也。智譬則巧也。聖譬則力也。由射於百步之外也。其至爾力也。其中非爾力也。(孟子・萬章下)

訓點

孟子曰、伯夷、聖之清者也。伊尹、聖之任者也。柳下惠、聖之和者也。孔子、聖之時者也。孔子之謂集大成。集大成也者、金聲而玉振之也。金聲也者、始條理也。玉振之也者、終條理也。始條理者、智之事也。終條理者、聖之事也。智譬則巧也。聖譬則力也。由射於百步之外也。其至爾力也。其中非爾力也。

【詁釋】「聖」 自然に安んじて行ひ、それが道に中り、勉強を怠たないものをいふ。【任】 天下の重きを一身に荷つて、少しも退いて人に委せることのないのをいふ。【時】 中正で、其の時時の宜しきにあたるのをいふ。【大成】 合奏の終り。「成」は音楽の一節奏の終るのをいふ。【金聲而玉振之】 「金」は鐘、「玉」は磬、「振」は其の音を以て收めて合奏の終りとする意。この文から出て、智徳大成の喩として用ひられる。【條理】 色々な樂器の音が、何れも其の特色の音を發揮して相擊はず、而もよくそれが調和して一大脈路

を爲すのをいふ。

【通解】 孟子が曰ふのに、「伯夷は、聖人中の清くすんでゐる者である。伊尹は、聖人中の聖徳を宣べ、天下を治める事を以て自ら任ずる者である。柳下惠は、聖人中のなだらかに穩かな者である。孔子は、聖人中の時の宜しきに應じて、清とも任とも和ともなる者である。孔子をば諸聖の徳を一身に集めて大成したものと謂ふのである。集めて大成するといふのは、音楽でいへば、八音合奏の時、先づ鐘を聲してそれを合圖に衆音を始め、合奏の終りに玉磬を一聲強く撃つて諸音を振める事である。始めに鐘をならすといふのは、これで衆音の條理を始めるのであり、終りに玉磬を撃つて之を振めるといふのは、衆音の條理を終へてしめくゝるわけである。條理を始めるのは智の事であり、條理を終へるのは聖の事である。智は譬へば巧である。又聖は譬へば力である。恰も百歩の外に居て弓を射るやうなものである。矢が的の所へ行くのは汝の力である。だが矢が的に中るのは汝の力でなくて、その技の巧さである」と。

【補説】 ○「最初の四句は、重疊法により、同形式の句が並んでゐるのにすぐ氣が付かねばならぬ。○「孔子之謂集大成」は、孔子ヲ(バ)之レ集メテ大成スト謂フ」と訓む。「集大成」を、「集大成」といふ訓み方もあるやうだが、訓點に示したやうにはつきり記憶しておくことである。○「集大成也者」「金聲也者」「玉振之也者」の「也者」は、「ナルモノハ」と訓むのがよい。そして「者」はコトの意に解したてはならぬ。○「金聲而玉振之也」「始條理也」「終條理也」「智之事也」「聖之事也」の「也」は、皆夫々の上の句の理由を説述する形式である。○「智譬則巧也」「聖譬則力也」の「譬也」は、譬喩形の一。○

「由射於百步之外也」の「由」也は、譬喩形である。○「其中非爾力也」の「中」は、アタルと訓む。「中毒」、「命中」の「中」に同じ。

構文

重疊法と承連法と對偶法とを混用して居る。

孟子曰、

伯夷聖之清者也。

伊尹聖之任者也。

柳下惠聖之和者也。

孔子聖之時者也。

孔子之謂集大成。

集大成也者、而金聲也。

金聲也者、始條理也。始條理者、智之事也。智譬則巧也。

玉振之、其至爾力也。

其至爾力也。其中非爾力也。

由射於百步之外也。

天地如此大矣。古今如此久矣。而其精忠鴻義之萃于一門。事業赫赫、不可磨滅者。其唯新田氏・楠木氏二公之事歟。曩昔方天步艱難、鑿與遠狩。二公獨先天下。振浩氣、唱大義。於是乎。四方響應。建武中興之業以成。譬之雷電一發。諸蟄振。而衆萌苗以成春。其功烈岳崇海豁。於戲盛矣乎。(芳野金陵「新建新田公祠堂」記)

訓點

天地如此大矣。古今如此久矣。而其精忠鴻義之萃于一門。事業赫赫、不可磨滅者。其唯新田氏・楠木氏二公之事歟。曩昔方天步艱難、鑿與遠狩。二公獨先天下。振浩氣、唱大義。於是乎。四方響應。建武中興之業以成。譬之雷電一發。諸蟄振。而衆萌苗以成春。其功烈岳崇海豁。於戲盛矣乎。

【語釋】「鴻義」大義。「萃」集。「新田氏」名は義貞、建武中興の元勳。「楠木氏」正成、正行の父子。

【疊善】「サキニ」の意。「昔」の意ではない。「天歩艱難」天子が御歩行されて御難儀遊ばされること。

逆賊の爲に御難遊ばされることに喩ふ。【鑿與遠狩】「鑿與」は天子の御乗りになる事。「遠狩」は、遠方に狩獵に御出でになること。後醍醐天皇が、北條高時の爲に隱岐國に遷されたまひしを、直接にいふのを避けていつたものである。【浩氣】浩大な正氣。【諸蠻振】冬越えの爲にちよこまつてゐた種々の小蟲が、春暖の候になつて振ひ起るのをいふ。【衆萌苗】衆多の若芽が勢よく萌え出る。「苗」は、草の萌え出る貌。【豁】廣いこと。【於戲】「嗚呼」に同じ。

【通解】天地の空間のひろがり、無限に廣大であり、古今の時の流れは、悠久である。此のやうに無限悠久の時空の中にあつて、而も其の精忠大義の念がよく一門一家の者に集り、徹し、其の盡忠報國事業が赫々として輝き、時空と共に永遠に不朽な光を放つてゐる者は、たゞ新田義貞公と楠木正成父子だけの事であらうわい。さきに、長くも後醍醐天皇が逆境に立たせられ、逆臣北條高時の爲に隱岐國に遷され給ふた時にあたつて、新田・楠木の二公だけは、天下に率先して浩大な正氣を振ひ起し、大義名分を高く唱へたのであつた。こゝに於て、四方八方の義を知る者が、響の物に應ずるやうに義旗を翻へして力をあはせ、建武中興の大業が、成功したのである。此の事を、春がめぐり来て、春雷一たび鳴りひびくや、今までもちよこまつてゐた種々の蟲が、春の聲を知つて振ひ起り、そして又衆多の若芽が勢よく萌え出て、天下が生色に充ちた平和な春景色を現出するのに譬へることが出来る。して見ると、彼の二公の功績偉烈は、まことに仰げば高き山のやうであり、望めば廣い海のやうであつて限りないものである。嗚呼、實に一大盛事であるわい。

【補説】○「天地如此大矣」「古今如此久矣」の「如」は譬喩形を示すものの一。此の二句は倒装法を用ひたものである。正格では、「天地之大如此矣」「古今之久如此矣」とすべきである。○「其唯新田氏・楠木氏二公之事歟」の「事」に、ノミを送つて、限定副詞「唯」に應ずることを忘れてはならぬ。○「方天步艱難、鑿與遠狩」の「方」は「アタル」と訓む。「狩」にシタマヒシニの敬語を送ることに注意を要する。○「二公獨先天下」の「二公」に、ノミを送つて、下の限定副詞「獨」に前提して應ずる。○「岳崇海豁」の「岳」「海」には、文意上からゴトクを送つて、譬喩の形にする。

〔雑〕
隱喩の場合

譬喩たる特別の語はないが、文意上から明かにして扱ふべきものである。

叔孫武叔毀仲尼。子貢曰。無以爲也。仲尼不可毀也。他人之賢者丘
陵也。猶可踰也。仲尼日月也。無得而踰焉。人雖欲自絶。其何傷於日
月乎。多見其不知量也。(論語・子張篇)

訓點

叔孫武叔毀仲尼。子貢曰。無以爲也。仲尼不可毀也。他人之賢者丘

賢者、丘陵也。猶可踰也。仲尼日月也。無得而踰焉。人雖欲自絶、其何傷於日月乎。多見其不知量也。

【語釋】「仲尼」孔子の名は丘。「仲尼」は其の字。「無以爲也」これを爲すことを用ふる無かれといふに同じ。毀つても益がないから、毀ることを用ふるに無かれとの意。「丘陵」土の小高いのを丘といひ、大きな阜(ヲカ)を陵といふ。「日月」至つて高いことに喩ふ。「自絶」孔子を誹謗して自ら孔子と絶縁する。「多」「適」に同じ。「不知量」自分の分量を知らない。

【通解】叔孫武叔が孔子を誹謗した。子貢が之を聞いて曰ふに、「仲尼を誹謗するやうなことをするなよ。仲尼は、固より誹謗することの出来ない大人物である。仲尼の道德の高深なことを物に譬へて言へば、他の賢者は、丘陵のやうなもので、平地から観ると少しは小高いが、猶ほ踰えることが出来る。ところが仲尼に至つては、日月のやうなもので、その絶対に高いことは、到底之を踰えることは出来ない。縱令人が孔子を誹謗して、自ら孔子に絶縁しようとしても、日月の高く明らかなる本體に何の傷がつかうぞ。即ち如何に誹謗しても、仲尼の高徳を損じ傷(ヤブ)ることが出来ないばかりでなく、たまたま自分の分量を知らない愚さを見(アラ)はすに過ぎないのだ」と。

【補説】○「無以爲也」は、「無以仲尼爲也」の省略である。これは、又「無以爲也」・「無以爲也」とも訓むことが出来る。○「猶可踰也」の「猶」は「トシ」と再讀しない。○「他人之賢者丘陵也」の「丘陵は賢者に喩へたもので、隱喩の形である。○「仲尼日月也」の「日月」は、「仲尼」に喩へたもの

で、此の形も亦隱喩である。○「多見其不知量也」の「多」は、マサニと副詞に訓むことに特に注意を要する。

構文

對偶法が一箇所見えて居る。

他人之賢者丘陵也。猶可踰也。

仲尼 日月也。無得而踰焉。

居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

(孟子・滕文公下)

訓點

居_レ天下之廣_レ居_レ立_レ天下之正_レ位_レ行_レ天下之大道_レ得_レ志與民由_レ之_レ不_レ得_レ志_レ獨_レ行_レ其_レ道_レ富_レ貴不能_レ淫_レ貧_レ賤不能_レ移_レ威_レ武不能_レ屈_レ此之謂_レ大丈夫。

【語釋】「廣居」仁をいふ。仁者は心が廣々としてゐるからである。【正位】禮をいふ。禮を守る者は身を正しくする。【大道】義をいふ。【淫】心のみだらにすること。【移】節操をかへる。【威武】權威武力をいふ。

【通解】天下の廣い居所のやうな仁を行ふ地位に於て、私意を挟まずに心を廣く持ち、天下の正しい位置のやうな禮を行ふ地位に立つて、邪曲なく身を持ち、天下の大道のやうな義を行つて、志を得て世に用ゐられた時は、人民と共に仁禮義の道によつて世を濟ひ、志を得ないで民間に在れば、自分だけがその仁禮義の道を行つてゆくまでのことである。さうしたならば、如何なる富貴の如き誘惑も、その心のみだらに動かすことは出来ないし、如何なる貧賤の如き迫害も、その節操をかへさせることは出来ないし、又如何なる威力武力の如き壓迫も、その志を屈服させることが出来ない。かうした人こそ眞に立派な人物といふのである。

【補説】「廣居」は「仁」の、「正位」は「禮」の、「大道」は「義」の隱喩である。○「獨行其道」の「行」にノミを送つて、限定副詞「獨」に呼應させねばならぬ。○「富貴」「貧賤」「威武」には、夫々ノミを送つて背反の意を表すやうにする。「雖以富貴」「雖以貧賤」「雖以威武」の「雖以」が略された形と見れば分り易い。

構文

重疊法と對偶法とを併用してゐるから、形式の上からは至つて分り易い。

居天下之廣居、
立天下之正位、
行天下之大道、
得志、與民由之、
不得志、獨行其道。

富貴不能淫、
貧賤不能移、
威武不能屈、
此之謂大丈夫。

〔考〕

引喩の場合

「引喩」は、古人の語、或は故事を借りていふ方法である。

牧豎折腰。不得領。乳童拱手。亦不可戲。君子以恭敬爲甲冑。以遜讓爲干櫓。誰敢以非禮加之。故曰。人自侮。而後人侮之。(言志書錄)

訓點

牧豎折腰。不得領。乳童拱手。亦不可戲。君子以恭敬爲甲冑。以遜讓爲干櫓。誰敢以非禮加之。故曰。人自侮。而後人侮之。(言志書錄)

貴、以遜讓爲干櫓、誰敢以非禮加之。故曰、「人自侮、而後人侮之。」

【語釋】「牧豎」牧童のこと。「折腰」お辭儀すること。腰をかかめて敬意を表すること。【頡】うなづ

くこと。頭をさげること。【乳童】乳のみ兒。【拱手】手を組むこと。支那式の敬禮をいふ。【戲】か

らかふこと。【甲冑】「よろひ」と「かぶと」。身の護りの意。【遜讓】へり下りゆづること。禮儀に本づ

く。【干櫓】「干」は盾、「櫓」は大盾、矛や矢を防ぐ道具である。【非禮】「無禮」に同じ。【加】しかけ

る。仕向ける。【故曰】孟子の離婁上篇に「夫人必自侮、然後人侮之」とある。

【通解】牧場の牛飼の童のやうなものでも、腰を曲げて敬禮すると、こちらもそれに對して答禮しなければ

ならない。又乳をのんでゐる幼い子供のやうなものでも、手を組んで敬意を表してゐると、こちらからも

敵れかゝることは出来ない。まして君子たる者が、恭敬を以て甲冑のやうに身の護りとし、遜讓を以て盾

の如く身の護りとしたならば、誰が思ひ切つて無禮なことをしかけるものがあらうか、無禮をしかけるも

のではないのである。故に古人も、「人は自分で自分を侮つてから、始めて他人が侮るやうになるのである。」

といつてゐるのである。

【補説】○「牧豎」「乳童」に、モを送つて背反の意を表し、「折腰」「拱手」の「折」「拱」にバを送つて

假定形に訓まねばならぬ。○「以恭敬爲甲冑」「以遜讓爲干櫓」は共に隱喩の形を用ひたものである。○「甲

冑」の「冑」と、「華冑」の「冑」とは似て非なるもの。混同しないやうに注意を要する。○「故曰」に三

用法がある。①古人曰の場合、②上を結んでいふ原因理由を説明する場合、③上に掲げた言を再言す

る場合。こゝは①の場合である。

構文 對偶法によつて居る。

牧豎折腰、不得不頷。

乳童拱手、亦不可戲。

君子

以恭敬爲甲冑、

以遜讓爲干櫓、

誰敢以非禮加之。

人自侮、

而後

人侮之。

第十二章 時相形

時相形は、過去・現在・未來の時を表示する文の形式で、次の五種の場合がある。

第十二章 時相形

- (一) 副詞「已・已經・業・(已業・業已)・既(既而)・曾・嘗・常・嚮(者)・鄉(者)・曩(者)・曩(者)・往者・曩昔・往昔・昔者・昔在・古者古昔」等を用ひて過去の時を表す場合。
- (二) 「方・今・方今・當今・今也・今茲・今時・如今・今者・適・祇・祇」等を用ひて、現在の時を表す場合。
- (三) 「將・且・欲」等を用ひて、未來の時を表す場合。
- (四) 歇尾詞「矣・也」を用ひて、過去・現在・未來の時を表し、「也」を用ひて、未來の時を表す場合。
- (五) 文意によつて、過去・現在・未來を表す場合。

〔次〕

已	已	經
業	已業	業已

もはや(最早)。
最早さうなつた上は。

此等は皆「スデニ」と訓みニを送る。

「已」と「已經」とは、「未」の反対で、事の現に斯くなつた意を表し、「モハヤ」と譯す。國語の現在完了の助動詞「ツ・ヌ・タリ・リ」に似てゐる。「已經」は近世の漢文に多く用ひられる。現在の支那の口語

での「スデニ」の意味の場合は、此の「已經」を用ひてゐる。或は「已經」——「已」——と訓んでもよい。「業」の字が重い。即ち事の然るを主すしていふのである。「最早サウナツタ上ハ」と譯し、過去の事が未「已ニ然ル」これはの義で、「已」の義が軽く、來に關係することを表す。「已業」「業已」と連用されてゐるのも「スデニ」と訓む。この場合には意がややゆるやかである。

天尊天卑。乾坤定矣。君臣之分。已屬天定。各盡其職而已。故臣之於君。當不視畜養之恩何如。而厚薄其報也。(言志錄)

訓點

天尊^テ天卑^ニ。乾坤^ヲ定^ム矣。君臣^ノ之分^ハ、已^レ屬^ス天定^ニ。各^々盡^ス其職^ヲ而已。故^ニ臣之^ノ於^テ君^ニ、當^レ不^レ視^テ畜養^ノ之恩^ヲ何^ノ如^ク、而^{シテ}厚薄^シ其報^ヲ也。

【語釋】「乾坤」天地。「天定」天道の自然によつて定まること。「畜養」「畜」も「養」もヤシナフこと。【通解】かの天は高く尊位であり、地は低く卑位であつて、各々天地の分が自然の法則として定まつてゐる。これと同様に、人道に於ける君と臣との分別は、もともとから君は天位、臣は地位として、天道の自然によつて定まつてゐるのである。だから、各人はこの自然の天則に従つて、自分の職務に力を竭し、さへすればよいのである。かういふ具合であるから、臣の君に對するは、其の君が民を養ひ生活させて呉れる

恩愛の大小などを考へて、それによつて報恩の行爲を、或は厚くし、或は薄くしたりすべきでないのは當然のことである。

【補説】○「已屬天定」の「已」は過去を示す時相の形式の一。○「各盡其職而已」の「而已」は、二字で、ミと訓むことに注意。○「故臣之於君云々」の「故」は、原因理由を説述する形式の一。「於君」は「對君」に同じ。○「當」は、文末まで管到してゐることに注意することを要する。○「畜養」の畜には三義あり、①音「チク」のときは、貯蓄の意。②音「キク」のときは、養フ意。③音「キフ」のときは、家畜の意。

構文

大體は、對偶法によつて居る。

天尊、
地卑、
〔乾〕定矣。

〔君〕之分、已屬天定。各盡其職而已。

故臣之於君、當不而視畜養之恩何如、
厚薄其報也。

〔尅〕

既	而
既	而

とつくに。
もうすつかり。

「既」は「スデニ」と訓む。「既而」は「スデニシテ」と訓み、「而」の字は訓まない習慣になつて居る。「將」の反對で、「トツクニ」「モツスツカリ」の意で、過去を表す。國語の過去の助動詞「キ・ケリ」に相當する。

臣少多疾病。九歲不行。零丁孤苦。至于成立。既無伯叔。終鮮兄弟。門衰祚薄。晚有兒息。外無期功彊近之親。內無應門五尺之童。筑筑子立。形影相弔。(續文章軌範及古文眞寶後集・李密「陳情表」)

訓點

臣少多ニ疾病、九歲不行。零丁孤苦、至于成立。既無伯叔、終鮮兄弟。門衰祚薄、晚有兒息。外無期功彊近之親、內無應門五尺之童。

笑筭子立形影相弔。

【語釋】「不行」歩行の困難なること。【零丁】志を失ふこと。零落すること。落ちぶれること。【孤苦】

早く父を失つて孤兒となり、難儀すること。【成立】成人となること。【伯叔】「伯」は父の兄、「叔」

は父の弟。【門衰祚薄】家門が衰微して幸福の薄きこと。「祚」は「福」をいふ。【晚】晩年の意。

【期功還近】「期」は、一年の喪服、祖父母・伯叔父母・兄弟の爲に服す。「功」も喪服の名で、大功・小

功の別がある。「大功」は、九箇月の服で、従父昆弟の場合、「小功」は、五箇月の服で、再従兄弟・外祖

父母の喪服をいふ。「強」は、「強」に同じく、有力な近縁の親戚の意。【應門五尺之童】玄關に客を取次

ぐ童子をいふ。二歳半を一尺とし、十二・三歳の童子を「五尺之童」といふ。【獨りぼつちで寂し

いさま。】「筭」は、單なり。【子立】孤立をいふ。

【通解】私は幼時から病氣勝で、九歳になるまで歩行もまゝならぬ身でした。そして落ちぶれて誰一人たよ

る所もなく、困苦の中に漸く一人前の人として社會にたてるやうになつたのであります。私にはとくに、か

ら伯父も叔父もなく、つまりは兄弟も鮮く、家門は衰微し、運の廻りもわるく、年をとつてから子供が生

れ、外には一箇年とか六箇月とか三箇月とかいふ程の喪服を着るべき近い親戚といふものもなく、家には、

門に出て客に應對取次をする召使の童もなければ、全く獨りぼつちであつて、身が動けば影が伴なふとい

ふだけで、たゞ私の中から影法師と互に見舞ひあつてゐる哀れな有様であります。

【補説】○「九歳」に「マデ」を添へて送ることに注意すること。○「零丁」は、「伶仃」に同じく、此頃の、人

を尋ねる爲の招子も「零丁」とかくけれども、之とは異なることを知らねばならぬ。○「既」は、過去の

時を表はす副詞。

構文 大體は對偶法によつて居る。

臣少多疾病、九歳不行。零丁孤苦、至于成立。

既無伯叔、門衰、晚有兒息、外無期功還近之親、笑筭子立、

終鮮兄弟、祚薄、内無應門五尺之童、形影相弔。

十一日。睡起則去地羈口。已遠矣。兩岸沒于水。人家皆在波光瀲灩中。既而岳州諸山。蜿蜒而出。賈舶之挂帆。至自洞庭者。如鸕鷀群飛。與山翠相映。乍青乍白。變幻無常。洞庭與大江。一衣帶地劃之。會江大漲。沒在水底。行樹微露梢末。點點如薺。湖面則皎然一白。與天無際。當中有一點青螺。如隨波下上者。爲鷄窩山。(竹添井井「棧雲峽雨日記」)

訓點

十一日。睡起則去地羈口。已遠矣。兩岸沒于水。人家皆在波

第十二章 時相形

光瀟灑中一既而岳州諸山蜿蜒而出。賈船之挂帆。至自洞庭者。如鷓鴣群飛。與三山翠相映。乍青乍白。變幻無常。洞庭與大江。一衣帶地。劃之。會江大漲。沒在水底。行樹微露。梢末一點點。如薺。湖面則皎然。一白。與天無際。當中有一點青螺。如三隨波下上者。爲鷓鴣高山。

【語釋】「睡起」眠りから起きること。【激漣】水のちら／＼動く形容。【蟻蟻】蛇のうねるやうにうね／＼とした形容。【賈船】商船。【鷓鴣】鴉のこと。【一衣帶地】一筋の帯のやうな狭い地。細い一筋の

流れを「一衣帶水」といふ。【行樹】往來の並木。【薺】「なづな」のこと。【皎然】真白いことの形容。

【青螺】青色の「にし」といふ貝。青山の形容に用ひられる。

【通解】十一日。目がさめて起きて見たら、地褌口を去つてもう大分遠く来てゐた大した。出水で、兩岸は水中に没して、人家は皆波の光のちらちらと動く中に在る。その中に岳州の山々がうねうねとして現れて来た。商船の帆を張つて洞庭湖からやつて来る者は、恰も鷓鴣の群り飛ぶやうで、その帆が山の緑と映じ合つて、忽ち青くなり、忽ち白くなり、色々變化して定めがない。洞庭湖と大江とは、帯一筋程の狭い地で區切られてゐる。ところが今は恰度大江に水が一杯になつて、その堺の地が水底に没して、往來の並木がほんの少し板の先を出してゐて、ぼつぼつと薺が生えてゐる様に見える。湖面は一面に眞白で、天と接してはてしがない。その中央に當つて、一點青螺が波のまにまに上つたり下つたりしてゐる様に見える者が

ある。それが鷓鴣高山である。

【補説】○「已遠矣の「已」は過去を示す時相形の副詞。○「既而」は「ステニシテ」と訓み、時相形の一で過去を表すものである。○「乍青乍白」の「乍」を、タチマチと訓むことを牢記して置かねばならぬ。國語ではナガラと訓むが、これは當て訓みである。○「會、江大漲」の「會」はタマタマと訓み、逢假名はなく、踊字「と」を添へることに注意を要する。「恰度其の時」と譯し、現在を示す時相形の一である。



會・嘗・常

その以前
これまでに
従來

三字皆「カッテ」と訓み、ソノ以前「コレマデニ」「従來」等と譯し、過去の經驗を示す意に用ひる。更に詳述すれば、「カネ」は「サウイフ覺エガアル」「カネテサウイフ事ヲミタ事ガアル」「サウイフタメシガアル」といふ思想である。畢竟、英語の *ever* の氣持である。従つて之に打消が伴ふと *never* であつて、「一度モナイ」「ソナナ經驗ハ一度モ持タナイ」といふ意になつて来る。しかし、解釋としては、大體そのまま「カッテ」として置いてよい。なほ、「嘗」と「常」とは普通として使用されたものであり、「嘗」は俗字で、「嘗」が正字である。

人往往有將不緊要事來語者。我輒易生傲惰。太不可。渠會未經事。所以認閑事做緊要事。我緩頰論之。可也。以傲惰待之。失德也。

(言志後錄)

訓點

人往往有將不緊要事來語者。我輒易生傲惰。太不可。渠會未經事。所以認閑事做緊要事。我緩頰論之。可也。以傲惰待之。失德也。

【語釋】「往往」時々。「將」以に同じ。多く俗語文に用ひる。「不緊要事」緊急肝要でない事柄。「傲惰」おごりなまけること。「渠」彼に同じ。「會」これまでの意。強勢の辭として、少しもの意にとつてもよい。「未經事」人事に關する経験のないこと。「閑事」急を要しないこと。ひまな事。「傲」なすこと。「緩頰」おだやかな顔つきをすること。「失德」不徳な行をいふ。

【通解】人が時々緊急肝要でもない事を材料として、自分の處へ話しに來ると、自分は何時でも馬鹿にしたやうな、おごり怠けた態度をし勝であるが、それは甚だ宜しくないことである。彼は今迄にまだ人生に對する経験がないのであつて、無駄事を緊急重要事と思つてゐる譯である。其のやうな場合には、自分はお

だやかな顔つきで、親切に之を説き諭してやればよい。それを先方を馬鹿にしたやうな、おごり怠けた態度であしらは不徳な行である。

【補説】○「輒」は、「ソノタビゴトニ」「イツモ」の意にとる。○「太不可」の「太」は、「ハナハダ」とよみ、大イニの意。「太不」は、積極的打消、即ち全部否定の形である。○「所以認閑事做緊要事」の「所以」は、理由を説述する形式の一で、ワケデアルの意に解く。○「我緩頰論之、可也」の「可也」は、「スレバ、ソレデヨイ」の意で、「不可也」の場合は、「スルハ、ヨロシクナイ」の意である。指定や可能の「ベシ」の場合と誤らないやうに注意を要する。

後漢許邵。少峻名節。好人倫。多所賞識。時郭太亦知人。故天下言拔士者。稱許郭。曹操微時。常卑辭厚禮。求爲己目。邵鄙其人曰。君清平之姦賊。亂世之英雄。操大悅而去。

訓點

後漢許邵。少峻名節。好人倫。多所賞識。時郭太亦知人。故天下言拔士者。稱許郭。曹操微時。常卑辭厚禮。求爲己目。邵鄙其人曰。君清平之姦賊。亂世之英雄。操大悅而去。

【語釋】「峻」高くすぐれてゐること。【人倫】人の風むべき道、人たるの道。五倫・五常をいふ。【賞識】其の美を識別すること。【拔士】人材を拔擢する。【微】微賤。【常】「嘗」に同じ。【目】輔佐。【清平】世がよく治まつて静かなこと。

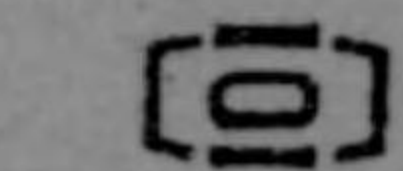
【通解】後漢の許都は、年少の頃から名節の譽が高く、そして人として履行すべき人倫道德を好んで行ひ修め、他人の美を識別することが多かつた。恰度其の時、郭太も亦よく人を見抜く人であつた。だから天下の人達が人材を拔擢する人の話を言へば、許都と郭太との二人を稱揚してゐた。曹操がまだ微賤であつた時に、或る時言辭を丁寧にし、禮を厚くして、許都のところに自分の輔佐になつていたとき度いといふことを願つて行つた事がある。郭太は操を鄙んで曰ふには、「お前は太平の世に於ける惡賊であつて、亂世に於ける英雄である。」と。曹操は此の語を聞いて非常に喜悅して立去つた。

【補説】○「少峻名節」の「少」は、ワカクシテと訓むことに注意を要する。○「曹操微時」の「微」に、ナリシを送つて、文意上から時相の過去形を表す。○「常卑辭厚禮」の「常」は「嘗」と普通で、カツテと訓む。

構文

後漢許都、少峻名節。好人倫。多所賞識。故天下言拔士者、稱許郭太、亦知人。

曹操微時、常卑辭厚禮。求爲己目。郭鄙其人曰、君清平之姦賊、操大悅而去。



嚮(者)・郷(者)・鄉(者)・曩(者)・往(者) 曩昔・往昔・昔者・昔在・古者・古昔

これまでに。その以前。そのむかし。

「嚮」・「嚮者」・「郷」・「郷者」・「鄉」・「鄉者」・「曩」・「曩者」・「往」・「往者」は、皆「サキニ」と訓み、ニを送る。【五】と同様に、「コレマデニ」「其ノ以前」の意として、過去の事を表す。「曩昔」は「ナウセキ」と訓み、「其ノムカシ」と譯す。「往昔」・「昔者」・「昔在」・「古者」・「古昔」は、皆「ムカシ」と訓み、字面に觀て明かであるやうに、過去の事を表すもので、「ソノムカシ」と譯す。

張耳陳餘始居約時。相然信以死。及據國爭權。卒相滅亡。何嚮者相慕用之誠。後相倍之辰也。豈非以利哉。(司馬遷・史記「張耳・陳餘列傳」)

訓 點

張耳・陳餘始居約時、相然信以死、及據國爭權、卒相滅亡。何嚮者相慕用之誠、後相倍之戻也。豈非以利哉。

【語釋】「張耳・陳餘」共に魏の大梁の人で親交があつた。【約】困約。苦しみ難儀してゐること。【然信】ゆるし合ひ信じ合ふこと。【慕用】慕ひ用ひること。【倍】背くこと。【戻】心のもとりねぢけること。

【通解】張耳と陳餘とは、其の始め貧窮の境遇に居つた折は、互に生命までも投げ出して信じ合つて居た。然るに一の國土に據り、權力を争ふやうになつて、終に互に滅ぼし合ふやうになつた。どうして最初は、互に相慕ひ用ひ合ふ誠意があつたのに、後には互にそむき合ひ、ねぢけ合つてしまつたのであらうか。それは實に利益を争ふところから、然らしめたものではあるまいか。

【補説】○「相然信以死」の「——スルニ——ヲ以テス」とよむ所に注意する。此の場合「以」は、動詞に轉じてゐる。「——ヲ以テ——ス」といふに同じ。○「何嚮者相慕用之誠、後相倍之戻也」の「何——也」は、疑問形である。「也」は、此の場合「ヤ」とよんで疑問歇尾詞である。「嚮者」は、サキニハとよみ、過去の時を表はす副詞である。「相慕用之誠」の「誠」にアリテを送る。「有相慕用之誠」の「有」が省略されてゐる形である。○「豈非以利哉」は、上の事の原因を説明してゐる。詠歎的反語で、此の場合の「豈」は、ナントとか誠ニとかに譯す。

構 文

【張耳・陳餘】

始居約時、相然信以死。及據國爭權、卒相滅亡。

何

嚮者 相慕用之誠、後 相倍之戻

也。豈非以利哉。

楊朱之弟楊布、衣素衣而出。天雨解素衣、衣緇衣而反。其狗不知而吠之。楊布怒、將擊之。楊朱曰、子毋擊也。子亦猶是。曩者使女狗白而往、黑而來。子豈能毋怪哉。(説林)

訓 點

楊朱之弟、楊布、衣素衣、而出。天雨、解素衣、衣緇衣、而反。其狗不知、而吠之。楊布怒、將擊之。楊朱曰、「子毋擊也。子亦猶是。曩者、使女狗白而往、黑而來、子豈能毋怪哉。」

【語釋】「衣」身につける。「素衣」「素」は白、白衣をいふ。「解」脱ぐこと。「緇衣」黒い着物。「緇」は黒色。「反」歸る。

【通解】楊朱の弟の楊布といふものが、白衣を着て外出すると、俄に雨が降つて來た。そこで白衣を脱いで、汚れてもよいやうに黒衣を着て歸つて來た。ところが、其の飼狗は之を知らないで吠えつた。そこで、

楊布は怒つて今にも之を撲らうとした。楊朱が之を止めて、「撲るな。お前とても矢張り此の犬のやうであるだらう。此の狗が、はじめ、白色のまま出てゆき、汚れて黒くなつて歸つて来たならば、お前も、どうして、よくわが狗でないと怪しまないことがあらうか、怪しむであらう。かやうに外見の異なるによつて、其の物を怪しむことは、勿論人たると狗たるとの別もないことである。」といった。

【補説】○「天雨」の「雨」に「フ」と送つて、動詞にすることを忘れてはならぬ。○「不知而吠之」の代名詞「之」は楊布を受ける。○「養者」は「サキニ」と訓み、過去を示す時相形の一。○「子豈能母怪哉」の「子」には、文意上抑揚形を示す「ダモ」又は「ストラモ」を、或は單に「モ」を送るがよい。「豈」は、反語の一形式である。

夫徳者。人之所嚴。而才者。人之所愛。愛者易親。嚴者易疎。是以察者多蔽於才。而遺於徳。自古昔以來。國之亂臣。家之敗子。才有餘。而徳不足。以至于顛覆者多矣。(司馬溫公「資治通鑑」)

訓點

夫、^{スル}徳者、^ハ人之所^ニ嚴^ル。而^ハ才者、^ハ人之所^ニ愛^ル。愛者^ハ易^ク親^シ。嚴者^ハ易^ク疎^シ。是以^テ察者^ハ多^ク蔽^ル於^テ才^ニ。而^ハ遺^ル於^テ徳^ニ。自^ラ古^ク昔^ク以來、國^ノ之^レ亂^ル臣^ト。家^ノ之^レ敗^ル子^ト。才^ハ有^リ餘^リ。而^ハ徳^ハ不^ク足^リ。以^テ至^リ於^テ顛^ル覆^ル者^ハ多^ク矣。

有^リ餘^リ、而^ハ徳^ハ不^ク足^リ、以^テ至^リ於^テ顛^ル覆^ル者^ハ多^ク矣。

【語釋】「嚴」畏れ憚ること。「才」才能のあること。「疎」疎遠にする。「遺」忘れる。「家之敗子」一家を覆滅させる子。「顛覆」くつがへること。

【通解】かの徳行のすぐれてゐる者は、他人から畏れ憚られるし、才能のある者は、他人から愛せられる。そして自分の愛する者は親しみ易いし、自分の畏れ憚る者は疎んじ遠ざけ易い。此の故に、人物を考へ察する人は、多くの場合、才能ある人の才能に蔽ひかくされて、徳といふものを忘れてしまふ。故に昔からこの方、國を亂した臣や、一家を滅した子が、才能は十分にあつても、徳が足らず、爲に一國を覆へし一家を敗滅に歸せしめるやうになつたものが多かつたのである。

【補説】○「夫徳者」の「夫」は「カノ」と訓んで、ノを送り、「徳」に「アル」を送ることに注意を要する。「者」は「ヒト」の意。○「才者」の「才」に「アル」を送る。「者」は「ヒト」の意。○「是以」は「ココヲモツテ」又は「コノユエニ」と訓み、理由を説述する形の一である。○「自古昔以來」の「古昔」は、單に「古」といつても、「昔」といつても意味に變りはない。時相形を表すものの一。○「而徳不足」の「而」は逆接。

構文

殆んど對偶法によつて居ることを發見出来る。

夫而 德者、人之所嚴、
才者、人之所愛、
嚴者易疎、
愛者易親、

是以、察者多、
蔽於才、
遺於德、

自古昔以來、
國之亂臣、
家之敗子、
而有餘、
而德不足、
以至于顛覆者多矣。

制馭天下。莫善於形勢。苟失形勢。不致分裂者鮮矣。昔在文武。因山海形便。以分七道。而王畿居中。桓武定鼎平安。四方環衛。蓋亦盛矣。然王政之衰。方隅稍有竊據。不可制者。雖或速就滅。而天下之勢。漸趨分裂。以馴致鎌倉之亂。自是以還。關東形勢。雄天下。而京畿莫之能勝。(日本外史)

訓點

制馭^{セイゴ}天下^{テンカ}。莫^{ナシ}善^ニ於^テ形勢^{ケイセイ}。苟^{カモ}失^ス形勢^{ケイセイ}。不^レ致^ス分裂^{ヘンリツ}者^ノ鮮^シ矣^{ナリ}。昔^{イハレ}在^リ文^ノ武^ノ。因^リ山^ノ海^ノ形^ノ便^ノ。以^テ分^シ七^ノ道^ヲ。而^{シテ}王^ノ畿^ノ居^リ中^ニ。桓^ノ武^ノ定^メ鼎^ヲ。平^ノ安^ノ。四^ノ方^ノ環^ニ衛^ス。蓋^シ亦^モ盛^ニ矣^{ナリ}。然^{レドモ}王^ノ政^ノ之^レ衰^ム。方^ノ隅^ノ稍^シ有^リ竊^ニ據^ス。不^レ可^ク制^ス者^ノ。雖^モ或^シ速^ニ就^テ滅^ス。而^{シテ}天^ノ下^ノ之^レ勢^ノ。漸^ニ趨^ク分^リ裂^ス。以^テ馴^ニ致^ス鎌^ノ倉^ノ之^レ亂^ヲ。自^レ是^レ以^テ還^リ。關^ノ東^ノ形^ノ勢^ノ。雄^ク天^ノ下^ヲ。而^{シテ}京^ノ畿^ノ莫^ク之^レ能^ク勝^ル。

【語釋】「制馭」自由に治める。「形勢」自然の山河國土などの状態をいふ。「昔在」「在」は、接尾語。「在昔」といふに同じ。「文武」人皇第四十二代文武天皇を申し奉る。「山海形便」山や海の様子のすぐれて便利であること。「王畿」王城の四方五百里以内の土地。「定鼎」都を定めること。昔夏の禹王が九州の金を聚めて九鼎を鑄、之を國都に安置し、夏亡びて後、殷周兩世は傳へて之を國寶とした。故に「定鼎」を以て都を定める意とする。「平安」平安京。即ち京都。「環衛」四方の國々が、都を圍繞して向つてゐること。「方隅」四方の隅々。「竊據」ぬすみたて籠ること。「馴致」次第々々に成りゆくこと。「亂」亂業。「以還」以後。其の後。

【通解】天下を自由にさめるには、天然の山河地形の向背起伏の状況を利用するに起したことはない。故に若し土地の状況を利用する上に適宜の措置を誤つたならば、國內が分裂するやうになる場合が多い。そ

のかみ文武天皇は、山海の形勢の便利に基づいて、天下を東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道に分けられたが畿内は此の中央に位して居た。又桓武天皇が都を平安の地に定め給ふや、四方諸國は京を圍繞して之に歸服し奉つたさまは、思ふに亦盛んなことであつたらう。然し王政が衰へるに隨つて、天下の隅々から、ぼつぼつ土地を竊んで之に據り、朝廷の威力を以てしては、制御することの出来ない者も出て來た。決はそれ等の者の中には、速かに討ち滅ぼされた者はあつたけれども、天下の形勢は次第に分裂に傾いて、或に鎌倉幕府の出來る様な形勢に次第になつていつた。これから以降、關東の形勢は、天下にすぐれた。そして一方京畿の形勢は之によく勝つことは出来なかつた。

【補説】○「莫善於形勢」の「莫」於「は、」ヨリ「ナルハナシ」と訓み、比較の最上級を示す形式である。○「昔在」は、二字でムカシと訓む。○「蓋亦盛矣」は、過去時の推量形で、「蓋シマタ盛ンナリシナラン」と訓むことに注意が要る。○「雖或速就討滅而天下之勢」の「或」を「有」と同様に觀て、「雖或速就討滅」と訓むのも一方法である。「雖」は既定を表し、「而」は連接を示す。

構文

制馭天下、莫善於形勢。

苟失形勢、不致分裂者鮮矣。

昔在 文武、因山海形便、以分七道、王畿居中。
桓武、定鼎平安、四方環衛。 蓋亦盛矣。

然王政之衰、方隅稍有竊據不可制者、雖或速就討滅、而天下之勢、

漸趨分裂、
以 馴致鎌倉之禍。

自是以還、
關東形勢、雄天下。

而
京畿莫之能勝。

方・適・祇・祇

今・今也・方今・當今・如今・今時・今者

いま。
恰度いま。
いままさに。
たまたま。

此等は皆現在時を表す副詞である。

「方」・「適」・「祇」・「祇」は「マサニ」と訓み、「イマ」「テウド今」の意である。事が今起つて居る最中をいふ。「方」は、下から返讀して、アタリと訓む場合もある。「祇」と「祇」は、「祇」と「祇」に誤り易いから注意が要る。「祇」は「ツツシム」と訓み、「祇」は「タダニ」と訓む。

「今」は、「イマ」と訓む。
 「今也」は、「也」をヤと訓み、「イマヤ」と訓む。
 「方今」は、「ハウコン」と訓む。又、「方今」と返點を施して、「今ニアタリ」と訓んでもよい。
 「當今」は、「タウコン」と訓む。又、「當今」と返つて、「今ニ當リ」と訓んでもよい。
 「如今」は、「ジョコン」と訓み、「今ノ如キハ」と返讀はしない。「只今」の意である。
 「今時」は、「コンジ」と訓み、「今ノ時」とは訓まない。
 「今者」は、二字で「イマ」又は「ケフ」と訓み、「今」の意である。

下莊子欲刺虎。館豎子止之曰。兩虎方且食牛。食甘必爭。爭則必鬪。鬪則大者傷。小者死。從傷而刺之。一舉必有雙虎之名。下莊子以爲然。立須之。有頃。兩虎果鬪。大者傷。小者死。莊子從傷者。兩刺之。果有雙虎之功。(司馬遷・史記「張儀列傳」)

訓點 下莊子欲刺虎。館豎子止之。曰。兩虎方且食牛。食甘必爭。爭則必鬪。鬪則大者傷。小者死。從傷而刺之。一舉必有雙虎之名。下莊

子以爲然。立須之。有頃。兩虎果鬪。大者傷。小者死。莊子從傷者。而刺之。果有雙虎之功。

【語釋】「下莊子」傳未詳。【館豎子】旅舎の僮僕。【一舉】一動き。【雙虎之名】二匹の虎を一度に刺し殺したといふ名譽。【須】待つこと。【雙虎之功】二匹の虎を一度に刺し殺したといふ功。

【通解】下莊子といふ人が虎を刺し殺さうとした。すると其の旅舎の僮僕が之を止めて、「今二匹の虎が、恰度牛を食はうとしてゐる。食つて見てうまいと、之を獨占しようとして、必ず爭奪を始めるであらう。爭奪を始めると必ず鬪んであらう。鬪つたならば、大きな虎が怪我をし、小さな虎は死ぬであらう。其の怪我した所へつけ込んで之を刺し殺したならば、一舉にして必ず二匹の虎を刺し殺したといふ評判を得られるであらう。」といつた。下莊子は、如何にも尤もだと考へた。そこで立つて之を見てゐた。暫くして兩虎が果して鬪つて、大きな虎は傷つき、小さな虎は死んだ。下莊子は其の怪我をしたのにつけ込んで之を刺し、旅舎の僮僕がいつたやうに、一舉にして二匹の虎を刺すの功を得たのであつた。

【補説】○「方」は、マサニとよみ、「今マサニ」「今恰度」の意である。○「且」は、「マサニ」と訓詞によみ、「ス」と再讀する。「將」と同義で「――シヨウトシテキル」の現在の意を表はす。○「以爲然」の「以テ――ト爲ス」は、「以爲」に同じ。○「須」は、マツとよむ。スベカラクとよむ場合は、全く異なることに注意を要する。○「有頃」は、シバラクアリテとよむ。「頃刻」の意である。○「果有雙虎之功」の「果」は、「豫期シタ通り」「案ノ定」の意に解くとよい。「有」は、文意上過去の時相形に訓み、キを送らねばな

らぬ。

構文

承選法のところと對偶法のところがある。

下莊子欲刺虎。

館豎子止之曰。

兩虎方且食牛。

食甘必爭。

爭則必鬪。

鬪則大者傷、小者死。

而從傷。

一舉必有雙虎之名。

下莊子以為然、立須之。

有頃、兩虎果鬪。

大者傷、小者死。

莊子

從傷者、而刺之。

果有雙虎之功。

今也制民之產。仰不足以事父母。俯不足以畜妻子。樂歲終身苦。凶年不免於死亡。此惟救死而恐不贖。奚暇治禮義哉。王欲行之。則盍反其本矣。(孟子・梁惠王上)

訓點

今也制民之產、仰不_レ足以事_二父母、俯不_レ足以畜_二妻子、樂歲終

身苦、凶年不_レ免_二於死亡、此惟救_レ死、而恐_レ不_レ贖、奚暇治_二禮義哉、王、

欲_レ行_レ之、則盍_レ反_二其本_一矣。

【語釋】【制】制定。適度に定める。【産】生業。【仰】上を仰いで。【俯】下を見ては。【畜】養ふ。

【贖】足る。

【通解】現今の諸侯が、民の生業を制定するのを見ると、其の生活を安定させるどころか、上を仰いで父母を奉養するに足らないし、下を見ては妻子を養ふに足らぬ有様である。そして、豊年であつても永く苦しみ、不作凶年には死亡から免れぬといふ悲惨さである。此のやうな事では、たゞ自分の死を救はうとしても、それさへ救ひ得るかどうか、不安である。それにどうして禮儀などを修め行ふ暇があらう。故に王がもし仁政を行はうと思はれるならば、どうして其の根本に立ちもどつて、民に一定の生業を興へるよう

にせられないのであるか。

【補説】○「救死」は「贖」の目的語である。○「查反其本矣。」は詰問の意である。「查」は音「カフ」で「何不」の合字で、「何ゾ——ザル」と訓む。○「畜妻子」の「畜」は、ヤシナフの意の時は、音「キク」。○「凶年不免於死亡」の「亡」にヨリを送る。「於」は起點を示す前置助詞。○「此惟救死、而恐不贖」は、「此レ惟ダ死ヲ救フスラ、而モ贖ラザランコトヲ恐ルルノミ」と訓むことに注意を要する。即ち「惟——而——」の形が、限定・抑揚・背反・逆接を含むものであることに着眼せねばならぬ。○「突暇治禮義哉」の「突——哉」は、反語の一形式。「暇」にはアランを送る。

泰西之説。已有漸盛之機。其所謂窮理。足以驚人。昔者。程子以佛氏之近理爲害。而今洋説之近理。甚於佛氏。且其所出。奇拔淫巧。導人奢侈。使人不覺駭駭然。入於其中。學者當亦以淫聲美色待之。

(言志錄)

訓 點

泰西之説、已有漸盛之機。其所謂窮理、足以驚人。昔者、程子、以佛氏之近理爲害。而今洋説之近理、甚於佛氏、且其所出、奇拔淫

巧、導人奢侈、使人不覺駭駭然、入於其中、學者當亦以淫聲美色待之。

【音釋】【泰西】西洋をいふ。【窮理】物の理を窮め明かにすることで、理化學をいふ。【佛氏】釋迦をいふ。即ち佛教。【奇拔淫巧】あやしくみだらな手わざ。【駭駭然】馬の速く走るやうに進むさま。【淫聲】みだらな音楽。

【通解】西洋の説は、今までにだん／＼盛んになる機運が見えて居る。西洋の理化學は、實際これを以て人を驚かすに足るものがある。その昔、宋の程子は、釋迦の遺教である佛教が、道徳的でなくて、窮理に近いといふので害ありした。だのに、今時の西洋の説の非道徳的であることは、釋迦のそれよりも一層甚だしいものがある。その上、其の所説にあるあやしくみだらな手わざは、實に巧妙で人々を奢侈に導き入れ、どん／＼と覺えず其の中に引き入れてしまふものである。學に志す人達は、此の西洋の窮理を以て、人を誘惑するみだらな音楽や、美しい女色のやうに思つて、警戒すべきである。

【補説】○「而今洋説之近理」の「而」はシカルニと訓んでゆく。○「甚於佛氏」の「於」は比較を示す助詞であるから、「氏」にヨリモを送る。○「學者」は「學アヒト」の意であるから、「學」にプを送るべきである。

且	將
□	□
□	□

今にもう——しようとする。
——しようと思ふ。

「將」・「且」は、共に未來時を表す語で、「マサニ——ス」と再讀する。そして「將」は、事のまだ起らぬ先にいふ語で、時の未來を表し、過去の「既」と相對する。「今ニモウ——シヨウトスル」「コレカラ——シヨウトスル」の意である。しかし、轉じて單に「——デアラウ」といふ推量の意に用ひられることもある。「且」は、「將」に同じである。

夫當今生民之患。果安在哉。在於知安。而不知危。能逸。而不能勞。此其患。不見於今。而將見於他日。今不爲之計。其後將有所不可救者。

(唐宋八家文・蘇軾)

訓點 夫、當今、生民之患、果安在哉。在於知安、而不知危、能逸、而不能勞。此其患、不見於今、而將見於他日。今不爲之計、其後將有所不可救者。

可救者。

【語釋】「當今」只今。現今。「生民」人民。「患」心配すべき事。「安在哉」何れの點にあるか。【逸】

逸樂の意。「勞」骨折ること。苦勞すること。【見】現はれる。【計】對策。

【通解】かの現下の人民の心配すべき事は、結局何れの點にあるか。それは平安無事であることを知つてゐるが、しかし危険なことを知らず、逸樂に耽つてゐるが、しかし若勞し働くことをせぬ點にある。これその患害は、たとひ現在に現はれないにしても、しかし將來に現はれるであらう。故に今、直ちに之が對策を講じなかつたならば、此の後に於て、救ふことの出来ないやうな事になるだらうと思はれる。

【補説】○「果安在哉」の「安——哉」は、疑問代名詞「安」が、歇尾詞「哉」を連用した疑問形式の一。

○「在於知安——」の「在」の管到に注意すること。○「而不知危」「而不能勞」「而將見於他日」の「而」は共に逆接の場合のものである。「將」は未來を示す時相の形。○「今不爲之計」の「今」にニシテを送ることに注意が肝要である。

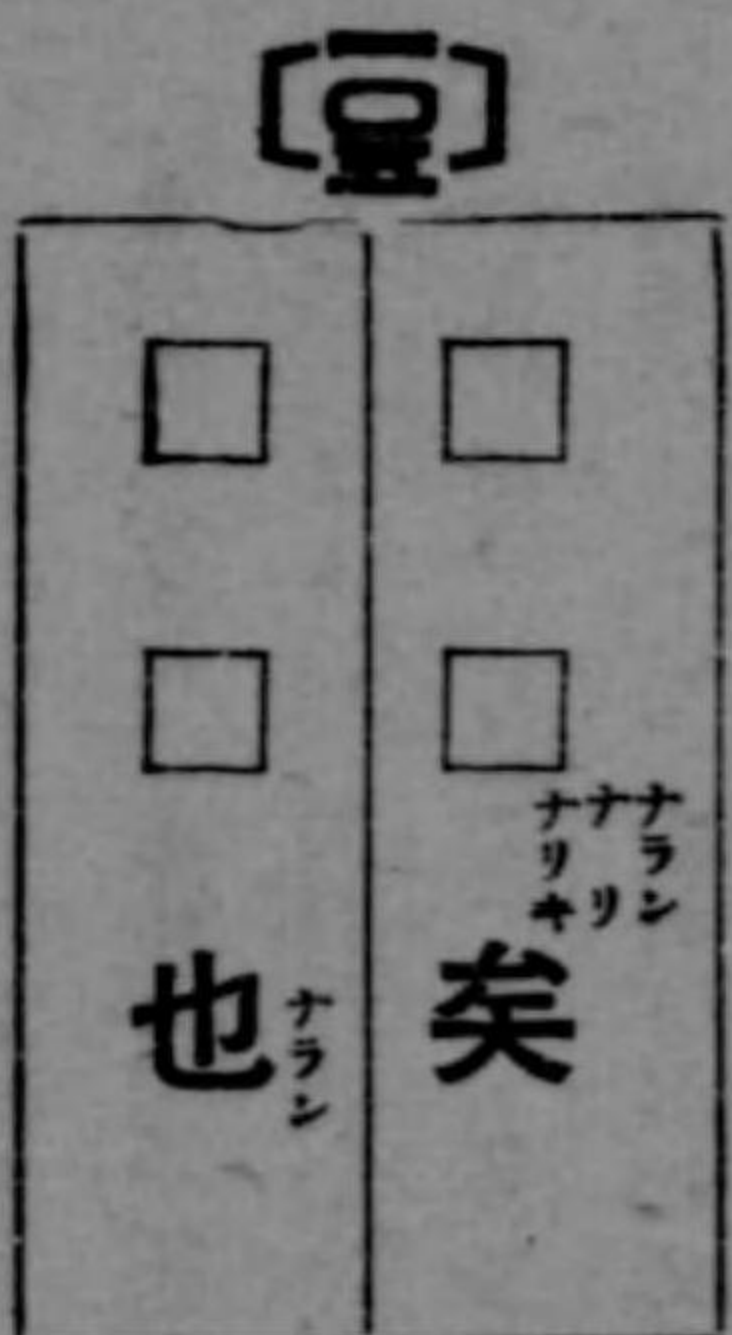
構文

大體は、對偶法によつてゐる。

夫當今生民之患、果安在哉。

在於知安、而不知危、能逸、而不能勞。

重号の「何ゾ」は、反語形式の一である。「而」はシカモと訓んで逆接。○「不也」を「シカラザルナリ」と訓み、「否者」を「シカラザレバ」と訓むことに特に注意が肝要である。



—であつた。(過去)
—である。(現在)
—であらう。(未来)

【一矣】は、「ナリキ(過去)・ナリ(現在)・ナラン(未来)」と訓み、過去・現在・未来の何れの時をも表す敬尾詞である。其の時により、何れに解すべきかを吟味しなければならない。
【一也】は、「ナラン」と訓み、未来の時を表す敬尾詞である。而して此の「也」は、文中に在つて、「ヤ」と訓む場合があり、又、文末に在つて「ヤ」と訓んで疑問の意を表し、「ナリ」と訓んで、理由を説述する場合のものもあるから、注意が肝要である。

鄭公魏徵卒。上曰。以銅爲鏡。可正衣冠。以古爲鏡。可見興替。以人爲鏡。可知得失。徵沒。朕亡一鏡矣。(十八史略)

訓點 鄭公魏徵卒。上曰。以銅爲鏡。可正衣冠。以古爲鏡。可見興替。以人爲鏡。可知得失。徵沒。朕亡一鏡矣。

【語釋】「魏徵」唐の太宗の臣。「上」唐の太宗のこと。「興替」「興廢」に同じ。

【通解】鄭公の魏徵が死んだ。そこで天子の太宗がいふには、「銅を鏡として物を照したなら、衣冠を正して禮容を整へることが出来る。古を以て鏡としたなら、國家の興り或は廢れた歴史を見ることが出来る。又人を以て鏡としたなら、わが行の是非を知ることが出来る。今徵が死に、朕は一つの人の鏡を亡つた」と。

【補説】○「上曰」の「上」は、「シャウ」と訓む。「ジャウ」「カミ」「ウ」などと訓んではいけない。○「朕亡一鏡矣」の「一矣」は、過去の時相を表す形式である。

構文 明白な重疊法(層累法)によつてゐることに注意が要る。

鄭公魏徵卒。

以銅爲鏡、可正衣冠。
上曰、以古爲鏡、可見興替。
以人爲鏡、可知得失。
徵沒、朕亡一鏡矣。

趙括。自少時學兵法。言兵事。以天下莫能當。嘗與其父奢言兵事。奢不能難。然不謂善。括母問奢其故。奢曰。兵死地也。而括易言之。使趙不將括。即已。若必將之。破趙軍者必括也。(司馬遷・史記・廉頗・藺相如列傳)

訓點

趙括、自、少、時、學、兵、法、言、兵、事、以、天、下、莫、能、當、嘗、與、其、父、奢、言、兵、事、奢、不、能、難、然、不、謂、善、括、母、問、奢、其、故、奢、曰、兵、死、地、也、而、括、易、言、之、使、趙、不、將、括、即、已、若、必、將、之、破、趙、軍、者、必、括、也。

【語釋】趙王に仕へて廉頗に代つて將たりし人。【兵事】軍事のこと。【難】非難する。【故】理由。【死地】生死を決する危険な場所の意。【易言】何でもないかのやうにいふこと。

【通解】趙括は若かつた頃から兵法を學び軍事上の事柄を論じた。そして「天下廣しと雖も、兵事については自分に敵する者はない。」と思つてゐた。或時その父の趙奢と兵事について論じ合つたが、奢も兵學上の議論に就いては、何とも非難することは出来なかつた。けれども奢は、括のいふ所を善いとはいはなかつた。そこで括の母は、非難はしないが、さうかといつて賛成もしない其の譯を尋ねた。すると奢は、凡そ戰なるものは、生死を決する大事な場所である。然るに、括は如何にも容易なことであるかのやうに之を論

じてゐる。若し趙の國が括を大將としなければ、それまでのこと、若し是非に括のやうな者を大將にするなら、趙軍を破滅させるものは、きつと括であらう。」といつた。

【補説】○「以天下莫能當」の「以」は、「オモヘラク」と訓むことに注意。「當」には、モノを送ることも重要なことである。○「嘗」は、時の過去を示すものである。従つて、其の下句の「言兵事」の「言」を「言ヒシニ」と訓み、「不能」を「能ハザリキ」と訓んだ方がよいのだが、漢文の訓點では、過去時を示す文意のところを一々過去形の送假名を用ひないで、現在時相にしておいてもよいといふことに許容されて居る。しかし解釋の場合には、必ず文意に隨つて、過去形の語法を用ひなければならぬ。○「即已」の「已」に、ンを送つて文意上未來時を表す。○「必括也」の「也」は未來時を表示する形である。

㊦ 文意上より、時相形を表す場合

文章の意義上から観て、過去・現在・未來に、各々適當に訓む場合である。又、特に讀癖のあるものには就いては、其の慣例に従ふべきである。

伊藤仁齋。爲人寬厚。不疾言遽色。不設城府。不修邊幅。而接人。無少長以誠。及其大義所關。雖誘之以萬鐘。而不可奪也。以是德聲日隆。

(甘雨亭叢書)

訓點 伊藤仁齋、爲人寬厚、不疾言遽色、不設城府、不修邊幅、而接人、無少長、以誠、及其大義、所關雖誘之、以萬鎰、而不可奪也。以是、德聲日隆。

【語釋】「寬厚」寛大温厚。「疾言遽色」はや口に物をいひ、あわてた顔色をすること。「不設城府」城府は城郭。人に接するにへだてなく、心をひらいてうけ容れること。「不修邊幅」うはべをかざらないこと。「萬鎰」多くの俸祿。一鎰は「六斛四斗」。

【通解】伊藤仁齋は、生れつき性質が寛大温厚で、どんな場合でも、はや口に物を云つたり、あわてた顔色をしたりせずに落着いてをり、人にへだてをおかず、又上邊をかざるやうなことをしない。そして人に接する場合、相手が年少者であらうが、年長者であらうが、分けへだてなく誠の心を以て對した。事が一度大義に關することになると、假令どれ程多くの祿をもつて彼を誘つても、大義を守つて節を曲げるやうなことはなかつた。この様な譯で、仁齋の徳望は日に／＼高くなつて行つた。

【補説】○「爲人」は「ヒトトナリ」と訓む。普通は、「爲人」と返點を施すが、返點を施さずに、熟語のやうにして取扱ふ人もある。○「接人」の「接」にスルヤを送ることに注意。○「雖誘之以萬鎰、而不可奪」

也」の「雖——而——」の形を見逃さないやうにすること。○「以是」は「コレヲ以テ」と訓む。「ココヲ以テ」と訓む「是以」と混同してはならない。○「德聲日隆」の「隆」にキを送つて、文意上過去の時を表すやうにすべきである。

構文 否定形の三句が、重疊法によつてゐる。

伊藤仁齋、爲人寬厚、
 不疾言遽色、
 不設城府、
 不修邊幅。
 而接人、無少長以誠。

第十三章 感動形

感動形は、或る事柄に心が感動して、哀傷、歎美、驚駭等の意を表す文の形式で、次の五種の場合がある。

- (一) 感動詞「嗚呼・烏乎・嗟・于嗟・嗟乎・嗟夫・吁・噫・嘻・噫嘻・唉・惡・於・於乎・於戲・猗歟」

等を用ひる場合。
 歇尾詞「哉・夫・矣・乎・歟・也夫・矣夫・矣哉」等を用ひる場合。
 感動詞と歇尾詞とを併用した形「嗚呼——夫」「噫嘻——哉」「於戲——矣」等を用ひる場合。
 特に詠歎文となる形「不亦——乎」「不其——乎」「豈不——哉」「何其——也」等を用ひる場合。
 「其」を用ひる形で「其——與」「其——邪」等を用ひる場合。

〔五〕

嗚呼・烏乎・嗟・于嗟・嗟乎・嗟夫・吁・嘻・
 噫・噫嘻・唉・惡・於・於乎・於戲・猗歟

ああ。
 これはく。

此等の感動詞は、皆「アア」と訓み、吉凶・善惡・褒貶等に通じて、詠歎感動の意を表す。要するに、譽めたり歎いたりする時に發する自然の聲で、句頭に在つて詠歎の意が下にかかる場合と、句末に在つて上の事について歎ずる場合とがある。
 「嗚呼」は、主として哀傷の意に。
 「於戲」は歎美の意に用ひる。
 「嗟」「嗟乎」「嗟夫」は、「コレハハ」の意に解す。

「吁」は、驚く意。
 「噫」「噫嘻」は、哀傷痛恨の意、又は不平の聲を表す。
 「唉」は、恨み歎く時に發する聲である。

子貢問曰。何如斯可謂之士矣。子曰。行己有恥。使於四方不辱君命。可謂士矣。曰。敢問其次。曰。宗族稱孝焉。鄉黨稱弟焉。曰。敢問其次。曰。言必信。行必果。硜硜然小人哉。抑亦可以爲次矣。曰。今之從政者。何如。子曰。噫。斗筭之人。何足算也。(論語・子路篇)

訓點

子貢問曰。「何如斯可謂之士矣。」子曰。「行己有恥。使於四方。不辱君命。可謂士矣。」曰。「敢問其次。」曰。「宗族稱孝焉。鄉黨稱弟焉。」曰。「敢問其次。」曰。「言必信。行必果。硜硜然小人哉。抑亦可以爲次矣。」曰。「今之從政者。何如。」子曰。「噫。斗筭之人。何足算也。」

【語釋】「士」學問のある善良の人の稱。「四方」近隣の國々。「果」是非とも決行すること。【硜々然】

小石の堅く、「こつこつ」した貌。「經」をケイと訓まぬやうに注意すること。「小人」セウジン 識見度量の淺狭なる者を言ふ。「噫」不平の時に發する聲。「斗筭之人」トウソウノヒト「斗」は十升、「筭」は竹器、一斗二升を容れるもの。但に限られた容器で、人の見識・器量の狭いものに譬へたのである。

【通解】子貢が孔子に問ふて曰ふに、「どの様な人物を士と謂ふのでありますか。」と。孔子が曰はれるには、「自分の身の行が正しく道に叶つてゐて、道に外れた事は深く恥ぢて行はず、君主の使者としてあちらこちらの諸國に出使する時、應對其の宜しきを得、決して君命を辱めるやうな事がなくて、はじめて士と謂ふべきである。」と、子貢は又問ふて曰ふに、「是に次ぐ士は、如何様なのをいひますか。」と。孔子答へて、「一家一門の者はその人の孝を稱讚し、村里の人々はその者の、よく兄を始め長上に事へることを稱讚する。さういふ人物がその次である。」と。子貢は又問ふて曰ふに、「士の第三位は、如何様なものをいひますか。」と、孔子が答へられるには、「言は何處までも信で、行は何處までも是非仕遂げる。即ちこれは信と果の貴ぶべきことだけを知つて、時に隨つて理に順ふことを知らないものであつて、確然として小石の如く堅く、ごつごつしてゐる様で、見識度量の狭少な一箇の小人に過ぎない。併し自ら守る所はあるのだからその次に位する人物とされよう。」と。子貢は又問を重ねて曰ふに、「現今政事に従事してゐる大夫などは、矢張り士と謂つてよいでせうか。」と。孔子は歎息して曰はれるに、「あゝ、此等の人は、僅に一斗或は一斗二升を容れるだけの器物の様なもので、算へ立てて、とかく評論をする程の價値はない。」と。
【補説】○「何如斯可謂之士矣」は、「イカナレバスナハチ之ヲ士ト謂フベケン」と訓む。「斯」を「則」と

同様にスナハチと訓み、「可」にンを送つて、推量の形に訓む點に注意を要する。○「噫、斗筭之人」の「噫」は、感動形の一。○「何足算也」の「也」はヤと訓む。「何」也は反語の形であることに留意すべきである。

構文

重疊法と對偶法とによつてゐる、一見明白な構文である。

子貢問曰、何如則可謂之士矣。子曰、行己有恥、可使於四方、不辱君命、可謂士矣。

曰、敢問其次。曰、宗族稱孝焉、鄉黨稱弟焉。

曰、敢問其次。曰、言必信、行必果、雖見小人哉。抑亦可以爲次矣。

曰、今之從政者、何如。子曰、噫、斗筭之人、何足算也。

蒼蒼烝民。誰無父母。提携捧負。畏其不壽。誰無兄弟。如足如手。誰無夫婦。加賓如友。生也何恩。殺之何咎。其存其沒。家莫聞知。人或可言。

將信將疑。悄悄心目。寤寐見之。布奠傾觴。哭泣望天涯。天地爲愁。草木
 凄悲。弔祭不至。精魂何依。必有凶年。人其流離。嗚呼。噫嘻。時耶命耶。
 從古如斯。爲之奈何。守在四夷。(續文章軌範・李華「弔古戰場文」)

訓點

蒼蒼カウカウ烝シヤウ烝シヤウ民ミン。誰タラシ無ク父母フボウ。提チ携キョウ捧ボウ負フ。長チヤウ其キ不ク壽シヤウ。誰タラシ無ク兄弟ケイテイ。如ニ足ク如ク手シヤウ。誰タラシ無ク夫婦フフツ。加カ賓ヒン如ニ友トシ。生シヤウ也ヤ何ニ恩オン殺ス之ヲ何ニ咎トシ。其キ存シ其キ沒ス家カ莫ク聞ク知ル。人ニ或ハ有レ言フ將シ信シ將シ疑フ。悄悄シヤウシヤウ心目シヤウシヤウ寤ニ寐ニ見ル之ヲ。布フ奠テン傾キヤウ觴カウ。哭ク泣キ望シ天テン涯ヤ。天テン地チ爲シ愁シ。草ソウ木モク凄シ悲ヒ。弔ニョウ祭サイ不ク至ス。精シヤウ魂コン何ニ依ル。必キヤク有レ凶キヤウ年ネン。人ニ其キ流リウ離リ。嗚ウ呼フ。噫イ嘻フ。時シ耶ヤ命メイ耶ヤ。從シヤウ古コ如ニ斯シ。爲シ之ヲ奈ニ何トシ。守シヤウ在シ四シ夷イ。

【語釋】「蒼蒼」草木の生ずること。轉じて萬民を「蒼生」といふ。【烝民】萬民をいふ。【提携捧負】「提携」は、互に手を引くこと。「捧負」は、抱いたり負うたりすること。父母子弟の助け合うて行く形容。
 【賓】客人。【存】存命する。【沒】死没する。【家】家族をいふ。【聞知】憂ふるさま。【聽聞】ねてもさめても。【布奠】亡き人に供物を具へて祀ること。「奠」は、祭り。【傾觴】神酒をさし上げる。「觴」は、さかづきをいふ。【流離】離ればなれに散ること。【四夷】中國の四方に介在する夷狄。

【通解】蒼々として群り生ずる億兆の人民には、誰が父母のない者があらうか、皆父母ありて手を引き背に負うて、其の命長からんことを祈らぬ者はない。誰が兄弟のない者があらうか、皆兄弟があつて、恰も手のやうに足のやうに、互に力になつてゐる。又誰が夫婦のないものがあらうか、皆夫婦があつて、互に恰も賓客のやうに、朋友のやうに、仲もいと睦まじく暮してゐる。然るに戰の爲に、父母は子を失ひ、兄弟相別れ、夫婦相喪ふの悲惨事を見なければならぬ。さても彼等が生れたのは、誰の恩か、徒らに殺されるのは何の罪あつてのことか。一度征途に就くや、其の生死の程も更に聞知するよすがもなく、人が或は死んだといひ、生きてゐるといへば、或は之を信じ或は之を疑ひ、安き心地もないのである。かくて家族のものは、日夜憂ひ沈んで、ねてもさめても目先に髣髴たる有様である。そこで供物を捧げ神酒をそぐいで、聲を放つて泣き、遙か天の彼方を望めば、天地も爲にうれひ、無心の草木も悲しげである。さればとて鄭重な弔祭も出来ないから死者の靈魂のおちつき所も定まらぬ。故に亡魂崇つて必ず戰の後には凶作があり、人民は流離の憂き目を見るであらう。あゝ、哀傷の極であるわい。罪なき民の斯くも悲惨事に當面するのは、時の廻り合せか、又天命のやむべからざるものか。古來戰亂の悲惨なことは皆かやうである。然らば、これが對策は如何すべきであるか。即ち仁政を行ひ、徳教を施し、夷狄をして國境を守らせらるやうにするより他に手段はないのである。

【補説】○「誰無父母」「誰無兄弟」「誰無夫婦」の「誰」は、反語形式である。○「如足如手」「如賓如友」は、直喩である。○「何恩」「何咎」「何依」「爲之奈何」は共に疑問の意である。○「嗚呼、噫嘻」は

感動詞であり、「時耶命耶」は、詠歎的疑問である。○「從古」の「從」はヨリとよみ、カラと譯し、起點を表はす。

構文

四字句を以て成り、多くの對句があることに注意を要する。「爲之奈何。守在四夷」が主意であることに着眼しなければならぬ。

誰無父母。提携捧負。畏其不壽。

蒼蒼烝民

誰無兄弟。

如足

誰無夫婦。

如手。

如賓

如友。

生也何恩。殺之何咎。

其存

家莫聞知。其沒、人或有言、

將信

悄悄心目。將疑。寤寐見之。

布糞

傾觴

哭望天涯。

天地爲愁。草木凄悲。

帛祭不至。精魂何依。

必有凶年。人共流離。

嗚呼、噫嘻、

時耶、命耶、

從古如斯。

爲之奈何。守在四夷。

(主意)

嗟夫。予嘗求古仁人之心。或異二者之爲何哉。不以物喜。不以己悲。居廟堂之高。則憂其民。處江湖之遠。則憂其君。是進亦憂。退亦憂。然則何時而樂耶。其必曰先天下之憂而憂。後天下之樂而樂歟。噫。微斯人。吾誰與歸。(文章軌範及古文眞寶後集・范仲淹「岳陽樓記」)

訓點

嗟夫。予嘗求古仁人之心。或異二者之爲何哉。不以物喜。不以己悲。居廟堂之高。則憂其民。處江湖之遠。則憂其君。是進亦憂。退亦憂。然則何時而樂耶。其必曰先天下之憂而憂。後天下之樂而樂歟。噫。微斯人。吾誰與歸。

【語釋】「嗟夫」「嗟乎」に同じ。歎辭。「予」文の作者の范仲淹。「二者」喜ぶ者と悲しむ者。即ち「感

極而悲者」と「其喜洋洋者」とをさす。「物」自分以外のもの。即ち景色や地位などをいふ。「己」自分の境遇をいふ。自分に苦しいことや心配なところのあるをいふ。「廟堂」宗廟と明堂をいふ。「明堂」は、宮中の正殿であつて政事を議する處。昔、政事を議し事を行ふ前に宗廟で祖先の靈に告げ、後明堂で群臣に諮つたものである。轉じて朝廷の意となる。「江湖」世間。もと三江五湖の略。又都から遠く離れた田舎の意にもいふ。「遠」僻遠の意。「斯人」古仁人をいふ。范文正公は古の仁人にことよせて、己が抱負を述べたのである。「誰與歸」禮記に見ゆる語。誰に従はんの意。「歸」は、從ひおもむく意。「適從」といふが如し。

【通解】あゝ、自分が嘗て古の仁人の心を探り求めるのに、此の物を見て悲しむものと、物を見て喜ぶものと、其の行爲に違ふ點があるのは、如何なるわけであらうか。それは外ではない。古の仁人の普通世人のやうに、外に喜ぶべきことがあつても強ひて喜ばず、心の中に悲しむべきことがあつても強ひて悲しむことをしない。若し朝に仕へて高位高官となると、其の民の上を心配し、官を去つて民間の僻地に居ては、其の君の上を御心配し上げる。これを以ていふと、仁人君子は進んでも憂へ、退いても憂ふといふものである。然らばどんな時に樂しむであらうか。そこでそれ等の仁人君子は、きつと、「私共は天下の憂ひに先だつて憂へ、天下の樂しみに後れて樂しむものである。」といふであらう。さても先憂後樂こそは古の仁人の精神である。あゝ、若し此の精神を體してゐる仁人がなかつたならば、私は誰に適從しようか、依りつく所がないのである。

【説補】○「何哉」は、ナンゾヤとよみ、疑問形式である。○「處江湖之遠」の「處」は、ヲルとよむ。○「何時而樂耶」は、疑問の意を表はしてゐる。「耶」は、カとよんで、疑問敬尾詞である。○「其必曰先天下之憂而憂、後天下之樂而樂」の「其」歟は、「ソレ」カとよみ、詠歎的疑問の意を表はし、半ば肯定の意を含めて表はしてゐる。○「微斯人」の「微」は、ナカリセバとよみ、假定の打消の意を表はしてゐる。「ナカツタナラバ」の意である。○「誰與歸」の「與」は、こゝではカとよんでトモニとはよまない。疑問の詞である。

構文

構成は對偶法式に據つてゐる。

嗟夫、予嘗求古仁人之心、或異二者之爲何哉。

不以物喜、居廟堂之高、則愛其民、進亦憂、
不以己悲、處江湖之遠、則憂其君、退亦憂。

然則何時而樂耶。其必曰
先天下之憂而憂、歟。噫、微斯人、吾誰與歸。
後天下之樂而樂。

嗚呼。滅六國者。六國也。非秦也。族秦者。秦也。非天下也。嗟夫。使六國

各愛其人。則足以拒秦。秦復愛六國之人。則遞三世。可至萬世而爲一君。誰得而族滅也。秦人不暇自哀。而後人哀之。後人之哀。而不鑑之。亦使後人復哀後人也。(文章軌範及古文眞寶後集・杜牧「阿房宮賦」)

訓點

嗚呼、滅六國者、六國也、非秦也。族秦者、秦也、非天下也。嗟夫、使六國各愛其人、則足以拒秦。秦復愛六國之人、則遞三世、可至萬世而爲君。誰得而族滅也。秦人不暇自哀、而後人哀之、後人哀之、而不鑑之、亦使後人復哀後人也。

【語釋】「六國」 周末の諸侯は七國、其の中から秦を除いて韓・魏・齊・楚・趙・燕をいふ。【族】 族滅する。一族のこらず滅ぼすこと。【嗟夫】 歎辭。【其人】 其の人民。【愛】 愛撫・愛養する。【拒】 防ぐ。【遞】 次から次へと順次送り傳へること。遞傳。【不暇自哀】 自分が亡んだので、自らの運命を悲しむ暇がなかつたこと。【鑑】 手本として自ら戒愼すること。

【通解】 あい、六國を滅ぼしたものは六國自らであつて、秦が滅ぼしたのではない。又、秦を族滅させたのは秦自らの所爲に由るのであつて、天下が族滅させたのではない。あい、六國の諸侯をして各自其の人民

を愛撫させたならば、國家人民の歸服を得て、秦の兵を拒ぎとめるに十分であり、秦も亦六國滅亡の後六國の人民を愛養したならば、三世から順次送り傳へて、萬世に至るまで天下に君臨することが出来たであらう。斯くある時は、誰が之を族滅することが出来ようか、族滅することが出来ない筈である。秦の人々は自分の亡びるのを自分で哀しんで、豫め戒める暇もなく驕つて亡んでしまひ、後世の人々が反つて之を哀しんでやるやうになつた。然し後世の人々も之を哀しんで、之を鑑として戒愼せずに驕つたりすると、又更に後世の人をして、秦を哀しんで鑑み戒愼しない後世の人々を哀しませるやうになるであらう。

【補説】 ○秦の衰滅するのは秦自ら衰滅する者なることを論じたもので、阿房宮賦の主意たることに注意を要する。○「嗚呼」「嗟夫」は、共に歎息の意を表はすもので、其の間差別がないことは之で分るであらう。○「使六國各愛其人」は、「使メバ」とよみ、使役の假定の意を表はす。故に「足ラン」と應じて推量とする。○「可至萬世而爲君」の「可」は、可能の意の場合である。「至」にマデを添へて送ることに注意を要する。○「誰得而族滅也」の「誰」也は、反語形式の一で、「而」は、順接である。當然附着すべき語句中に割り込んだ例である。○「後人」は、後世の人の意で、三つの中、始めと終りの後人は、秦を哀しむ後人であり、中の後人は、即ち後世の人の意であるから、其の判別に注意を要する。

構文

對偶法と承選法によつて居る。

嗚呼、〔滅六國者、六國也、非秦也。〕
族秦者、秦也、非天下也。〔嗟夫、

使六國各愛其人、則足以拒秦。秦復愛六國之人、則可至萬世而為君選三世、

誰得而族滅也。〕

秦人不暇自哀、而後人哀之、

後人哀之、而不鑑之、亦使後人復哀後人也。

224

濂溪周先生曰。仲由喜聞過。令名無窮焉。今人有過、不喜人規。如護疾而忌醫。寧滅其身。而無悟也。噫。(小學)

訓 點

濂溪周先生曰。「仲由喜聞過、令名無窮焉。今人有過、不喜人規。如護疾而忌醫。寧滅其身、而無悟也。噫。」

【釋義】「濂溪周先生」宋の大儒の周敦頤。姓は周、名は茂叔、濂溪先生と稱す。卒して道國公に追封せられた。【仲由】春秋の時の下の人。孔子の弟子。姓は仲、名は由、字は子路、【令名】立派な名聲。「令」は「善」。「規」諫めること。「護疾」病氣をかばひかくすこと。「護」は、掩蔽なり。【忌

【補說】「如護疾而忌醫」は直喩である。○「寧滅其身、而無悟也」の「寧」トモ而モ「ナシ」となる關係に注意を要する。「寧」は、「ドチラカトイフト」の意で、比較を表はしてゐる。即ち二者を比較して、後者よりは前者をとる意を表はしてゐる。然し斯様に前者をとつたり、後者をとつたりする意味に於て、或は之を選択形とするものもある。「滅ボストモ」のトモは、背反の助詞である。

【通解】周濂溪先生がいふには、「孔子の門人の子路は、己が過失に就いて人から忠告されると、過を改め身を修めることが出来るので喜んだ。元來遷善改過といふことは容易なことではないのに、子路はよくこれをなして、身の修養に努めたから、立派な名聲が後世までもかぎりなく傳はつたのである。然るに今時の人は、過があると、人が諫めたゞしてくれぬのを喜ばない。これは恰も病氣をおほひかくして、醫者の手當を嫌ふやうなものである。かゝる人は、どちらかといふと、其の身を滅ぼしても、其の愚かさを悟ることがないのである。あゝ情ないことだ。」と。

【補說】○「如護疾而忌醫」は直喩である。○「寧滅其身、而無悟也」の「寧」トモ而モ「ナシ」となる關係に注意を要する。「寧」は、「ドチラカトイフト」の意で、比較を表はしてゐる。即ち二者を比較して、後者よりは前者をとる意を表はしてゐる。然し斯様に前者をとつたり、後者をとつたりする意味に於て、或は之を選択形とするものもある。「滅ボストモ」のトモは、背反の助詞である。

構 文

濂溪周先生曰、〔仲由喜聞過、令名無窮焉。〕
今人有過、不喜人規。如、而〔護疾
寧滅其身、而無悟也。噫。〔忌醫。〕

〔京〕

哉・夫・矣・乎・歟・也夫・矣夫・矣哉

何れも「カ」「カナ」とよむ感動を表す歎尾詞である。

「乎」「歟」は、元來「サウシタモノカ」と疑ふ意で、詠歎の意に通じ用ひられる。

「哉」「夫」は、讚美・歎息の意があり、「乎」よりは重く、「與」「邪」に較べると婉曲の意がない。

「也夫」は、「也」と「夫」との重用であり、「矣夫」は、「矣」と「夫」との重用であつて、何れも「カナ」とよみ、意味は一字づつの場合よりは稍、重い。

同明相照。同類相求。雲從龍。風從虎。聖人作萬物覩。伯夷叔齊雖賢。得夫子而名益彰。顏淵雖篤學。附驥尾而行益顯。巖穴之士。趨舍有時。若此類。名堙滅而不稱。悲夫。閭巷之人。欲砥行立名者。非附青雲之士。惡能施于後世哉。(司馬遷・史記「伯夷列傳」)

訓點

同明相照。同類相求。雲從龍。風從虎。聖人作萬物覩。伯夷・叔

齊雖賢。得夫子而名益彰。顏淵雖篤學。附驥尾而行益顯。巖穴之士。趨舍有時。若此類。名堙滅而不稱。悲夫。閭巷之人。欲砥行立名者。非附青雲之士。惡能施于後世哉。

〔語釋〕「同明」 同じ明かなもの。「相求」 互に他を求めて集まりあふ。「作」 世に出ること。「覩」 仰ぎ

見上げること。「伯夷・叔齊」 周の武王が殷の紂王を討滅した時、二人の兄弟は恥ぢて首陽山に入り餓死

した。「夫子」 孔子を尊んでいふ。「彰」 世に知られる。「篤學」 學問に熱心であること。「附驥尾」

蒼蠅が駿馬の尾に附して千里に達するといふ古語から、後進が先進の誘掖を得て、其の徳を成し名を得る

ことにいふ。すぐれた人物にたよる意。「巖穴之士」 世を遁れて山中にかくれ住む人。「趨舍」 進んで仕

へると、退いて民間にかくれると。進退の意。「埋滅」 ほろび消える。「閭巷之人」 民間にある人。「閭

巷」は、「村里」の義。「青雲之士」 學徳の高い人。

〔通解〕 同じ明かなものは互に照し合ひ、同じ種類のものは、互に他を求め合つて集まるものである。たと

へば、雲は龍に従つて生じ、風は虎に従つて始めて起るものである。其のやうに聖人が此の世に出て、始

めて、萬物が之を見上げてつき従はうとするのである。それと同様に、伯夷・叔齊は賢かつたけれども、

孔夫子の推稱を得て、其の名が始めて、益々世に知られたのである。又顏淵は學問に熱心であつたけれど

も、孔夫子の如き大人物に附き隨つてゐた爲に、其の行が益々世人に知られたのである。世塵を避けて山

中に隠遁してゐるやうな人材には、進んで君に事へるにも、退いて世に出ないにも、時を以てするから、

世に出でずして終ることもある。此のやうな類のものは、其の名が埋もれ亡びて、世に稱せられない。まことに悲しいことではある。故に、官に仕へず、野にある人で、行き碓ぎ磨き、名聲をあげんと欲する者は、學徳共に一代に名ある人に就いて學ばなければ、どうして後世に其の名を博めることが、出来ようかそれは出来ないのである。

【補説】 ○「聖人作萬物觀」の「作」は、オ、コルとよむ。「觀」はミルとよみ、「仰ギ見上ケル」意である。

○「伯夷・叔齊雖賢」「顔淵雖篤學」の「雖」は、共に既定の意を表はす場合である。○「附驥尾」「青雲之士」「巖穴之士」は、換喩であることに注意する。○「名埋滅而不稱」の「稱」に、ラレを送つて、文意上から受身とする。○「悲夫」の「夫」は、カナとよんで、詠歎の歎尾詞である。○「惡能施于後世哉」の「惡」は、「イヅクンゾーヤ」と訓み、單なる反語形である。

構文

大體對偶法により、圈點の部分が主文である。

同明相照。雲從龍。聖人作。伯夷・叔齊雖賢。得夫子而名益彰。
同類相求。風從虎。萬物觀。顔淵雖篤學。附驥尾而行益顯。
巖穴之士。趨舍有時。若此類。名埋滅而不稱。悲夫。
閭巷之人。欲砥行。者。非附青雲之士。惡能施于後世哉。

子疾病。子路使門人爲臣。病間曰。久矣哉。由之行詐也。無臣而爲有臣。吾誰欺。欺天乎。且予與其死於臣之手也。無寧死於二三子之手乎。且予縱不得大葬。予死於道路乎。(論語・子罕篇)

訓點

子疾病。子路使門人爲臣。病間曰。久矣哉。由之行詐也。無臣而爲有臣。吾誰欺。欺天乎。且予與其死於臣之手也。無寧死於二三子之手乎。且予縱不得大葬。予死於道路乎。

【釋義】「疾、病」病氣が重くて、危篤状態になつたのをいふ。「病」は「疾」の重くなつたのをいふ。「子路使門人爲臣」子路の意では、孔夫子は嘗て大夫であつて、家臣もあつたから、門人を家臣として葬式を営まうとしたのである。「病間」病苦の間隙、即ち少し氣分のよい時である。「由」子路の名。「子路」は其の字。「欺、天乎」天は聰明であるから、欺き得るものでないの意。「二三子」門弟子を親しんでいつた語。「大葬」君臣の大禮を備へて葬すること。「死於道路」死體を道路に棄てて葬式を営まない。「通解」孔夫子の病勢が非常に重くなつた時、門人の子路は萬一の場合を慮つて、門人を家臣に仕立てて御そばに侍せしめた。孔夫子は少し氣分の快くなつた時に曰はれるやう、なんと久しい事であるわい、由の

いつはりを行ふのは。今自分には家臣がないのに、家臣があるやうにこしらへる。そんな事をして自分は誰をだます事が出来よう。天々だます事は固より出来ない。實につまらぬ事だ。それに又、自分は、そんな家臣の手で死ぬより、お身たち可愛い、弟子共の手で死んだ方がましではないか。それに又、自分は、よしや家臣の禮の備つた大葬は出来ないでも、現在お前達があるのだから、自分は死んでも、よもや道ばたに捨てられて葬られぬやうな事もあるまい。」と。

【補説】○「久矣哉」は、「久シケルカナ」と訓む。「矣哉」は、感動形を表してゐる。○「久矣哉、由之行許也」は、「由之行許也、久矣哉」の倒裝形である。○「子路使門人爲臣」については、孔夫子が魯の國の宰相であつた時には、家臣があつたが、今は已に其の位を去つて居るからそれがない。所が子路は、師匠思ひの氣の勝つた男で、孔夫子程の大聖人を、家臣も無い庶人の禮で葬るに忍びない。そこで師を尊敬するの餘り、萬一に處して豫め門人を家臣に仕立てて置いたといふのである。○「無臣而爲有臣」の「而」は逆接に訓む。随つて、「無」は「ナキニ」と訓むことを見逃してはならぬ。○「吾誰欺」「欺天乎」の「誰」は、「誰」は、共に反語の一形式である。「誰」にはヲカ送ることに注意。○「且子與其死於臣之手也、無寧死於二三子之手乎」の「與其」は「其ノ」シヨリハ、ムシロ「カ」と訓んで、抑揚の形式を表したものである。特に「無寧」の二字をムシロと訓むことを記憶して置くべきである。○「且子縱不得大葬」の「縱」は、「タトヒ」トモと訓み、假定の一形式であり、「子死於道路乎」の「乎」は、反語の一形式である。

〔見〕

鳴呼	□	夫 <small>ナルカナ</small> 〔邪〕
噫嘻	□	哉 <small>ナル</small>
於戲	□	矣乎 <small>ナルナ</small>

なんとまあ——であるわい。

まことに——ではないか。

此等は何れも、「アア、——ナルカナ」と訓み、感動詞「嗚呼」・「噫嘻」・「於戲」と、歎尾詞「夫」・「哉」・「矣乎」が併用された場合で、「ナントマア——デアルワイ」「マコトニ——デハナイカ」と譯す。此の他にも、このやうな形のもがまゝあることに注意せねばならぬ。

孰謂少者歿、而長者存。強者夭、而病者全乎。嗚呼、其信然邪。其夢邪。其傳之非其眞邪。信也。吾兄盛德、而夭其嗣乎。汝之純明、而不克蒙其澤乎。少者強者而夭歿。長者衰者而存全乎。未可以爲信也。

(古文眞寶後集及唐宋八家文・韓愈「祭十二郎文」)